

高
野
遺
跡

高 野 遺 跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第65集

2006年

2006年

日 田 市 教 育 委 員 会

日田市教育委員会



遺跡全景写真（北から）

序 文

高野遺跡は日田市の西側、大肥川沿いに開けた谷の南部に位置します。大肥川の谷は平成9年から大規模な農業基盤整備事業が行われ、それに伴って発掘調査を実施してきました。その結果、縄文時代から江戸時代にいたる遺跡や遺構、遺物が発見され、大肥川流域の歴史が次第に明らかとなっていました。

本書で報告いたします高野遺跡は、平成14・15年度に発掘調査を行って、弥生時代中期から後期や中世の遺構や数多くの遺物が発見され、夜明地区では大規模な弥生遺跡であることが判明しています。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後文化財の保護のために、また地域の歴史や学術研究、学校の教材などとして、ご活用・ご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業中に多大なるご指導を賜りました別府大学下村智先生をはじめ、ご協力いただきました地元の方々、さらには作業員の皆様方に対して心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

日田市教育委員会

教育長 謙山康雄



高野遺跡出土遺物の地元展示
(平成16年度の夜明出張展示より)

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成14・15年度に実施した高野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大明地区県営担い手育成基盤整備事業工事に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が発掘調査主体となり実施した。
3. 調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課（現日田市農林経済部農政推進課）、大明地区ほ場整備組合組合長 森山有男氏のご協力をいただいた。
4. 調査現場での実測は雅企画有限会社に委託した他、土居・渡邊・若杉が行い、写真撮影は若杉が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図のうち、雅企画有限会社に委託したものと若杉が作成したものを使用し、製図については雅企画有限会社の委託によるものを使用したほか、中川照美（日田市文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
6. 空中写真は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
7. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）撮影による。
8. 個別実測図面中の方位角は磁北である。
9. 写真図版に付した数字番号は実測図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集は若杉があたった。



日田市の位置

本 文 目 次

I 調査に至る経過と組織	1
(1) 県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要	1
(2) 調査に至る経過	1
(3) 調査経過	3
(4) 調査組織	3
II 遺跡の立地と環境	5
III 調査の記録	9
(1) 調査の概要	9
(2) 積穴住居	9
(3) 掘立柱建物	33
(4) 溝	42
(5) 積穴遺構	43
(6) 円形周溝状遺構溝	43
(7) 土坑	43
(8) 豊棺墓	65
(9) その他の遺物	65
IV まとめ	68

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/2,500)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)	6
第3図 遺構配置図 (1/400)	7.8
第4図 基本土層図(1/30)	9
第5図 1号積穴住居実測図 (1/80)	9
第6図 2号積穴住居実測図 (1/80) 及び出土土器実測図 (1/4)	10
第7図 3号積穴住居実測図 (1/80)	11
第8図 3号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	12
第9図 4号積穴住居実測図 (1/80)	13
第10図 4号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	13
第11図 5号積穴住居実測図 (1/80)	14
第12図 5号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	14
第13図 6号積穴住居実測図 (1/80)	15
第14図 6号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	15
第15図 7号積穴住居実測図 (1/80)	16
第16図 7号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	16
第17図 8号積穴住居実測図 (1/80)	17
第18図 9号積穴住居実測図 (1/80)	17
第19図 8・9号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	18
第20図 10号A・B積穴住居実測図 (1/80)	19
第21図 10号A・B積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	19
第22図 11号積穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)	20
第23図 12号A・B積穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)	20
第24図 13号積穴住居実測図 (1/80)	21
第25図 13号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	21
第26図 14号積穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)	22
第27図 15号積穴住居実測図 (1/80)	22
第28図 15号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	22
第29図 16号積穴住居実測図 (1/80)	23
第30図 16号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	23
第31図 17号積穴住居実測図 (1/80)	24
第32図 17号積穴住居出土遺物実測図 (1/4)	24
第33図 18号積穴住居実測図 (1/80)	25

第34図	18号竪穴住居出土遺物実測図(1) (1/4・1/6・1/8)-----	25
第35図	18号竪穴住居出土遺物実測図(2) (1/4)-----	26
第36図	19号竪穴住居実測図 (1/80)-----	27
第37図	19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)-----	27
第38図	20号竪穴住居実測図 (1/80)-----	29
第39図	20号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)-----	29
第40図	21号竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)-----	30
第41図	22号竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)-----	30
第42図	23号竪穴住居実測図 (1/80)-----	31
第43図	23号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)-----	32
第44図	掘立柱建物実測図(1) (1/100)-----	34
第45図	掘立柱建物実測図(2) (1/100)-----	36
第46図	掘立柱建物実測図(3) (1/100)-----	37
第47図	掘立柱建物実測図(4) (1/100)-----	39
第48図	掘立柱建物実測図(5) (1/100)-----	40
第49図	掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3・1/4)-----	41
第50図	1号溝実測図 (1/100) 及び出土遺物実測図 (1/3)-----	41
第51図	1・2号竪穴遺構実測図 (1/80)-----	42
第52図	1号円形周溝状遺構実測図 (1/80)-----	42
第53図	1・2号竪穴遺構及び1号円形周溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)-----	42
第54図	土坑実測図(1) (1/50)-----	44
第55図	土坑実測図(2) (1/50)-----	46
第56図	土坑実測図(3) (1/50)-----	49
第57図	土坑実測図(4) (1/50)-----	51
第58図	土坑実測図(5) (1/50)-----	53
第59図	土坑実測図(6) (1/50)-----	56
第60図	土坑実測図(7) (1/50)-----	59
第61図	土坑実測図(8) (1/50)-----	61
第62図	土坑出土遺物実測図(1) (1/4・1/3)-----	62
第63図	土坑出土遺物実測図(2) (1/4・1/6)-----	63
第64図	1号妻棺墓実測図 (1/30)-----	65
第65図	1号妻棺実測図 (1/6)-----	65
第66図	柱穴及びその他の出土遺物実測図 (1/4・1/3)-----	66
第67図	出土石器実測図(1) (2/3・1/2)-----	66
第68図	出土石器実測図(2) (1/2・1/3)-----	67
第69図	出土石製品、鉄鏃、土製品実測図 (1/2・2/3・1/1)-----	67

写真図版目次

巻頭写真版 遺跡全景
 写真図版1 遺跡全景
 写真図版2 1～7号竪穴住居
 写真図版3 8～15号竪穴住居
 写真図版4 16～18号竪穴住居
 写真図版5 18～23号竪穴住居
 写真図版6 掘立柱建物
 写真図版7 掘立柱建物、溝、竪穴遺構、円形周溝状遺構
 写真図版8 1～7号土坑
 写真図版9 8～25号土坑
 写真図版10 26～46号土坑
 写真図版11 48～56号土坑
 写真図版12 57～65号土坑
 写真図版13 66～72号土坑、妻棺墓
 写真図版14 遺物写真1
 1
 写真図版26 遺物写真13
 写真1 夜明小学校体験発掘風景
 写真2 3号竪穴住居土層堆積状況
 写真3 18号竪穴住居土層堆積状況
 写真4 19号竪穴住居土層堆積状況

表 目 次

第1表	県営圃場整備事業に伴う調査一覧
第2表	出土土器観察表(1)
第3表	出土土器観察表(2)
第4表	出土土器観察表(3)
第5表	出土土器観察表(4)
第6表	出土土器観察表(5)
第7表	出土土器観察表(6)
第8表	出土石器観察表
第9表	出土石製品観察表
第10表	出土鐵器観察表
第11表	出土土製品観察表



写真 1 夜明小学校体験発掘風景

I 調査に至る経過と組織

(1) 県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要

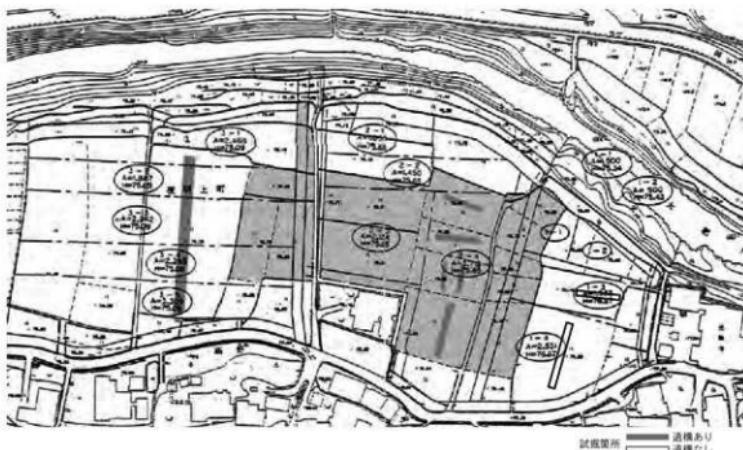
県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に位置する谷地である大明地区一帯の105ha（最終対象面積94.2ha）を対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施などを含めたモデル営農団地を創設すること目的に平成9年度より事業が開始された。これを受けた平成9年4月15日には大分県教育委員会による「農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財の分布調査結果について」の通知文書が出され、この一帯が文化財の調査を要する地区として判定された。平成9年4月28日には大分県日田地方振興局耕地課（以下、耕地課）大明地区全体の工事対象箇所に関する埋蔵文化財の所在の有無についての照会文が提出され、これを受けて事業主体者である耕地課と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取扱いの協議を実施することになった。

これらの協議の結果、対象地域が周知の遺跡（大肥条里遺跡）に含まれること、基盤整備工事は全部で14工区（大きくは3工区）に分かれ、年度ごとに各工区の工事を実施する計画であることなどから、工区ごとに事前の試掘調査を実施することになった。なお、各工区の詳細については、第1表を参照されたい^[1]。

(2) 調査に至る経過

県営圃場整備事業大明地区的工事が進む中で、平成14年9月30日に高野工区（4ha）を含めた4工区（計13ha）の試掘調査依頼が提出された。これらの工事は大明地区では最終事業にあたり、平成15年度中に工事を完成させることになっていた。そのため、早急に遺跡の有無を確認する必要があり、稲の収穫を待って、平成14年11月18日～28日の期間で試掘調査を行った。

その結果、高野工区・古屋敷工区・祝原工区の3工区で遺跡の存在が明らかとなった。これを受



け、耕地課との間で、遺跡の取扱いについての協議を行った。3工区のうち、工事に伴い遺構面まで掘削が及ぼす、遺構を保護するのに十分な深さがある箇所、ならびに盛土により保存される箇所については工事を許可し、残りの遺構面が損なわれる箇所について検討することになった。その結果、高野遺跡については、約9,200m²が工事により掘削されることから、この範囲を対象として記録保存の発掘調査を実施することになった。

また、調査対象となった高野工区・古屋敷工区・祝原工区は、平成15年度の工事完了予定であったことから、調査期間等の調整が困難になることが予想されたため、高野工区は平成14年度中に先行して調査に着手し、古屋敷・祝原工区については平成15年度当初から調査を行うことで、県耕地課と協議、合意に至った。

契約期間は平成14年度が平成15年1月14日～平成15年3月28日、平成15年度が当初は平成15年4月14日～平成15年12月26日としたが、遺構が予想以上に多く、遺物量も膨大であったため、調査費の増額、ならびに契約期間を平成16年3月12日まで延長することで変更契約を行った。平成16年度は整理作業を実施し、平成16年4月5日～平成17年2月15日の間、また平成17年度は報告書作成を実施し、平成17年4月20日～平成18年3月15日の間、委託契約を取り交わした。

第1表 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

調査年度	工区名	試験結果	時代	坑道	遺跡名	発掘調査年度	発掘調査期間	調査面積 (m ²)	備考
平成9年度	鷹田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	—	—	—	—	試掘調査のみ
平成9年度	今中工区	なし	—	工事実施	—	—	—	—	試掘調査のみ
平成9年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用骨壺蓋	弥生時代～中世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成10年度	98.07.07～98.12.30	10,000	A～C区、概ねならびA区報告済
平成10年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成11年度	99.05.16～00.01.17	5,100	報告済
平成10年度	上村工区	壁穴、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28～99.10.29	950	報告済
平成10年度	茶屋ノ瀬工区	柱穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	—	—	—	—	試掘調査のみ
平成10年度	小鶴工区	壁穴住居、溝、柱穴	弥生時代	盛土保存	—	—	—	—	試掘調査のみ
平成11年度	鶴洞内工区	土坑、柱穴、包含層	縄文時代	発掘調査	大肥下河内	平成12年度	00.12.04～01.02.28	5,950	報告済
平成11年度	吉竹工区	壁穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12～13年度	01.01.29～01.05.24	8,270	報告済
平成13年度	大肥工区	壁穴住居、道路、廐	弥生時代～古墳時代、石棺墓	発掘調査	大肥遺跡	平成14年度	02.05.27～03.02.13	8,200	A～C区、うちA-1区は報告済
平成13年度	竹本工区	なし	—	工事実施	—	—	—	—	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	壁穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14～15年度	03.01.16～03.10.20	9,200	本報告
平成14年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19～03.10.19	7,100	報告済
平成14年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19～03.08.04	4,500	報告済
平成14年度	白岩工区	なし	—	工事実施	—	—	—	—	試掘調査のみ

*網掛けは発掘調査実施跡

(3) 調査経過

高野遺跡の調査経過については、調査日誌に基づき略述する。

平成14年度（2002）

- 1月16日／重機による表土剥ぎを開始する。
- 2月18日／作業員を投入し、遺構検出を開始する。
- 2月25日／全体図の作成を開始する。
- 3月14日／遺構の掘り下げを開始する。北部中学校生徒を対象に職場体験を実施する。
- 3月18日／遺構実測を開始する。
- 3月20日／平成14年度の作業を終了する。

平成15年度（2003）

- 4月28日／平成15年度の作業を開始する。
 - 5月27日／夜明小学校児童を対象に発掘体験を実施する。
 - 5月28日／別府大学・下村智助教授（現教授）に現地にて指導を受ける。
この間、数回の台風対策を行う。
 - 10月1日／調査区北側の調査が完了する。
 - 10月17日／全ての遺構の掘り下げが完了する。
 - 10月18日／遺構の写真撮影・実測作業が完了する。
 - 10月20日／機材の撤収を行い、調査を終了する。
- 調査終了後の10月23日には日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、10月30日に埋蔵物の文化財認定を受けた。整理作業は平成15年2月24日～平成16年12月24日の間、実施した。

(4) 調査組織

なお、調査関係者は以下のとおりである。（職名は当時のままとしている）

平成14年度（2002） 試掘調査・発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）

調査事務 田中伸幸（日田市教育委員会文化課文化財管理係長兼理藏文化財係長）

園田恭一郎（同文化課主任）酒井 恵（同文化課主事補）

調査担当 若杉竜太（日田市教育委員会文化課主事）

調査員 土居和幸（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主査）試掘担当

行時桂子（同文化課主任）渡邊隆行（同文化課主事）

発掘作業員 石井アヤ子 石井チエ子 石井勝 一ノ宮真彦 一ノ宮森男 井上春枝 岡部進

岡部寿美恵 梶原一二三 北向チズ子 坂本サツキ 原田寅夫 堀英子 森山スミ子

森山夏男 森山八重子 森山恒己 森山文雄 森山征敏 森山幸雄 山下勇美子

古田太 三保エイ子 森山熊夫 森山春義 柳原貢 山下アヤ子 和田常次郎

和田紀子 渡辺吉之助

整理作業員 朝倉眞佐子 穴井トヨ子 石田紀代子 石松裕美 伊藤一美 伊藤弘子 井上とし子

宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒト工 川原君子 黒木千鶴子 坂口豊子 坂本和代
佐藤みちこ 杉森久恵 中原琴枝 聖川暢子 平川優子 藤野美音 安元百合
吉田千津子 和田ケイ子

平成15年度（2003）発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～平成15年7月

諫山康雄（ 同 教育長）平成15年8月～

調査指導員 下村 智（別府大学助教授）

調査統括 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）

調査事務 佐藤 晃（日田市教育委員会文化課主幹兼埋蔵文化財係長）

園田恭一郎（同文化課埋蔵文化財係主査）酒井 恵（同文化課主事補）

調査員 土居和幸（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主査）行時桂子（同文化課主任）

渡邊隆行（同文化課主事）

調査担当 若杉竜太（日田市教育委員会文化課主事）

調査補助員 杉森久恵 藤野美音

発掘作業員 安心院照雄 足立和彦 足立米子 穴井昌生 有富淑子 池田貞夫 謙元正隆

石井アヤ子 石井チエ子 石井俊政 石井勝 一ノ宮高喜 一ノ宮真彦 一ノ宮森男

伊藤智恵子 井上春枝 岡部寿美恵 岡部進 梶原一二三 蒲池妙子 北澤幾子

北向チズ子 熊谷よし子 小下一 五反田静子 後藤孝市 財津利枝 財津由太

坂本サツキ 高倉厚己 高倉知子 高倉富美子 高野瞳 田中傳江 田中昇

筒井英治 中尾タマエ 中島カズ子 永野節子 原和義 原新一 原田寅夫

平原知義 古田太 堀英子 本田早苗 松岡初次 三俣エイ子 森山熊夫

森山スミ子 森山恒己 森山夏男 森山春義 森山文雄 森山征敏 森山八重子

森山幸雄 柳原貢 山下アヤ子 山下勇美子 行村シズエ 吉田勝秋 吉長利夫

和田常次郎 和田紀子 渡辺吉之助

整理作業員 朝倉眞佐子 穴井トヨ子 石松裕美 井上とし子 宇野富子 梶原ヒト工

黒木千鶴子 坂本和代 佐藤みち子 田中静香 中原琴枝 平川優子 安元百合

吉田千津子 和田ケイ子

来訪者 橋口達也 馬田稔（九州歴史資料館）岸本圭（福岡県教育委員会）

岩下新一（宝珠山村教育委員会）

平成16年度（2004）整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 謙山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）

調査事務 高倉隆人（日田市教育委員会文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

伊藤京子（同文化課埋蔵文化財係副主幹）中村邦宏（同文化課主事補）

調査員 土居和幸（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主査）行時桂子（同文化課主任）
渡邊隆行（同文化課主事）
報告書担当 若杉竜太（日田市教育委員会文化課主任）
整理補助員 杉森久恵 藤野美音
整理作業員 朝倉真佐子 穴井トヨ子 伊藤一美 宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒトト 川原君子
黒木千鶴子 坂口豊子 坂本和代 佐藤みちこ 田中静香 聖川暢子 平川優子
吉田千津子

平成17年度（2005）報告書作成・印刷

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 謙山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 後藤 清（日田市教育委員会文化財保護課長）
調査事務 高倉隆人（日田市教育委員会文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）
伊藤京子（同文化財保護課埋蔵文化財係専門員）中村邦宏（同文化財保護課主事補）
調査員 土居和幸（日田市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係副主幹）
今田秀樹（同文化財保護課主任）行時桂子（同文化財保護課主任）
渡邊隆行（同文化財保護課主任）矢羽田幸宏（同文化財保護課主事補）
報告書担当 若杉竜太（日田市教育委員会文化財保護課主任）

II 遺跡の立地と環境

高野遺跡は日田市大字夜明字高野に所在し、現在の住居表示による夜明上町に該当する。

日田盆地の西を流れる大肥川は福岡県朝倉郡東峰村（旧小石原村）皿山を源とし、日田市最北端の岳滅鬼山を源とする鶴河内川が合流して河岸段丘面を形成しながら南下し、三隈川（筑後川）と合流する。この大肥川が形成する谷は、鶴河内川との合流地点から三隈川との合流地点まで長さ約4.7km、段丘面の幅は最大で約400mと細長く、狭隘な地形となっている。さらに細かくみれば、谷の北側で広がる段丘面は南下するほど狭くなり、三隈川との合流地点から上流約2km付近で一旦収束し、そこから徐々に広がりながら段丘面を形成しつつ、三隈川と合流する。高野遺跡は谷の収束地点のすぐ南側、再び段丘面が開ける標高約75m付近に位置する。

統いて、大肥川流域の歴史的背景を概観していく。この地域は近年の圃場整備事業に伴う発掘調査が行われる以前は、いわば遺跡の空白地帯であり、周知された埋蔵文化財包蔵地も数箇所を数えるのみであったが¹⁾、平成10年以降の発掘調査により、その内容が明らかになってきた。この地域の遺跡については、これまでに数箇所の発掘調査報告書が刊行されており、内容の重複する部分が多いので、詳細は既報告²⁾に譲り、ここでは谷南側の夜明地区に限って概観していく。

この地域で最も古い生活の痕跡として確認されるのは、縄文時代からである。古屋敷遺跡³⁾では、前期・後期・晚期の遺物包含層が確認された。また、大肥祝原遺跡⁴⁾では後期から晚期にかけての遺物包含層や集石・土坑などが見つかっている。

弥生時代に入ると、大肥地区では遺跡数が一気に増加するが、夜明地区では数、内容ともに希薄

である。大肥上村遺跡⁽⁴⁾では後期前半頃の小児用喪棺墓が1基、大肥祝原遺跡⁽⁵⁾では中期から後期にかけての土坑・竪穴が見つかっている。

古墳時代から古代の遺跡については、現在のところ確認されてない。

この時代は、律令国家形成期であり、『和妙類聚抄』によると、日田郡には「父連」「日理」「石井」「在田」「夜開」の5郷が設置されている。夜明地区が何れの郷に含まれるかは、諸説あるが、現在のところ「日理」と「夜開」のどちらかに属していたと考えられる。また、『豊後国図帳』によると、古代後半には大肥川流域は大肥荘として大宰府安楽寺に寄進されている。

中世には古屋敷遺跡⁽⁶⁾で13世紀前半代の建物群が見つかった。また、祝原遺跡⁽⁵⁾では水田層が確認されている。

近世には祝原遺跡⁽⁵⁾で掘立柱建物群が確認されている。

大肥川流域は近年の調査により、繩文時代から近世に至る各時代の様相が明らかになってきたが、その多くは中流域に集中している。下流域は、中流域に比べ遺跡の規模は大きくなはないが、流域全体の歴史的発展の中では、重要な位置を占めると考えられる。

註

(1)『大分県遺跡地図』(大分県教育委員会 1993年)には寺田遺跡(古屋敷遺跡に名称変更)と影ノ木遺跡、条里跡が登録されている。条里跡は谷の大部分を一括りにされていて、その詳細については不明であった。

(2)行時志郎編『大肥中村遺跡－発掘調査概報－』日田市教育委員会 2003

渡邊隆行編『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004

渡邊隆行編『大肥遺跡I－A-1区の調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004

行時桂子編『大肥中村遺跡I』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集 日田市教育委員会 2005

今田秀樹編『大肥下河内遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第63集 日田市教育委員会 2006

(3)渡邊隆行編『古屋敷遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第56集 日田市教育委員会 2004

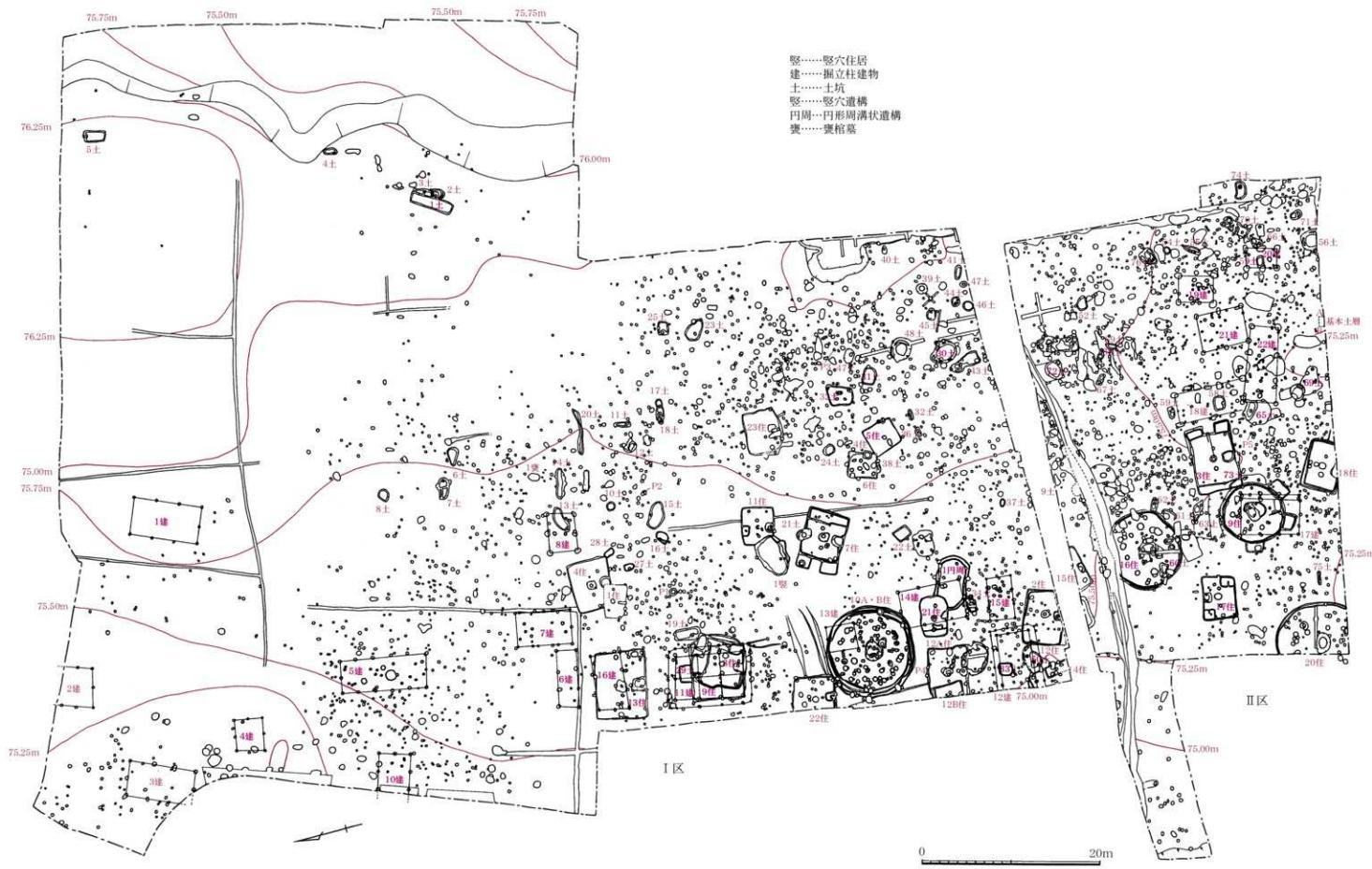
(4)若杉竜太編『大肥祝原遺跡 大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集 日田市教育委員会 2003

今田秀樹編『大肥祝原遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第64集 日田市教育委員会 2006

(5)行時桂子編『祝原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第61集 日田市教育委員会 2005



第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)



第3図 遺構配置図(1/400)

III 調査の内容

(1) 調査の概要

調査区は大肥川とその左岸に迫る丘陵との間の河岸段丘上に位置し、調査面積は9,200m²である。調査区は、里道を挟んで南北に分断されていることから、ここでは便宜的に北側調査区をI区・南側調査区をII区として、説明をしていく。遺構検出面は全面にわたって、基本土層中の4層上面の黄褐色砂質土で、弥生時代・中世の遺構はいずれもこの面で検出された。また、5層以下は、砂層が堆積しており、大肥川の氾濫によるものと考えられる。これは、出土遺物の中に縄文時代前期から晩期に至る遺物が存在することからも窺える。ただし、この時期の明確な遺物包含層の存在は確認できなかった。また、東側は谷状に落ち込んでおり、調査区一帯が、尾根のように周囲より高くなっていたと考えられる。

検出された遺構の分布状況を見てみると、I区では、北側は希薄で南側にいくほど高くなっている。また、I区は東の山側に向かって谷状に落ち込んでいることから、遺構の密度は極めて低い。同じくI区の西側は東側に比べ、遺構密度は幾分高くなっているものの、柱穴群がみられる程度である。一方、I区の南側からII区へかけては、竪穴住居・土坑・柱穴が密集している。この中でも東側に比べて西側、より川に近い地点で密度が高くなっている。

(2) 竪穴住居

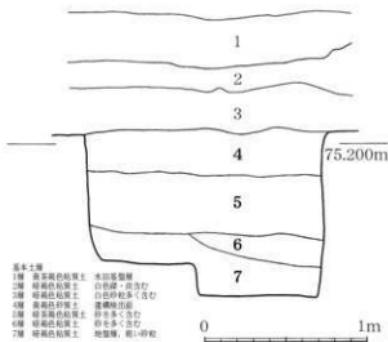
竪穴住居は25軒確認され、主に調査区の西半分に集中して見られた。

1号竪穴住居（第5図 図版2）

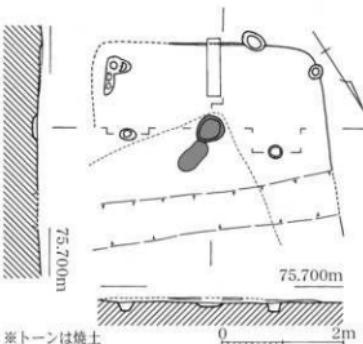
I区のほぼ中央で確認され、上面を大幅に削平されている。4号竪穴住居を切る。規模は東西方向約3.7m、南北方向約3.1m+αで、床面までの深さは約5cmを測る。炉は、ほぼ中央で検出され、その位置から考えて、プランはほぼ正方形になると考えられる。主柱穴は2本確認でき、深さは約15cmである。壁周溝は確認されなかった。

2号竪穴住居（第6・68図 図版2・14）

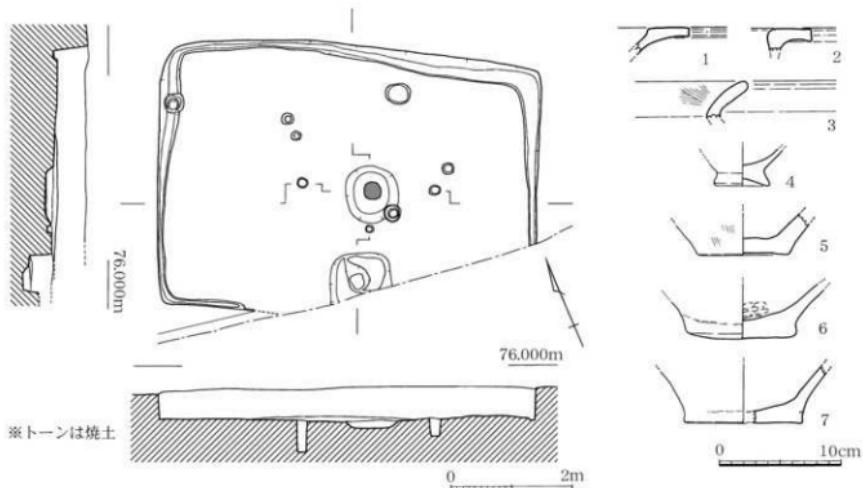
I区の南西端で確認された。規模は東西方向約6.3m、南北方向約4.4mで、床面までの深さは約50cmを測り、長方形プランを呈す



第4図 基本土層 (1/30)



第5図 1号竪穴住居実測図 (1/80)



第6図 2号竪穴住居実測図(1/80)及び出土遺物実測図(1/4)

る。南西側壁は、当初プランを確認出来なかったため、一部掘りすぎている。ほぼ中央には炉が検出され、主柱穴はやや炉寄りに2本確認された。主柱穴の深さは30~50cmである。また、壁周溝はほぼ四周し、南面土坑も検出されたが、ベッド状遺構は確認されなかった。

遺物は弥生土器甕・蓋・高坏のほか、砥石が出土している。

第6図2・4・5は甕である。2は口縁端部を丸く仕上げる。4は若干の上底、5は平底である。1は高坏の口縁部である。内面の突出部はみられない。6は甕の底部である。底面は凸レンズ状を呈し、大きく外反して立ち上がる。

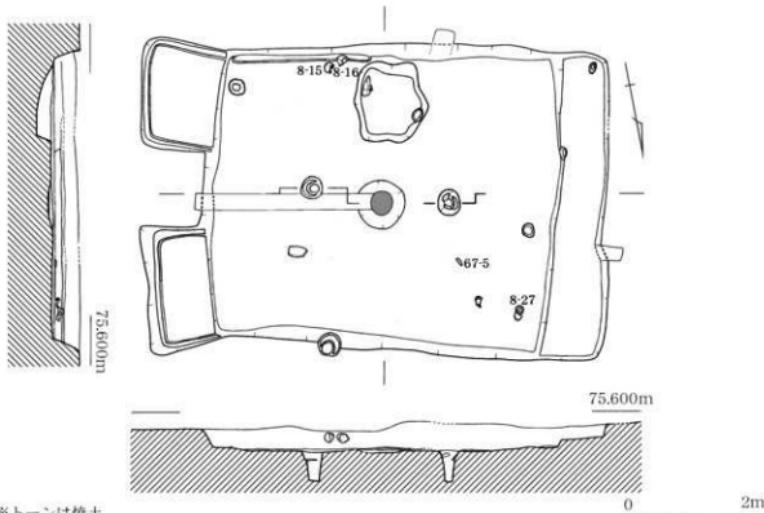
第68図3は砂岩製の砥石である。一端が欠損しているが、全面にわたり研磨痕が残る。

3号竪穴住居 (第7・8・65図 図版2・14・15)

II区のほぼ中央で確認された。規模は東西方向約6.6m、南北方向約5mで、床面までの深さは約40cmを測り、長方形プランを呈する。東側には方形の張出しが2ヶ所見られる。炉はほぼ中央で検出され、それを挟むように主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは約50cmである。ベッド状遺構は東西両側に確認され、東側は張出し部がベッド状になっている。また、壁周溝・南面土坑とともに確認され、壁周溝は張出し部と南壁側の一部に確認されたのみである。

埋土は黒色系の土がレンズ状に堆積しており、中央部には地山ブロック土を含む土が多く見られる。埋土上面の土は自然堆積によるものと考えられ、この上面に含まれる遺物は住居廃棄時には伴わないものと想定される。また、地山直上や壁面付近には、暗黄褐色土の崩落土が堆積しており、壁面付近には比較的完形に近い鉢・器台などの遺物が多く見られた。これらの遺物は住居廃棄時に伴う一括性の高い遺物と想定される。

遺物は、多量の弥生土器の甕・甕・器台・脚付甕などのほか、石庖丁が出土している。



第7圖 3層堅空住居案測圖 (1/80)

第8図1~6は甕である。7~12は複合口縁壺である。14~16は口縁部の屈曲が緩やかであるのに対して、7・9・10は稜が明瞭であり、ある程度の時期幅がみてとれる。また、10の屈曲部はつまみ出すように成形している。13は甕である。口縁は丸味を帯びながら大きく外反する。14は直口壺である。内面には工具ナデを施す。底部はわずかに凸レンズ状である。16は複合口縁壺と思われる。頸部には低い断面三角形の突帯が付き、胴部中位付近が最大径となる。底部は平底である。25は裾が大きく開く高环脚部で、端部を丸く仕上げる。26は脚付の甕であることから、27も同様に甕の脚部と考えられ、ともに端部を丸く仕上げる。28~30は壠台である。28は上位に屈曲部があるタイプである。

第67図5・6は半月形の石庖丁である。ともに安山岩製で、1は片方の端部を欠損するものの、ほぼ完形である。6は半分以上を欠損する。

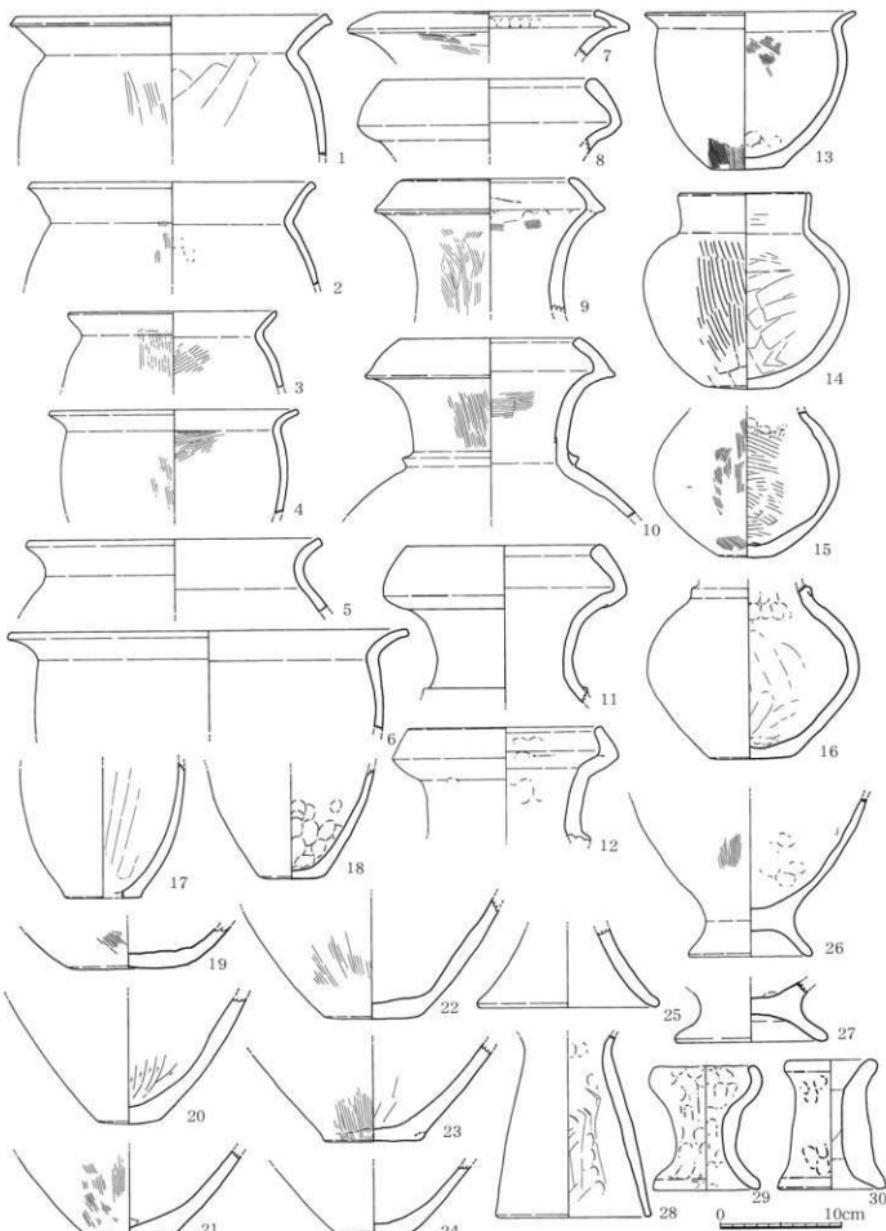
4号竪穴住居（第9・10図 図版2・15・16）

1号竪穴住居の北東側で確認され、これに切られる。規模は東西方向約5.8m、南北方向約4.5m、床面までの深さは約35cmを測り、長方形プランを呈する。炉は床面のはば中央に検出され、それを挟むように主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは約50cmである。南面土坑は検出されたが、ベッド状遺構・壁周溝は検出されなかった。

遺物は、弥生土器の甕・壺が出土している。

第10図1は壺の口縁部である。先端は跳ね上げている。2は直口壺の口縁部であろう。3は錫先形口縁の壺である。内面への突出が大きい。4・9は壺である。4は頸部の屈曲がほとんどなく、短い口縁が付くタイプと思われる。9は底部が凸レンズ状で外反しながら立ち上がる。5は口縁部





第8図 3号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

が大きく内湾する壺である。底面は平底で、内面にはナデ・指押さえの痕跡が明瞭に確認できる。6～8は甕の底部である。いずれも底面は平底で、胴部に向かって大きく外反しながら立ち上がる。

5号竪穴住居(第11・12図 図版2・16)

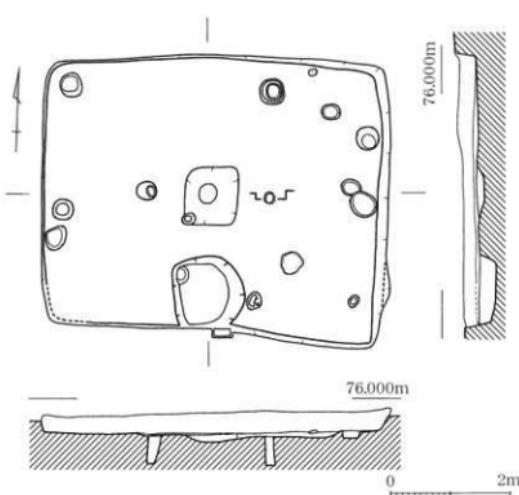
I区の南側で確認され、6号竪穴住居に切られる。規模は東西方向約3.5m、南北方向約3.2m、床面までの深さは約15cmを測り、正方形プランを呈する。炉は床面中央よりやや南西より検出され、主柱穴はやや壁寄りに2本確認された。主柱穴の深さは約10cmである。また、ベッド状造構・壁周溝・南面土坑とともに検出されなかったことから、住居とする根拠に乏しいが、方形プランを呈していることから、ここでは住居として報告する。

遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢が出土している。

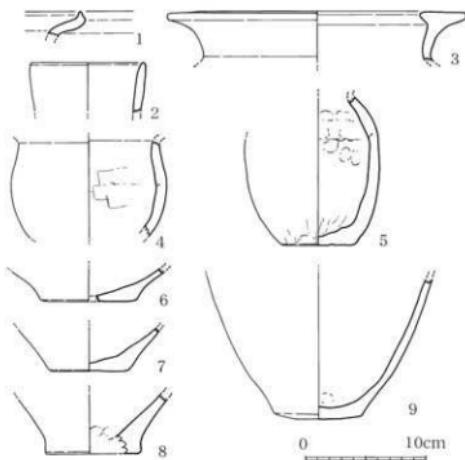
第12図1～4、8・9は甕である。5は壺の口縁部である。内面への突出が大きい。甕は4のように口縁の傾斜がないタイプと3のようにくの字形を呈するタイプがあり、時期幅があるが、後者が主体を占める。6は甕である。厚みのある底部で、ほぼ直立して立ち上がる。7は鉢である。口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げる。

6号竪穴住居(第13・14図 図版2・16)

5号竪穴住居の北西側に隣接して確認された。5号竪穴住居・38号土坑を切り、42号土坑に切られる。規模は南北方向約3.4m、東西方向約2.8m、床面までの深さ約30cmを測り、長方形プラン



第9図 4号竪穴住居実測図(1/80)



第10図 4号竪穴住居出土遺物実測図(1/4)

ンを呈する。炉と思われる焼成面は検出されなかつたが、壁寄りに主柱穴2本が確認された。主柱穴の深さは30~40cmである。また、ベッド状造構・南面土坑は検出できなかつたが、他の住居と同様に方形プランであり、北側には壁周溝が確認されたことから住居として報告する。

遺物は、弥生土器の甕・器台が出土している。

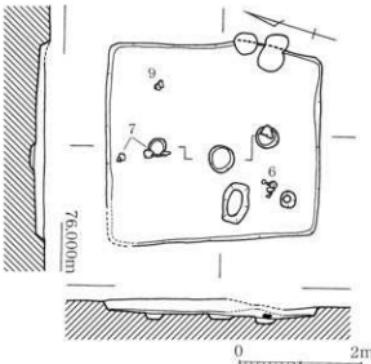
第14図1は甕の口縁ではほぼ水平である。3は器台の脚部で、裾部の開きは小さい。外面全体にわたって、縦方向のハケが施される。

7号竪穴住居 (第15・16図 図版3・16・17)

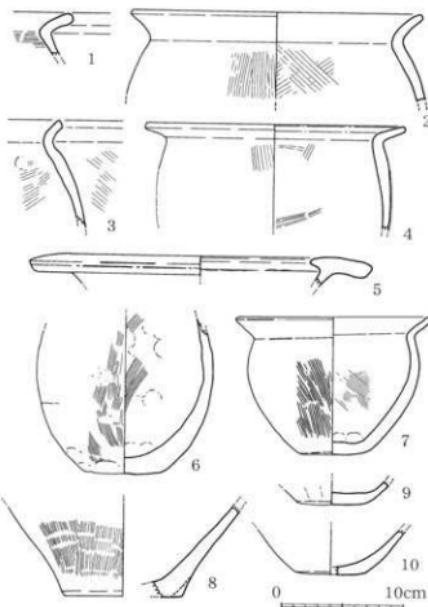
6号竪穴住居の北西側で確認され、21号土坑に切られる。規模は南北方向約5.5m、東西方向約4.6m、床面までの深さ約40cmを測り、長方形プランを呈する。西側には方形の張出しが2ヶ所見られる。炉は床面のほぼ中央に検出され、主軸からはややずれた位置で主柱穴2本が確認された。主柱穴の深さは10~20cmである。また、ベッド状造構は東西両側に確認され、西側は張出し部がベッド状となる。この他、壁周溝は東側のベッド上、北側・西側に検出された。

遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢・支脚・高杯が出土している。

第16図1は壺の口縁部である。端部をやや肥厚させる。4は小型の甕である。胴部の張りはなく、頸部の傾きは緩い。口縁端部は丸く仕上げる。5~8は甕の底部である。7は器壁が厚く、凸レンズ状の底面である。8は内湾して立ち上がり、胴部が大きく開く。9は甕の頸部か。断面台形の突帯が貼り付けられる。10は高杯である。頸部を太く作る。11は支脚である。厚い器壁で、器高の低いタイプである。12は鉢である。口縁はやや外に傾斜しながら立ち上がる。13はジョッキ形土器である。図は底部と胴部を図上復元した。底部は中央部がやや膨らんでおり、外面にはハケ、内底面には指押さえが施される。



第11図 5号竪穴住居実測図 (1/80)



第12図 5号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

8・9号竪穴住居（第17～19図 図版3・17・18）

8号竪穴住居は、I区中央西側で確認され、9号竪穴住居・29号土坑を切り、11号掘立柱建物に切られる。規模は南北方向約3.4m、東西方向約2.6m、床面までの深さ約60cmを測り、長方形プランを呈する。北側と西側に張出し部が見られる。炉は床面のほぼ中央に検出され、そのやや南寄りに炉を挟んで主柱穴2本が確認された。主柱穴の深さは40～55cmである。ベッド状造構は北側から東側にかけて確認された。また、壁周溝・南面上土坑とともに検出され、壁周溝はほぼ四周する。

また、9号竪穴住居は南北方向約3m、東西方向約3.3m、床面までの深さ約25cmの規模で、ほぼ正方形プランを呈する。主軸方向は8号竪穴住居より、やや西側に振れる。また、8号竪穴住居に切られているため、炉や南面上土坑は確認できなかつたが、主柱穴と思われるピットは1本確認できた。深さは約55cmである。また、南側にはベッド状造構を検出し、部分的に壁周溝も確認できた。

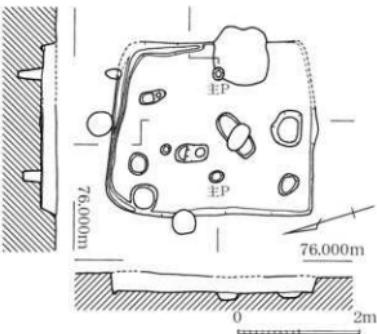
遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢・器台が出土している。

第19図7～9は8号竪穴住居、1～6、10は9号竪穴住居出土である。3は鉢である。半球形を呈するが、底部は凸レンズ状を呈し、分厚い。6は脛部が倒卵状を呈する鉢である。8は支脚である。脚部から口縁部まで、ほぼ直線的に内傾しながら、立ち上がる。口縁部・脚部ともに端部を丸く仕上げる。9・10は器台である。ともに上位に屈曲部がみられる。

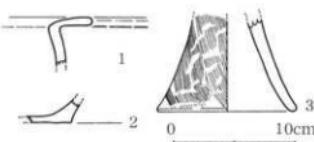
10号A・B竪穴住居（第20・21・67図 図版3・18）

8・9号竪穴住居の南側で確認された。切り合い関係は10号B竪穴住居が10号A竪穴住居を切る。10号A竪穴住居の規模は、南北方向約9.8m、東西方向約10.2mで、ほぼ正円形のプランを呈する。床面までの深さについては、調査中に確認をできなかつたため不明であるが、10号B竪穴住居と同じと推定すれば約20cmと思われる。床面中央には土坑が確認され、この土坑と壁面の中間あたりに円形に巡る9本の主柱穴を検出した。主柱穴の深さは20～45cmである。壁周溝については、南西側の一部に確認できたのみであった。

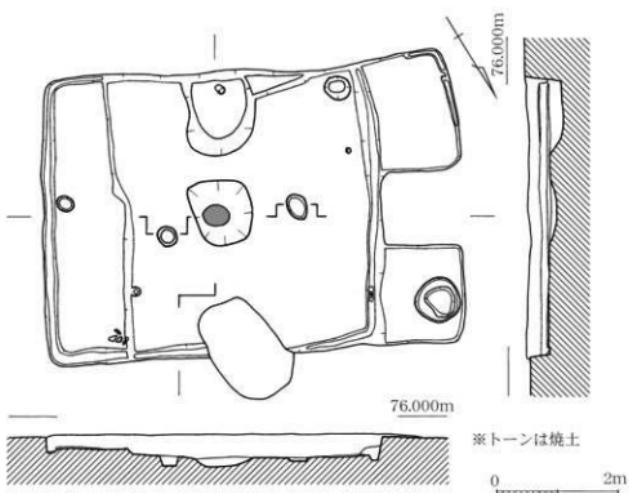
10号B竪穴住居は10号A竪穴住居よりやや規模が小さくなり、南北方向約9.4m、東西方向約9.6mで正円に近い平面形を呈する。床面までの深さは約30cmである。床面中央には土坑が確認され、壁寄りに11本の主柱穴が検出された。主柱穴の深さは30～50cmである。壁周溝は北東側の一部が



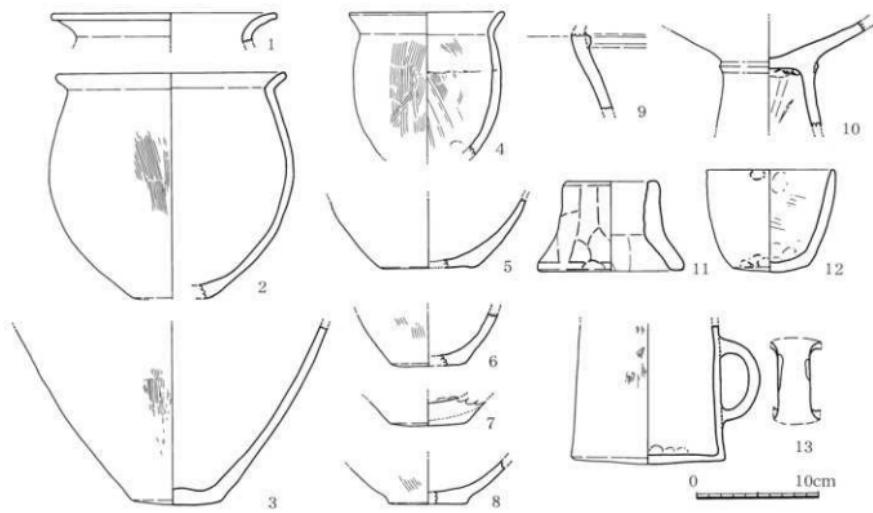
第13図 6号竪穴住居実測図(1/80)



第14図 6号竪穴住居実測図(1/4)



第15図 7号竪穴住居実測図 (1/80)



第16図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

途切れるが、ほぼ壁面の際を全周する。

また、中央土坑付近には炭が検出されたことから、この部分に炉があったと思われる。

遺物は弥生土器の壺・甕・高杯のほか、石庖丁・砥石が出土している。

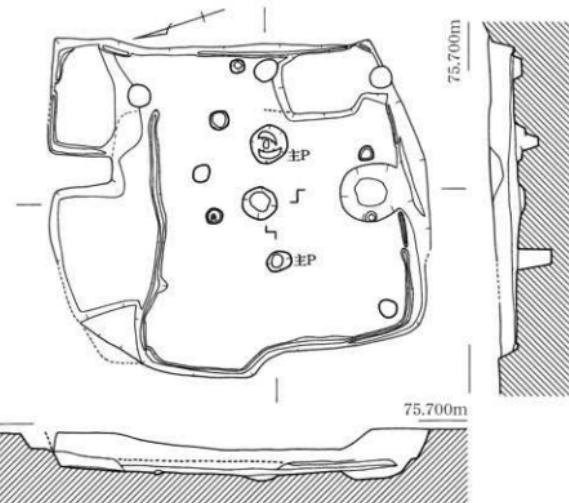
第21図1～3は甕の口縁部で、いずれも端部を跳ね上げている。4は甕である。口縁部は大き

く外反し、先端を丸く仕上げる。頸部下位の残存状況から、胴部の張りはあまりないと思われる。5～7は壺の底部であるが、6は丸底、5・7は上底に仕上げている。9は高壺の脚部で裾部は大きく開き、端部は明瞭な稜を残して仕上げている。10は壺の底部で底面を平底に仕上げている。

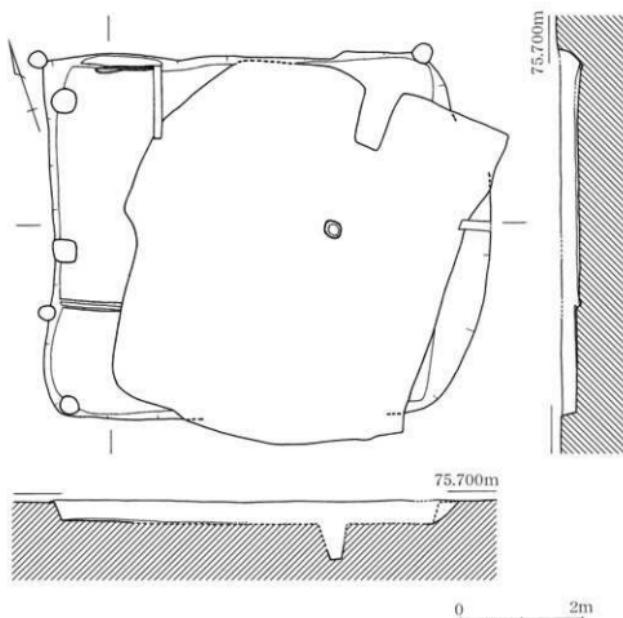
第67図 7～9は石庵丁である。7は頁岩製で楕円形を呈する。8も同様に楕円形を呈するが、結晶片岩製である。9は結晶片岩製で半月形を呈する。第68図4・8は紙石である。4は砂岩製で全面に研磨痕が残る。8は硬質砂岩製で、光沢が見られるほど研磨を受けている。大型の製品である。

11号竪穴住居（第22図 図版3・18）

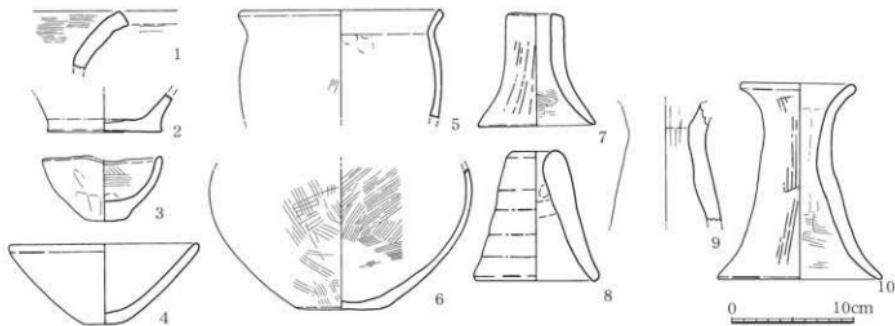
7号竪穴住居の北側で確認され、1号竪穴遺構に切られる。規模は南北方向約3.7m、東西方向



第17図 8号竪穴住居実測図 (1/80)



第18図 9号竪穴住居実測図 (1/80)



第19図 8・9号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

約4.3m、床面までの深さ約20cmを測り、長方形プランを呈する。炉は床面のほぼ中央に検出され、主軸とややすれて、主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは15~25cmである。また、南面土坑は検出できたが、ベッド状遺構・壁周溝は確認できなかった。

遺物は弥生土器甕・鉢のほか、石鎌が出土している。

第22図1・2は甕である。1は口縁部を水平近くに外反させ、端部を肥厚させている。2は口縁部が直線的に大きく開き、端部は鋭く仕上げている。3は鉢で、口縁端部を平坦に仕上げる。4~8は甕の底部で、5が厚底タイプであるほかは上底タイプで両者に若干の時期差がみられる。

第67図1は姫島産黒曜石製の石鎌で、基部に抉入のある凹基無茎鎌である。

12号A竪穴住居 (第23図 図版3・18・19)

10号A・B竪穴住居の南側で確認され、12号B竪穴住居に切られる。規模は南北方向約5.1m+α、東西方向約4.7m、床面までの深さ約20cmを測り、長方形プランを呈する。炉は床面のほぼ中央で検出され、それを抉むように主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは20~30cmである。また、南東側に張出しを持ち、壁周溝・南面土坑とともに検出されたが、ベッド状遺構は確認できなかった。

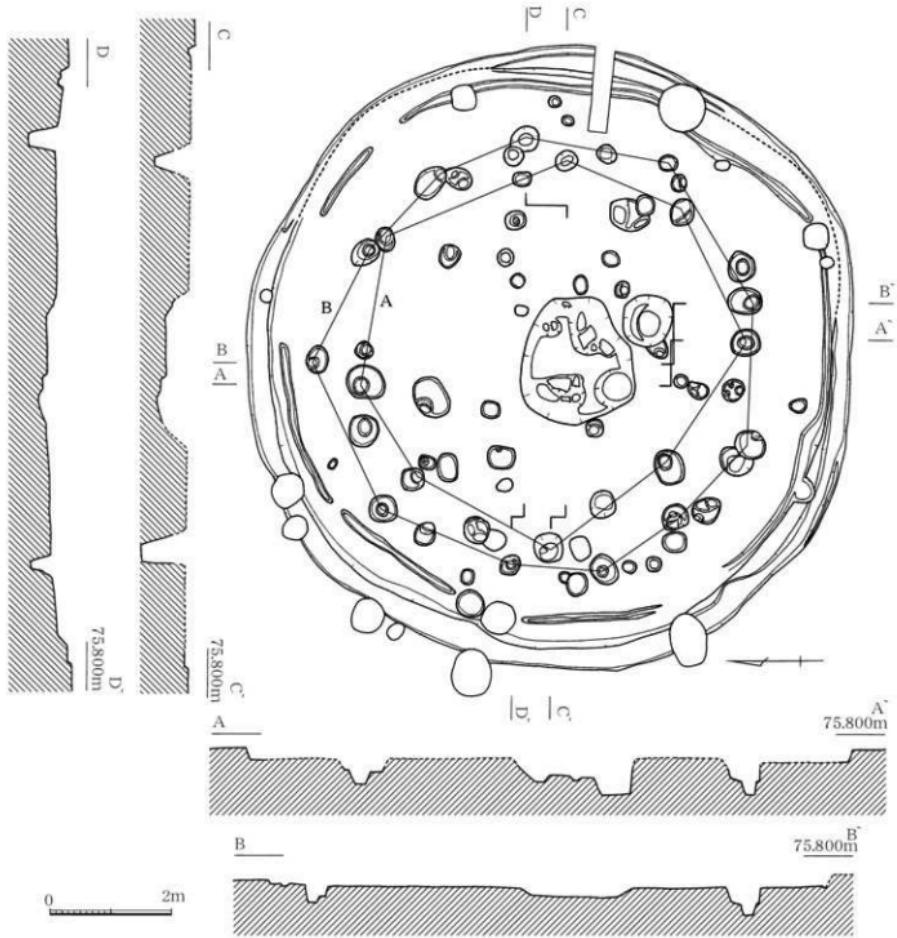
遺物は弥生土器甕・壺もしくは高環のほか、石廻丁・砥石が出土している。

第23図1・2・4はいずれも甕である。1は口縁端部を跳ね上げているが、2は丸味をもったくの字形の口縁、4は平底の底部である。3は脚付の鉢もしくは甕の脚部か。端部を丸く仕上げる。5は手捏土器である。器面全体にわたり、指押さえが見られる。

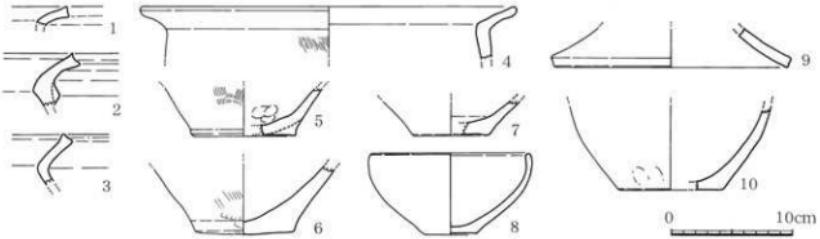
12号B竪穴住居 (第23図 図版3)

12号A竪穴住居の西側で確認され、これを切る。規模は南北方向約3.3m、東西方向約1.7m+α、床面までの深さは約15cmである。炉が西側の調査区壁際で検出されており、これを床面の中心とみれば、東西方向の規模は約3.4mと推定でき、ほぼ正方形のプランになると考えられる。主柱穴は炉に近接して、1本確認され、深さは約40cmである。また、壁周溝は確認面でほぼ全体にわたり検出され、南面土坑も確認できた。

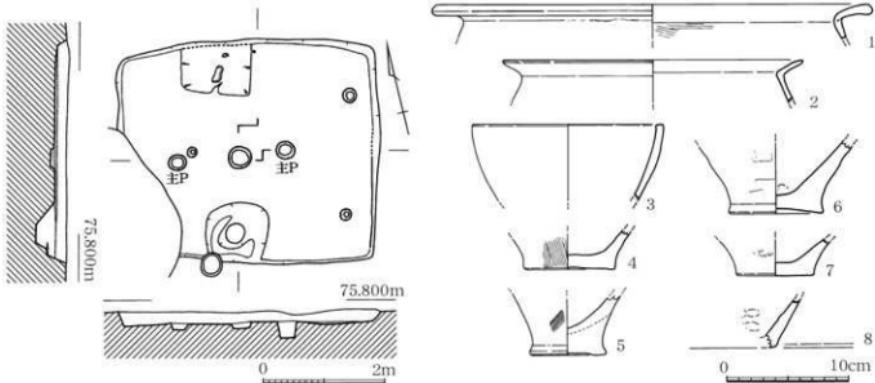
遺物は、弥生土器の小片が出土したのみである。



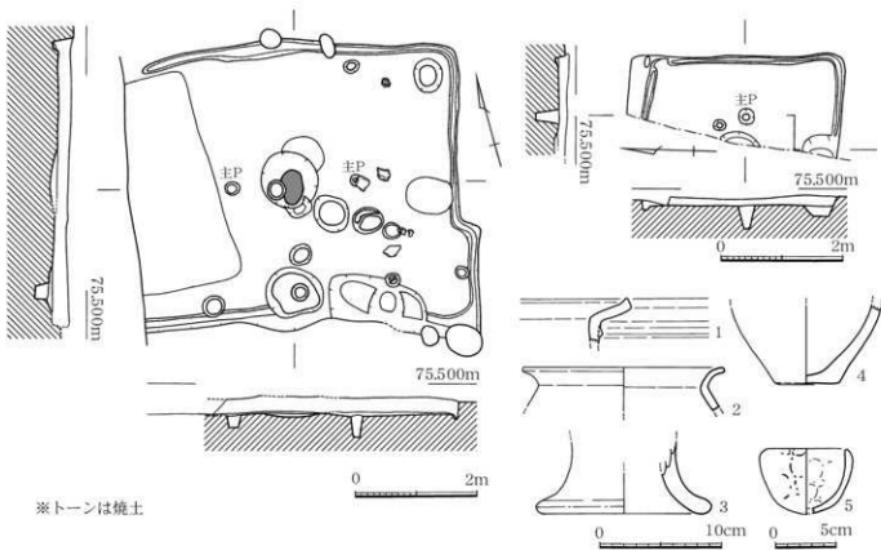
第20図 10号AB竪穴住居実測図 (1/80)



第21図 10号AB竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)



第22図 11号竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)

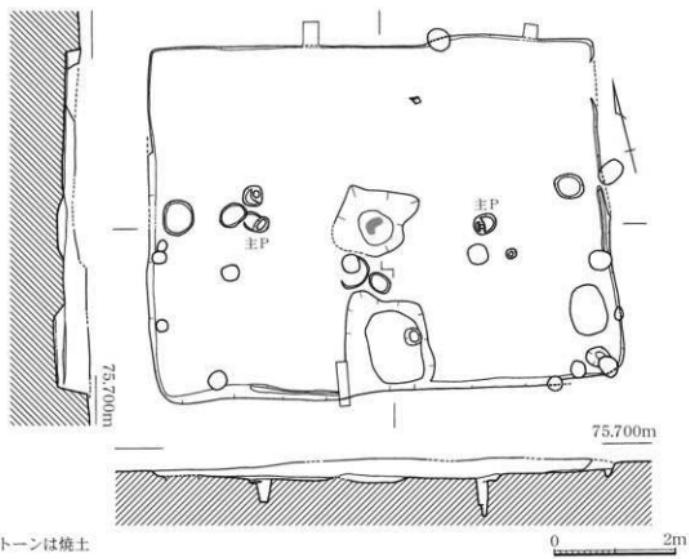


※トーンは焼土

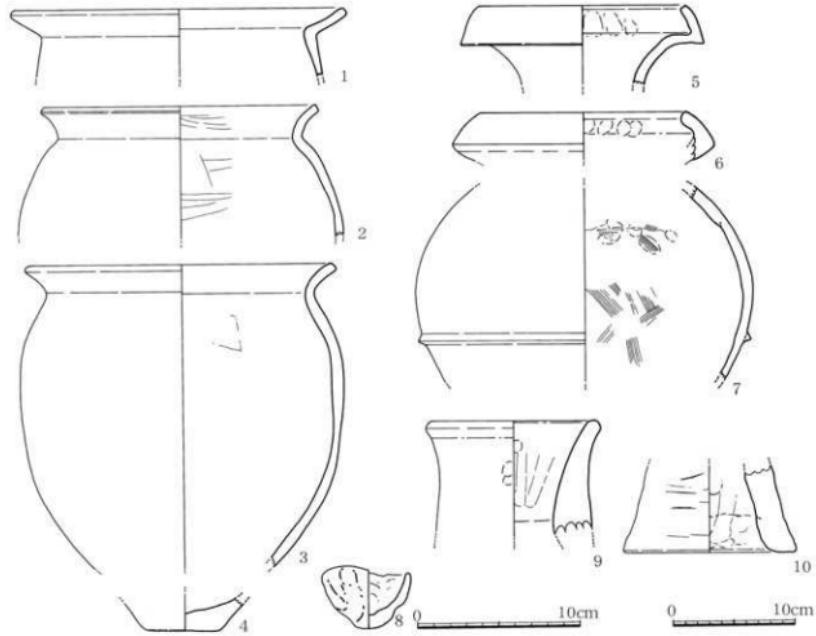
第23図 12号AB竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)

13号竪穴住居 (第24・25図 図版4・19)

8・9号竪穴住居の北側で確認され、16号掘立柱建物に切られる。規模は南北方向約3.5m、東西方向約4.6m、床面までの深さ約30cmを測り、長方形プランを呈する。炉は床面のほぼ中央に検



第24図 13号竪穴住居実測図 (1/80)

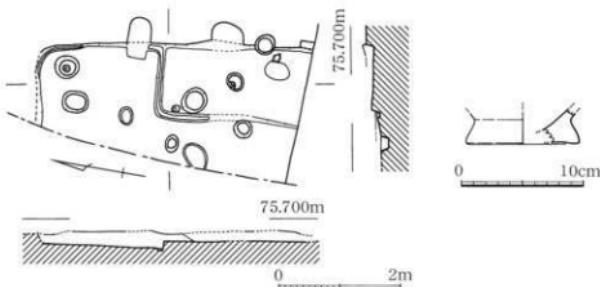


第25図 13号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4, 8は1/3)

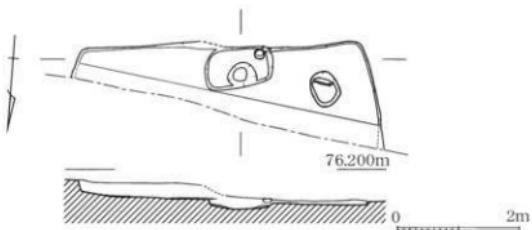
出され、主柱穴は2本ともに炉と両壁の中間あたりに確認された。主柱穴の深さは約40~65cmである。南面土坑は検出されたが、ベッド状造構は確認できず、壁周溝は南壁際に一部確認できたのみであった。

遺物は、弥生土器の甕・壺・器台が出土している。

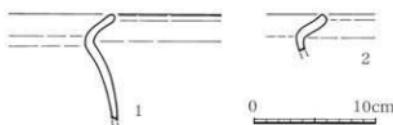
第25図1・2は甕である。ともにくの字形口縁を呈するが、1が直線的なのに対して2は丸味をおびる。5・6は複合口縁壺である。5は屈曲部に明確な稜があるが、6はそれが弱い。9・10は器台である。同一個体か。器壁は厚く、9の口縁部は端部を丸く仕上げ、10の底部外側には稜が明瞭に残る。



第26図 14号AB竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第27図 15号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)



14号竪穴住居 (第26図)

図版4・19)

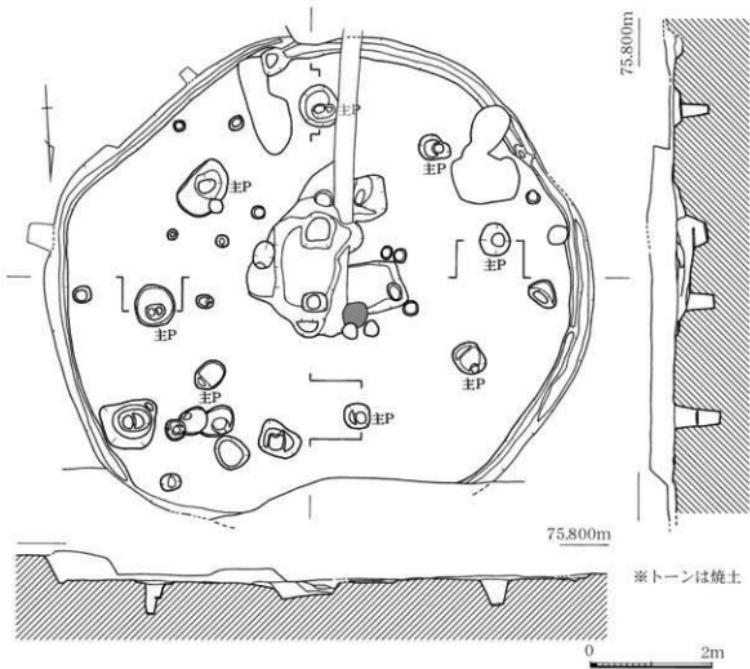
2号竪穴住居の西側で確認され、50号土坑を切る。規模は南北方向約4.4m + α 、東西方向約2.2m + α 、床面までの深さは約30cmで、炉や南面土坑が検出されなかつことから、プランは正方形となるか、長方形となるか、不明である。また、東壁側にはベッド状造構が確認できたが、北東隅で途切れしており、四周しない。主柱穴については、ベッド状造構近くに検出されたビットがその可能性があるが、定かではない。また、壁周溝はベッド状造構の際から東壁沿いに確認できた。

遺物は、弥生土器の甕が出土している。

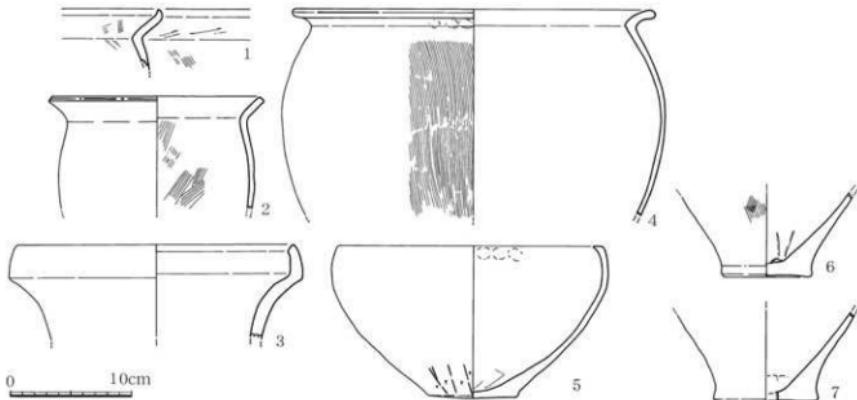
第26図1は甕の底部である。やや上底気味の底面を呈し、立ち上がりは外反気味である。

15号竪穴住居 (第27・28図 図版4・19)

II区の北側、2号竪穴住居の南東側で確認された。規模は南北方向約1.7m + α 、東西方向約4.8m、床面までの深さ約25cmを測る。北側は調査区外へ広がるため、平面形は正方形を呈すか、長方形



第29図 16号竪穴住居実測図 (1/80)



第30図 16号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4, 1は1/8、2・3は1/6)

を呈すか、不明である。主柱穴・炉・ベッド状構造は検出できなかったが、南面土坑が確認された。

遺物は鉄鏃（第69図2）のほか、弥生土器の甕が出土している。

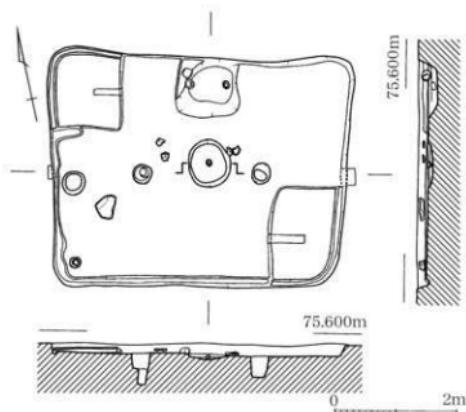
第28図1・2は甕の口縁部である。いずれもぐの字形の口縁で、直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。頸部内面の稜は弱い。

16号竪穴住居（第29・30図 図版4・19・20）

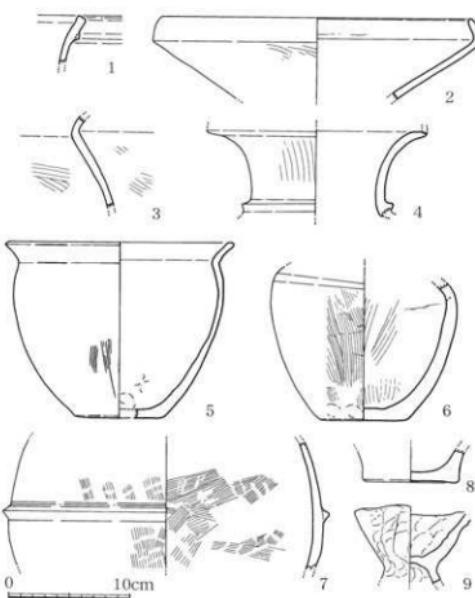
15号竪穴住居の南側で確認された円形住居で、60～62号土坑・1号溝に切られる。規模は南北方向約7.2m+α、東西方向約9m、床面までの深さは約50cmを測る。床面中央のやや東寄りに中央土坑、その西側に炉が検出された。主柱穴は8本で、深さは40～80cmである。また、検出された部分全体にわたって、壁周溝が確認された。

遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢が出土している。

第30図3は複合口縁壺の口縁部である。口縁端部はやや丸味を帯びながら、あまり内傾せずに立ち上がる。5は鉢である。口縁部が大きく内湾する。1・2・4・6・7は甕である。1・2ともにくの字形口縁であるが、1は端部を跳ね上げる。6・7はいずれも平底である。

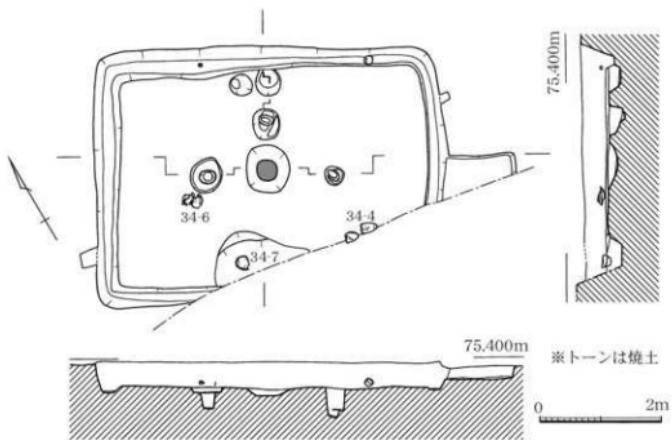


第31図 17号竪穴住居実測図 (1/80)

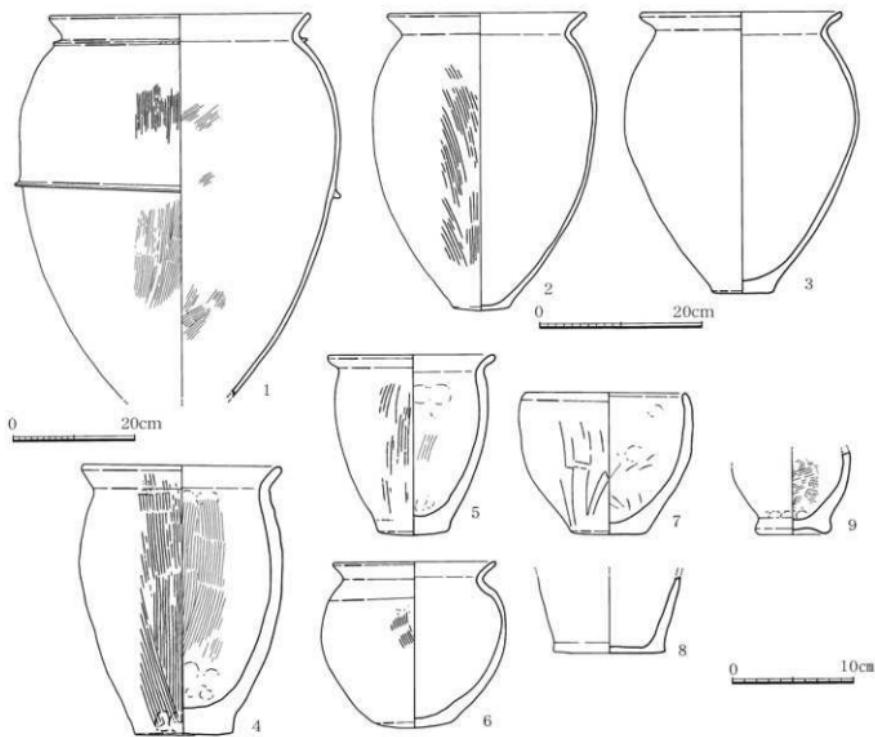


第32図 17号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

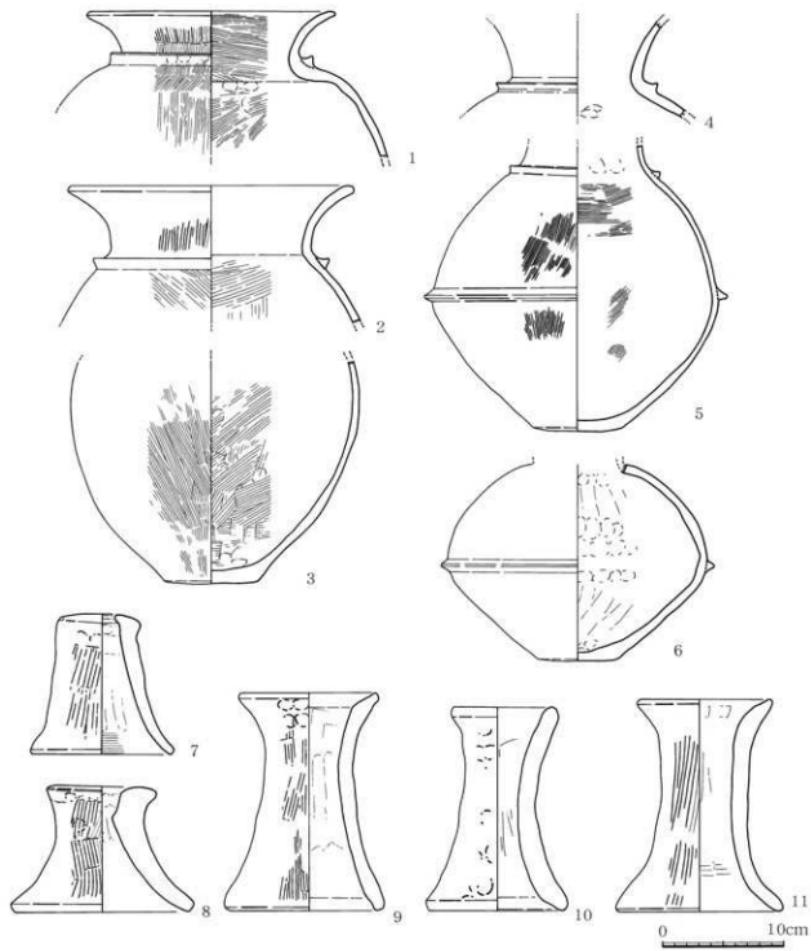
る。5は鉢である。口縁部が大きく内湾する。1・2・4・6・7は甕である。1・2ともにくの字形口縁であるが、1は端部を跳ね上げる。6・7はいずれも平底である。



第33図 18号竪穴住居実測図 (1/80)



第34図 18号竪穴住居出土遺物実測図(1) (1/4, 1は1/8, 2・3は1/6)



第35図 18号竪穴住居出土遺物実測図(2) (1/4)

17号竪穴住居 (第31・32図 図版4・20)

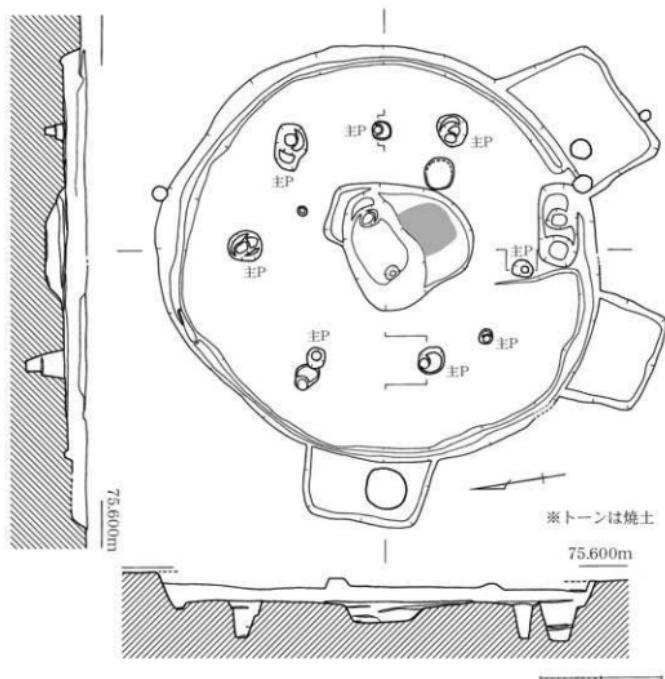
16号竪穴住居の南西側で確認された。規模は南北方向約4.9m、東西方向約3.8m。床面までの深さは約15cmを測り、長方形プランを呈する。床面中央からやや北寄りに炉が検出され、それを挟むように主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは35~50cmである。また、この住居の屋内土坑は南側ではなく、北側に掘り込まれている。ベッド状遺構は北西隅・南東隅に見られ、壁周溝が北西隅から南東隅にかけて確認された。

遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢が出土している。

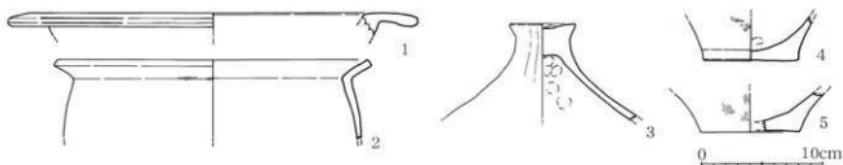
第32図 1は長頸壺の口縁部か。4は広口壺の口縁部である。頸部に断面三角形の突帯がつく。5は鉢で、口縁部が外反して開く。底部は平底である、6は胴部上半から内傾する、甕か。底部は平底である。7は複合口縁壺の胴部であろう。最大径部分に断面三角形の突帯がつく。

18号竪穴住居（第33～35図 図版4・5・20・21）

II区南端で確認され、南東側は調査区外へ広がる。規模は南北方向約4.2m、東西方向約5.8m、床面までの深さは約40cmを測り、長方形プランを呈する。床面のほぼ中央に炉が検出され、それ



第36図 19号竪穴住居実測図（1/80）



第37図 19号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）

を挟むように主柱穴が2本確認された。主柱穴の深さは45~50cmである。住居内では、四周する壁周溝、南面土坑が検出された。また、東側には方形の張り出しがあり、ベッド状に1段高くなっている。

埋土上面は黒色土がレンズ状に堆積し、自然堆積によるものと考えられ、この上面に含まれる遺物は住居廃棄時には伴わないものと想定される。地山直上および壁面には暗灰黄褐色土の地山崩落土が堆積しており、壁面付近などの床面直上には比較的完形に近い甕・鉢などの遺物が見られた。これらの遺物は住居廃棄時に伴う一括性の高い遺物と想定される。

遺物は、弥生土器の甕・壺・鉢・器台など、多数出土している。

第34図1~3は大型の甕である。1が最も大きく、器高は残存高で63cm、2・3でもそれぞれ37cm・35cmを測る。また、いずれもくの字形口縁である。1は頸部に断面三角形の突帯、胴部にやや垂れ気味の突帯を貼り付ける。4~9は鉢である。4・5は胴部に張りを持たず、いずれも器壁が約2cmと厚く、底部も厚い。これに対しては6は器壁が薄く、胴部上位が大きく張る。7は鉢である。厚い平底の底部で、口縁部はわずかに内湾し、端部を丸く仕上げる。8は脚付の壺、もしくは鉢である。脚部は厚ぼったく、端部を丸く仕上げる。9は器壁が薄く、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。底部は平底である。

第35図1~6は壺である。2は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させる。5は壺である。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。胴部最大径部分にも同様の突帯が付く。6は無頸壺である。倒卵形を呈し、胴部最大径部分にやや垂れ気味の断面台形の突帯が付く。3・5・6の壺はいずれも凸レンズ状を呈する。7・8は支脚である。8は器壁が厚く、口縁部がわざかに外に突出する。7は8に比べ、器壁が薄く、片方の口縁のみ外側に突出させる。9~11は器台である。いずれも口縁部内面を端部付近で外反させ、底部は端部に向かってやや内湾させている。9に比べ、11は脚部を大きく外反させる。

19号竪穴住居（第36・37図 図版5・21）

3号竪穴住居の南東側で確認され、これに切られる。規模は南北方向約7.2m、東西方向約6.8m、床面までの深さは約30cmを測り、円形プランを呈する。住居跡周囲には方形の土坑が検出され、検出時の状況から、当初これら土坑は、住居跡に切られるものと想定した。しかし、等間隔でこれら土坑が住居跡の周囲を巡ることから、花弁状のプランを呈する可能性も考えられる。したがって、ここでは住居に伴うものとして一括して報告する。床面中央には炉と中央土坑が検出され、その周囲に6本の主柱穴が確認された。主柱穴の深さは30~55cmである。また、壁周溝も確認され、南側の一部を除きほぼ全周する。

埋土は、黒色系、暗黄褐色系の土がブロック状に堆積していることから、住居廃棄後に埋め戻されたものと想定される。

遺物は、弥生土器の甕・蓋・高杯が出土している。

第37図1は高杯の口縁部か。鋤先形口縁を呈し、外側に向かって傾斜する。端部の内面への突出はない。2は甕である。くの字形口縁を呈し、端部はわずかに肥厚させる。3は蓋である。つま

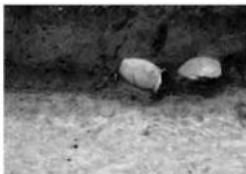


写真3 18号竪穴住居土層堆積状況

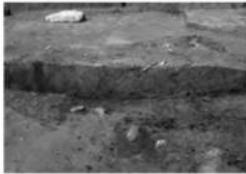


写真4 19号竪穴住居土層堆積状況

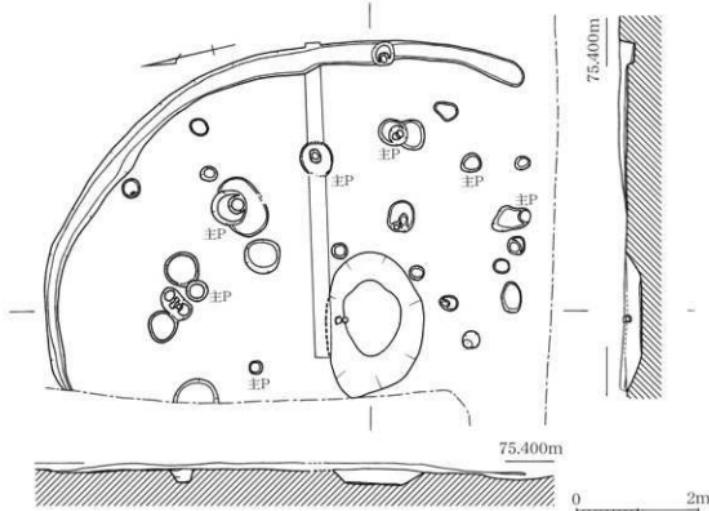
みは中央をわずかに窪ませる。4・5はいずれも甕の底部であり、底面は平底を呈する。

20号竪穴住居（第38・39・68図 図版5・21・22）

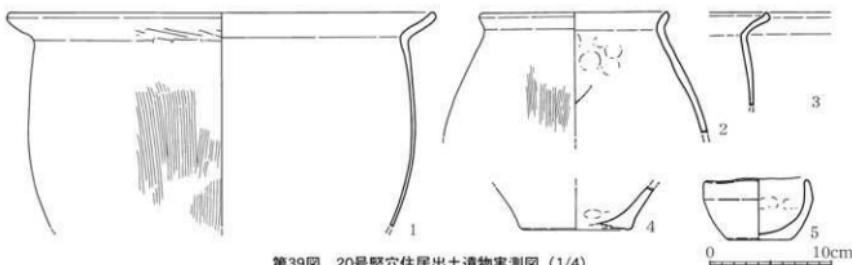
II区の南西隅で確認された円形住居で、西側・南側は調査区外へ広がる。規模は南北方向約8.3m、東西方向約5.8m、東側では床面までの深さは約15cmを測るが、西側は削平を受けており、床面と検出面がほぼ同レベルである。調査区の西壁際に中央土坑が検出されたが、その位置から平面形はやや楕円形気味になると思われる。主柱穴は中央土坑の周囲に7本確認され、中央土坑との位置関係からその数は9～10本になると考えられる。確認された主柱穴の深さは10～40cmである。また、壁周溝は確認され、中央土坑には炭が多量に含まれていたことから、炉として使用されていたと考えられる。

遺物は、弥生土器の甕・鉢のほか、砥石が出土している。

第39図1・3は甕である。1はくの字形口縁を呈し、端部を丸く仕上げる。屈曲部の稜は弱い。2は甕である。口縁部が短く、緩く外反する。5は鉢である。口縁は緩やかに内湾し、端部は丸く



第38図 20号竪穴住居実測図 (1/80)



第39図 20号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

仕上げられる。

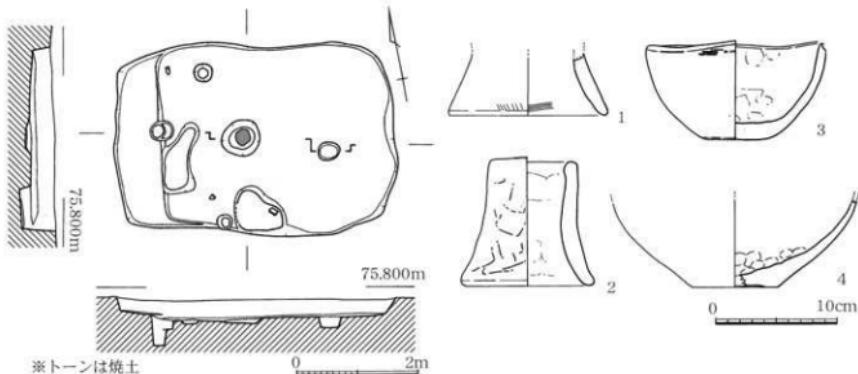
第68図5は砂岩製の砥石である。全面に研磨痕が残り、特に前面と背面は大きく窪むほど、使用されている。

21号竪穴住居 (第41・67・68図 図版5・22)

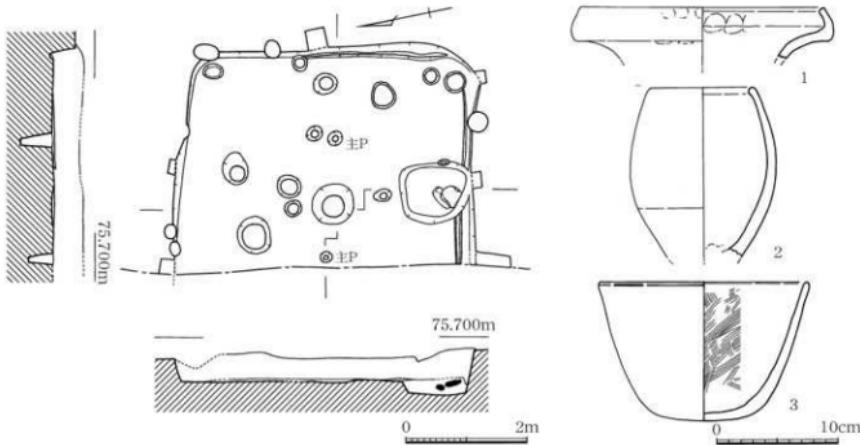
10号A・B竪穴住居の南側で確認され、1号円形周溝状遺構を切る。規模は南北方向約3m、東西方向約4.6m、床面までの深さ約40cmを測り、平面形は長方形を呈する。床面のやや南寄りに火が検出され、それを挟んで主柱穴が2本確認されたが、南側の主柱穴はベッドを掘り込んでいる。主柱穴の深さは20~40cmである。また、南面土坑は確認されたが、壁周溝は確認できなかった。

遺物は弥生土器の壺・鉢・器台のほか、石庖丁・砥石が出土している。

第40図1は器台の脚部である。3・4は鉢である。3は半球形の体部で、底部は厚底である。



第40図 21号竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)



第41図 22号竪穴住居実測図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)

口縁端部はほぼ直立して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。4の底部は平底で厚く仕上げている。

第67図11は楕円形の石庖丁である。安山岩製ではほぼ完形であるが、片方の表面が剥離している。第68図7は硬質砂岩製の砥石である。大型の製品で、光沢が出るまで研磨されている。

22号竪穴住居（第41図 図版5・22）

10号A・B竪穴住居の北西側で確認され、これを切る。規模は南北方向約4.8m、東西方向約3.6m+α、床面までの深さ40cmを測る。床面のやや西壁よりに炉が確認されたことから、これを床の中心と考えれば、東西方向の規模は約6.4mと推定でき、平面形は長方形を呈すると考えられる。主柱穴は炉を挟んで2本検出され、その深さは40～50cmである。また、東壁から南壁にかけて壁周溝が確認され、南面土坑も検出した。ベッド状造構は確認されなかった。

遺物は、弥生土器の壺・鉢・器台が出土している。

第41図1は複合口縁壺である。頸部から大きく外反しながら、立ち上がっていると考えられる。口縁部の屈曲は緩やかで明瞭でない。3は鉢である。丸底の底部に、口縁はやや外側に向かって立ち上がる。端部は丸く仕上げる。

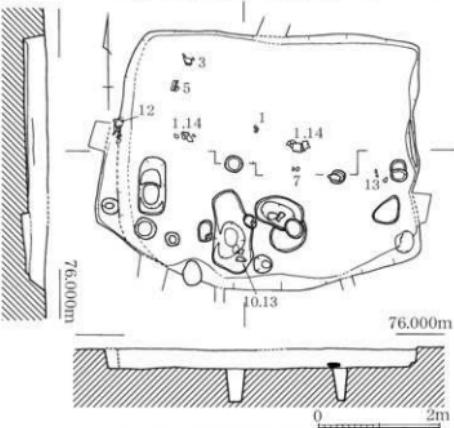
23号竪穴住居（第42・43・68図 図版5・6・22・23）

調査区のほぼ中央で確認された。西側と南側は掘りすぎたため、本来の規模は不明だが、現状で南北方向約4.2m、東西方向約4.9m、深さ約35cmを測り、平面形は長方形を呈する。住居内では、炉・ベッド状造構・壁周溝は検出されなかったが、2本の主柱穴と南面土坑が検出された。主柱穴の深さは約50cmである。

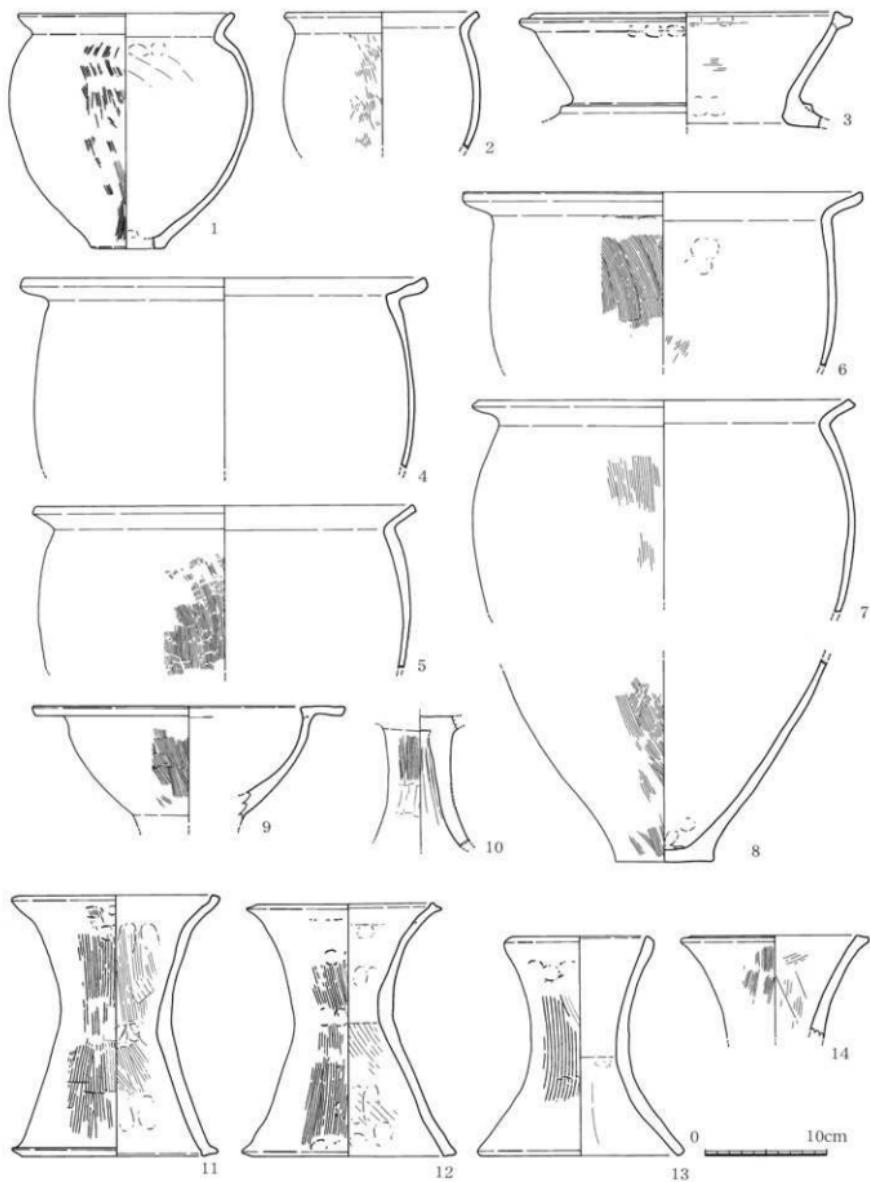
遺物は、弥生土器の甕・壺・高杯・器台のほか、砥石が出土している。

第43図1・2、4～8は甕である。1は口縁部がくの字形で、端部を丸く仕上げる。底部は平底で、外反気味に立ち上がる。2も1と同様の形態だが、頸部の屈曲が緩やかで、内面の稜は弱い。8も完全な平底タイプで、1と同様に外反しながら立ち上がる。4～7はいずれもくの字形口縁であるが、4以外は頸部内面の稜が弱い。また、5・7の口縁の立ち上がりの角度に比べて、4・6は緩やかである。9・10は高杯である。9は杯部で口縁は鏽先形を呈し、外側にわずかに傾斜する。内側の突出はわずかに見られる。10は内面にシボリ痕がみられる。11～14は器台である。12・14は口縁端部を沈線状に窪ませ、丁寧に仕上げている。また、12は底部端部を角張り、13は丸く仕上げる。屈曲部は12が中位よりやや上にあるのに対して、13はほぼ中位にある。

第68図6は砂岩製の砥石である。ほぼ完形である。全面にわたり、研磨痕が残る。



第42図 23号竪穴住居実測図 (1/80)



第43図 23号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

(3) 堀立柱建物

堀立柱建物は、22棟確認され、竪穴住居跡と同様に調査区の西半分にその多くが集中し、弥生時代の建物と中世の建物が存在する。

1号堀立柱建物（第44図 図版6）

I区の北側中央で確認され、主軸方向をN-31°-Eにとる2間×3間の建物である。北側の梁行は1間である。柱穴の深さは10~30cmで、柱穴間の距離は梁行が約2m、桁行が約2.6mである。規模は心心距離で梁行約4.1m、桁行約7.7mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

2号堀立柱建物（第44図）

1号堀立柱建物の北西、I区の北西隅で確認され、主軸方向をN-29°-Eにとる2間×2間+αの建物である。北側は調査区外へ展開すると考えられる。柱穴の深さは25~50cmで、柱穴間の距離は梁行が約2.1m、桁行が約1.7mである。規模は心心距離で梁行約4.3m、桁行約3.5m+αである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

3号堀立柱建物（第44図）

2号堀立柱建物の南西側で確認され、主軸方向をN-30°-Eにとる2間×3間の建物である。南西側は調査区外に展開する。柱穴の深さは30~65cmで、柱穴間の距離は梁行が約1.9m、桁行が約2.5mである。規模は心心距離で梁行約3.9m、桁行約7.5mである。柱穴には柱痕が明確に残っているものもあり、礎石とみられる石材も確認されている。柱穴からの遺物の出土はなかった。

また、1~3号堀立柱建物は軸方向がほぼ同じである。

4号堀立柱建物（第44図）

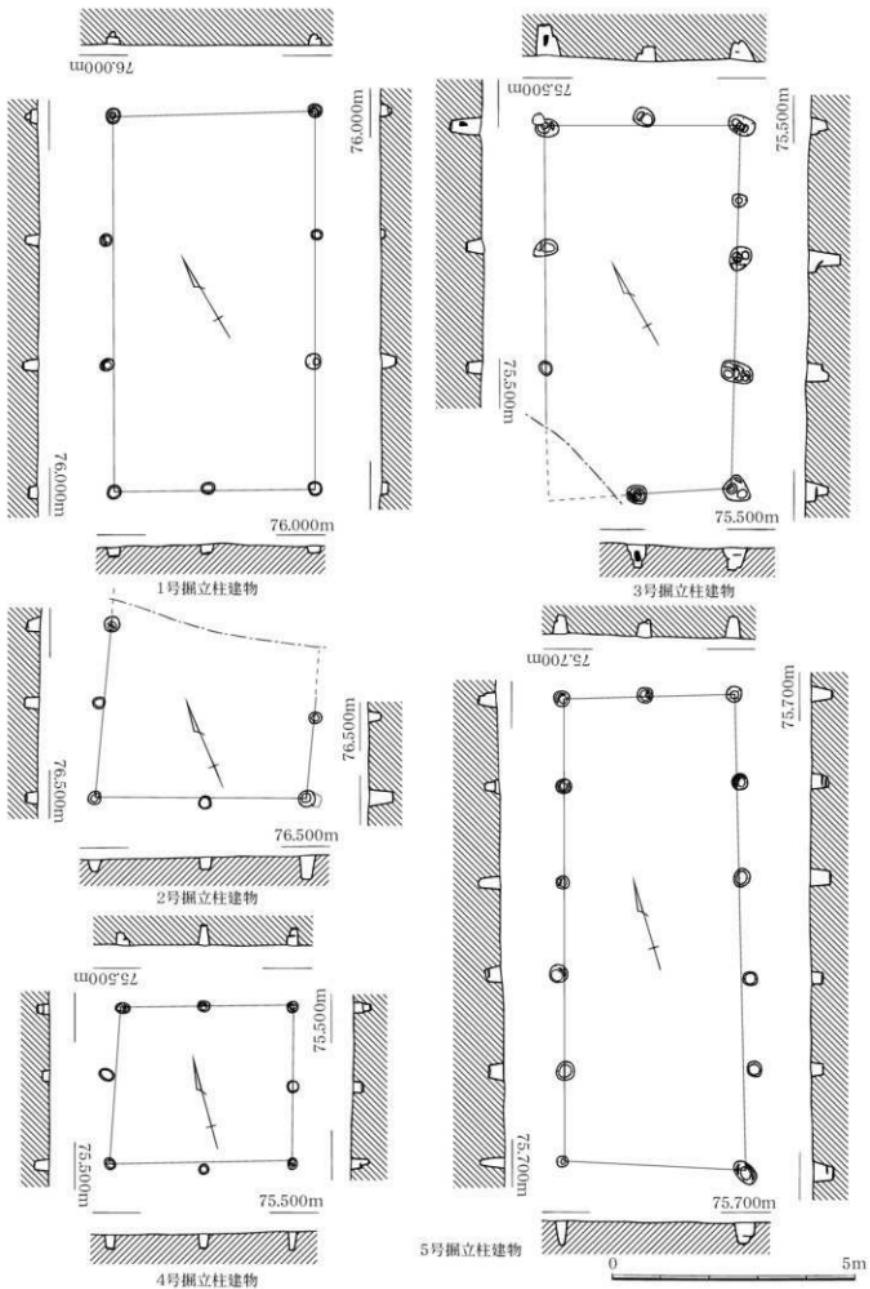
3号堀立柱建物の南側で確認され、主軸方向をN-76°-Wにとる2間×2間の建物である。柱穴の深さは15~40cmで、柱穴間の距離は梁行・桁行ともに約1.6mである。規模は心心距離で梁行約3.1m、桁行約3.2mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

5号堀立柱建物（第44図）

4号堀立柱建物の南側で確認され、主軸方向をN-15°-Eにとる2間×5間の建物である。南側の梁は1間である。柱穴の深さは25~50cmで、柱穴間の距離は梁行が約1.8m、桁行が約1.9mである。規模は心心距離で梁行約3.6m、桁行9.5~9.9mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

6号堀立柱建物（第45図）

I区中央西側で確認され、主軸方向をN-66°-Wにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは20~40cmで、柱穴間の距離は梁行が約2.3m、桁行が約2.2mである。規模は心心距離で梁行約2.2~2.4m、桁行約6.4mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。



第44図 掘立柱建物実測図(1) (1/100)

7号掘立柱建物（第45図）

6号掘立柱建物の東側に隣接して、確認され、主軸方向をN-17°-Eにとる2間×3間の建物である。梁行の北側には中央の柱穴が確認されなかった。また、桁行は西側には中間の柱が2本近接して掘り込まれており、さらに東側は中央よりに3本の柱穴がみられる。柱穴の深さは10~30cmで、柱穴間の距離は梁行約1.9m、桁行が約2mである。規模は心心距離で梁行3.82~3.92m、桁行は6.12~6.25mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

8号掘立柱建物（第45図）

7号掘立柱建物の東側で確認され、主軸方向をN-77°-Wにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは40~80cmで、柱穴間の距離は梁行が約3.1m、桁行が約2.1mである。規模は心心距離で梁行約3.1m、桁行4.2~4.4mである。規模、柱穴の埋土が暗灰褐色土と中世のものと異なることから、弥生時代のものと考えられる。柱穴からの遺物の出土はなかった。

9号掘立柱建物（第45図）

II区南側で確認され、主軸方向をN-45°-Eにとる1間×1間の建物である。平面形はやや直な方形を呈するが、柱穴の深さや埋土などから建物として考えたい。柱穴の深さは50~60cmで、柱穴間の距離は心心距離で梁行が約3m、桁行が約3.5mである。柱穴からは弥生土器片、石庵丁が出土しており、弥生時代の倉庫と考えられる。

10号掘立柱建物（第45図）

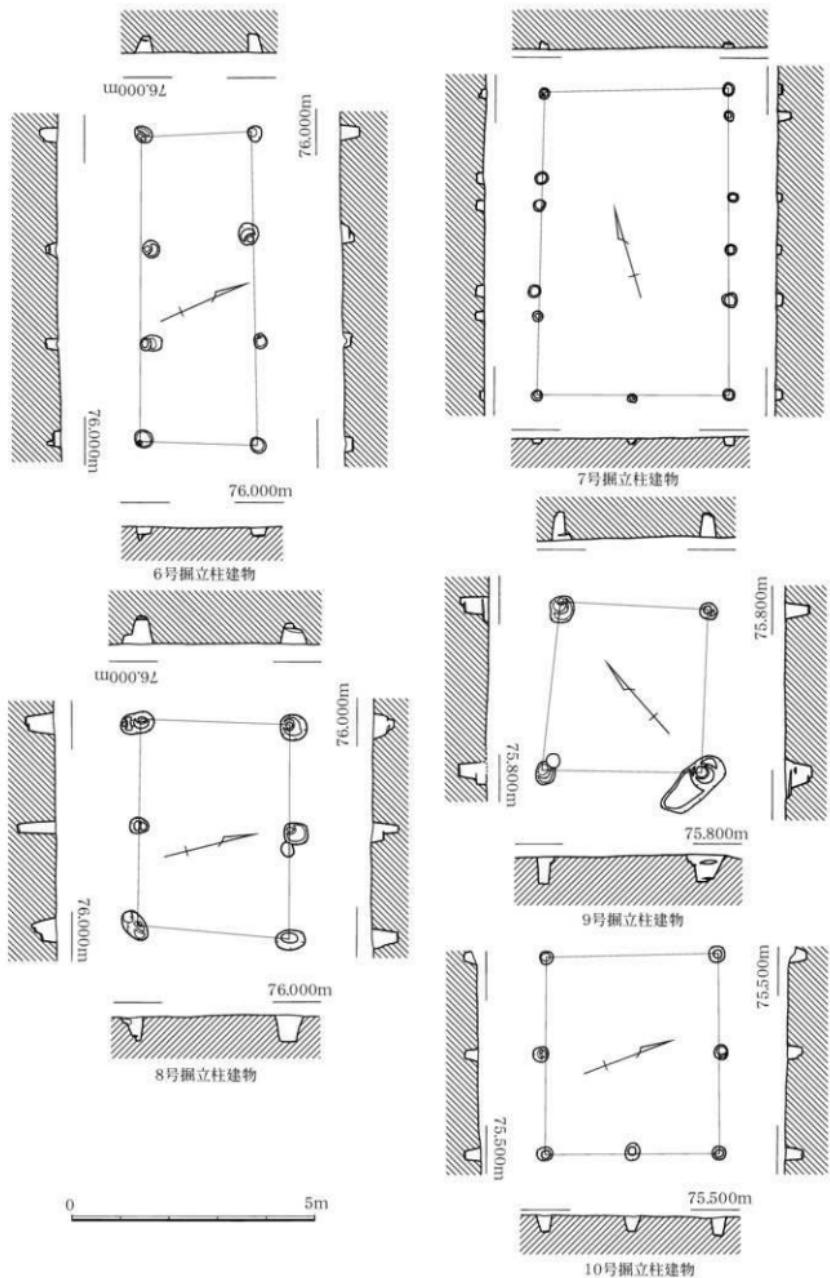
5号掘立柱建物の西側で確認され、主軸方向をN-69°-Wにとる2間×2間+ α の建物で、西側は調査区外へ展開する。柱穴の深さは30~40cmで、柱穴間の距離は梁行が約1.7m、桁行が約2mである。規模は心心距離で梁行約3.6m、桁行約4.6m+ α である。柱穴からの遺物の出土はなかった。

11号掘立柱建物（第46図 図版6）

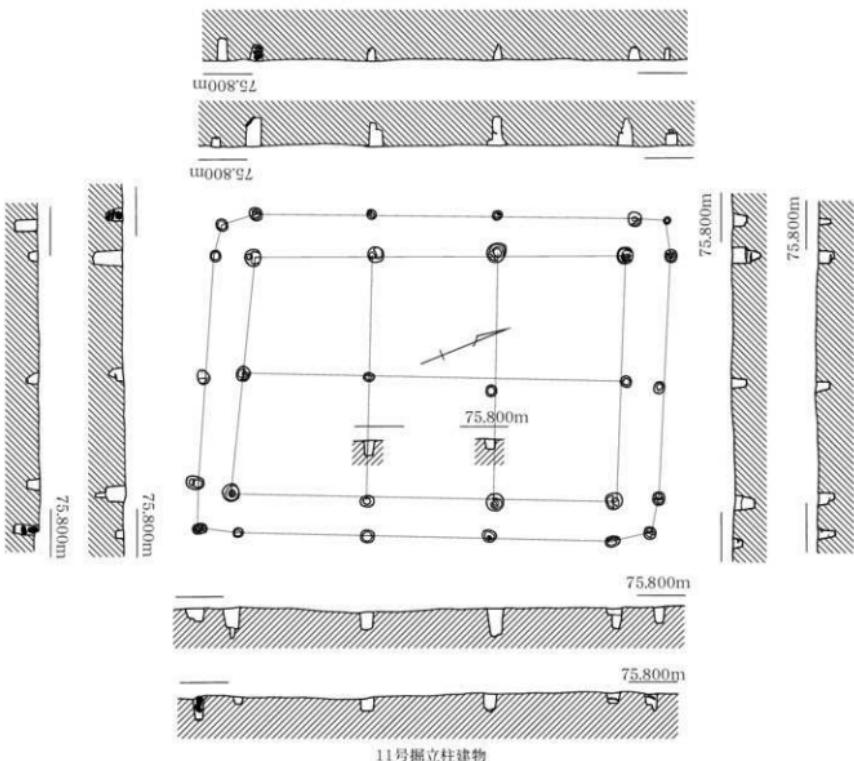
調査区の中央西側で確認され、主軸方向をN-22°-Eにとる2間×3間の四面庇をもつ総柱建物である。10号A・B竪穴住居を切る。柱穴の深さは40~60cmで、柱穴間の距離は梁行・桁行ともに約2.5mである。規模は心心距離で梁行4.9~5m、桁行7.60~7.9mであり、庇までの距離は約0.8mである。この建物の柱穴はいずれも柱痕がしっかりと残っており、瓦質土器鉢（第49図1）のほか、礎石に使用したとみられる石材も出土している。

12号掘立柱建物（第46図 図版6）

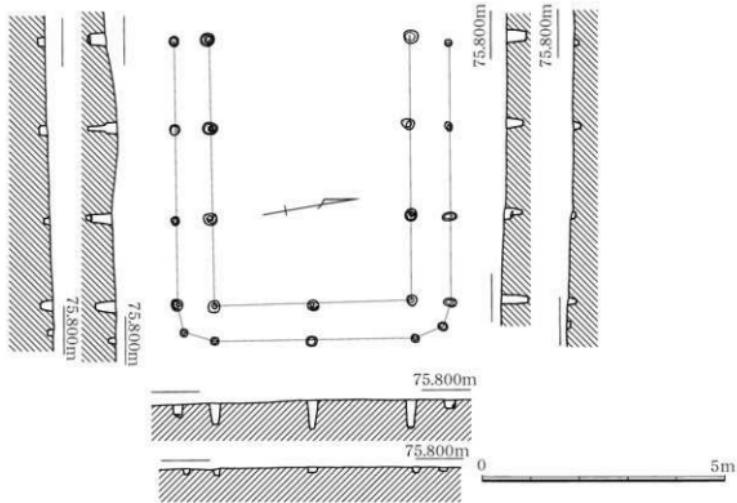
I区の南西側で確認され、主軸方向をN-82°-Wにとる2間×3間+ α の三面に庇をもつ建物である。建物の西側は調査区外へ展開し、四面庇の建物になる可能性もある。2号・14号竪穴住居跡を切る。柱穴の深さは35~60cmで、柱穴間の距離は梁行約2m、桁行約1.9mである。規模は心心距離で梁行約4m、桁行約5.4m+ α で、庇までの距離は約0.7mである。



第45図 掘立柱建物実測図(2) (1/100)



11号掘立柱建物



第46図 掘立柱建物実測図(3) (1/100)

13号掘立柱建物（第47図 図版6）

11号掘立柱建物の南側で確認され、主軸方向をN-24°-Eにとる2間×2間の建物である。10号A・B竪穴住居跡を切る。柱穴の深さは10~35cmで、柱穴間の距離は梁行約1.3m、桁行約1.6mである。規模は心心距離で梁行約2.9m、桁行3.2~3.4mである。遺物は出土しなかった。

14号掘立柱建物（第47図 図版6）

13号掘立柱建物の南側で確認され、主軸方向をN-5°-Eにとる2間×3間の建物である。11号A・B・21号竪穴住居跡、1号円形周溝状遺構を切る。柱穴の深さは15~30cmで、柱穴間の距離は梁行が約2.1m、桁行が約2.3mである。規模は心心距離で梁行4.2~4.3m、桁行約7.1mである。遺物は土玉（第69図3）が出土している。

15号掘立柱建物（第47図 図版6）

14号掘立柱建物の東側に隣接して確認され、主軸方向をN-74°-Wにとる1間×3間の建物である。柱穴の深さは15~60cmで、柱穴間の距離は梁行が約2.9m、桁行が約1.6mである。規模は心心距離で梁行約2.8m、桁行約4.9mである。遺物は出土しなかった。

16号掘立柱建物（第47図 図版6）

6号掘立柱建物の南側で確認され、主軸をN-73°-Wにとる2間×3間の建物である。柱穴の深さは15~35cmで、柱穴間の距離は梁行が約1.7m、桁行が約2mである。規模は心心距離で梁行約3.4m、桁行6.1~6.3mである。また、15号掘立柱建物と軸方向がほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

17号掘立柱建物（第47図 図版7）

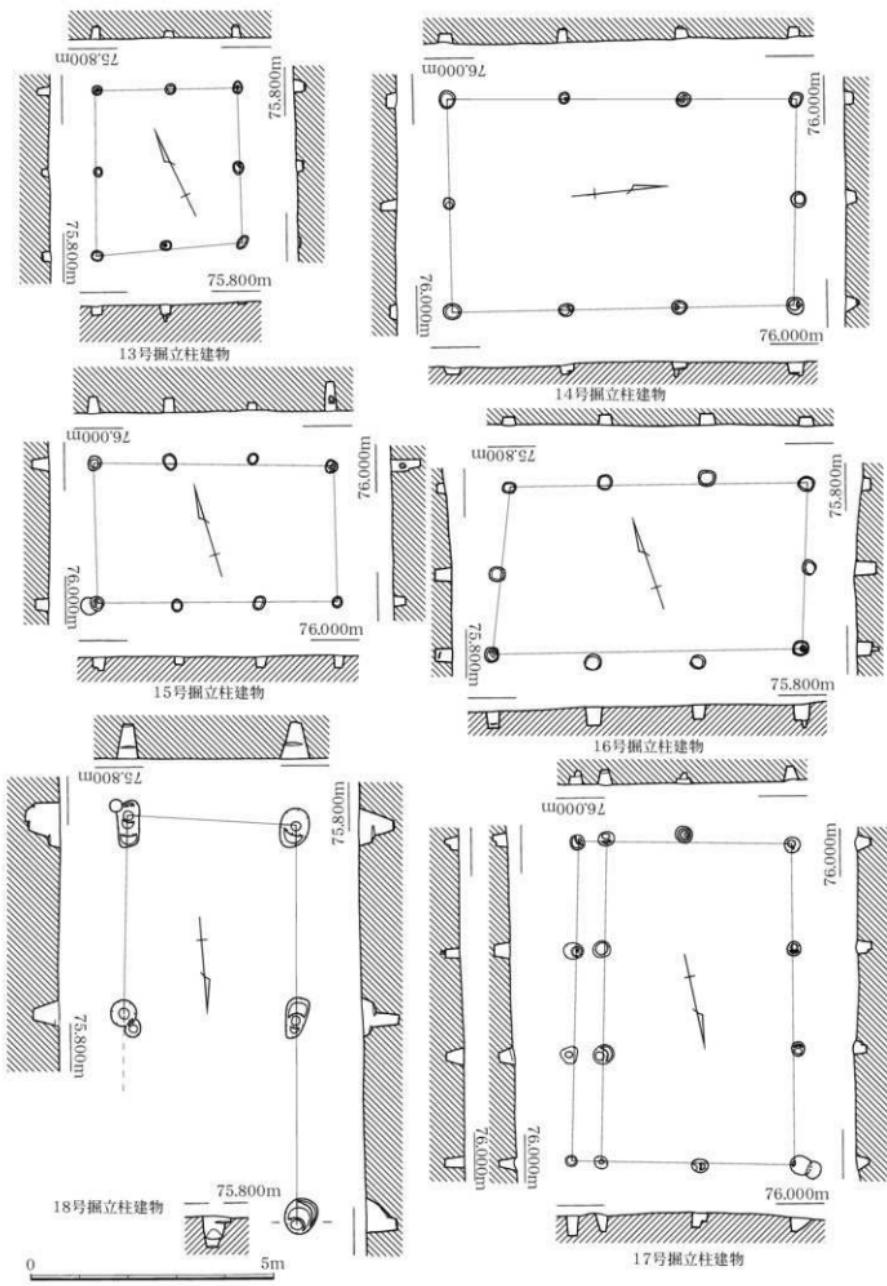
3号竪穴住居跡の西側で確認され、19号竪穴住居跡を切り、主軸をN-14°-Eにとる2間×3間の東面庇をもつ建物である。柱穴の深さは20~40cmで、柱穴間の距離は梁行が約2m、桁行が約2.2mである。規模は心心距離で梁行が約3.9m、桁行が約6.6mで、庇までの距離は約0.6mである。遺物は白磁小皿（第49図2）が出土した。

18号掘立柱建物（第48図）

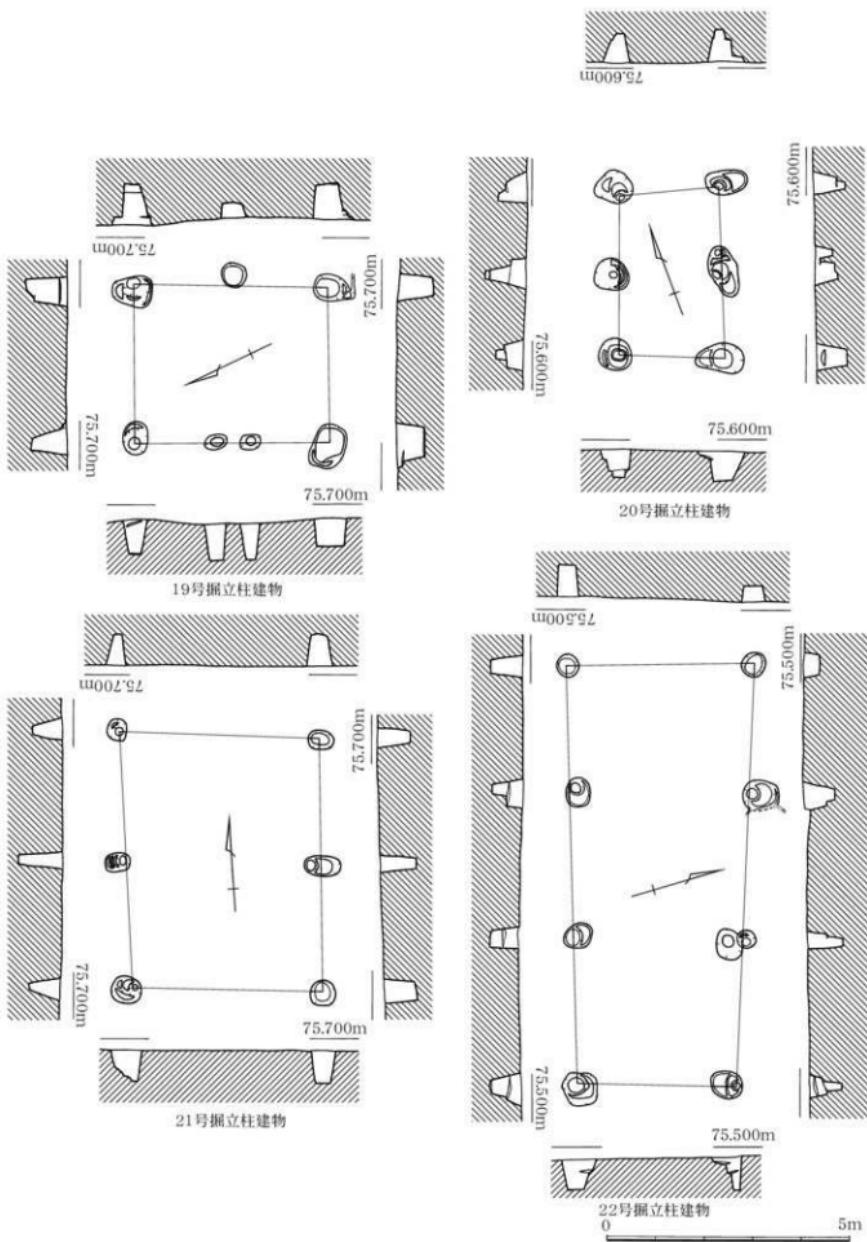
3号掘立柱建物の東側で確認され、主軸をN-3°-Eにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは55~75cmで、柱穴間の距離は梁行が約3.5m、桁行が約4mである。規模は心心距離で梁行が約3.5m、桁行が約8.2mである。遺物は土器片が出土したが、図示していない。

19号掘立柱建物（第48図 図版7）

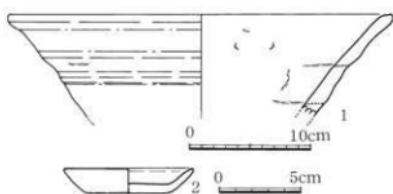
18号掘立柱建物の東側で確認され、主軸をN-26°-Eにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは35~85cmで、柱穴間の距離は梁行が約3.1m、桁行が約1.9mである。規模は心心距離で梁行約3.2m、桁行約4mである。遺物は出土していない。



第47図 掘立柱建物実測図(4) (1/100)



第48図 掘立柱建物実測図(5) (1/100)



第49図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3・1/4)

20号掘立柱建物 (第48図 図版7)

19号掘立柱建物の南東側で確認され、主軸をN -23° -Eにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは45~85cmで、柱穴間の距離は梁行が約2.1m、桁行が約1.6mである。規模は心心距離で梁行約2.1m、桁行3.2~3.5mである。19号掘立柱建物と軸方向がほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

21号掘立柱建物 (第48図)

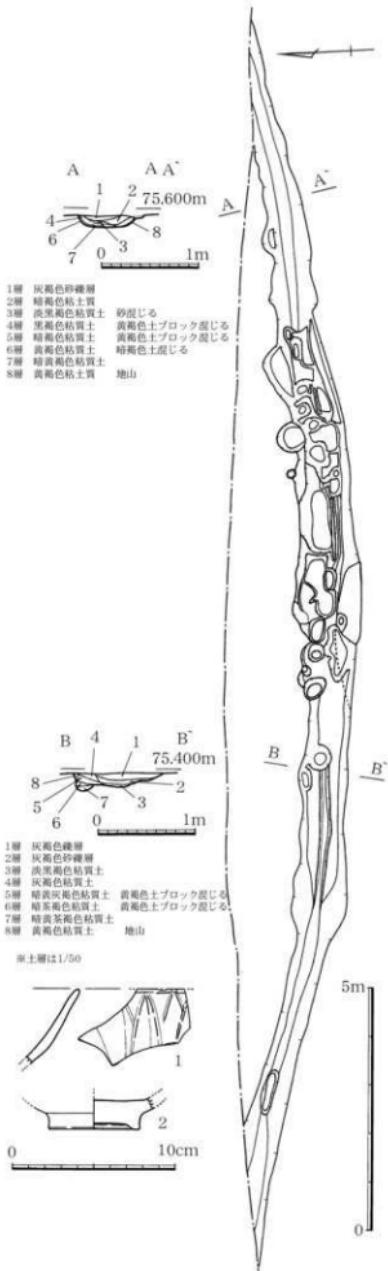
19号掘立柱建物の南西側で確認され、主軸をN -3° -Eにとる1間×2間の建物である。柱穴の深さは65~90cmで、柱穴間の距離は梁行が約3.9m、桁行が約2.6mである。規模は心心距離で梁行約3.9m、桁行約5.2mである。遺物は出土しなかった。18号掘立柱建物と軸方向を同じくしていることから、同時期の建物と考えられる。

22号掘立柱建物 (第48図 図版7)

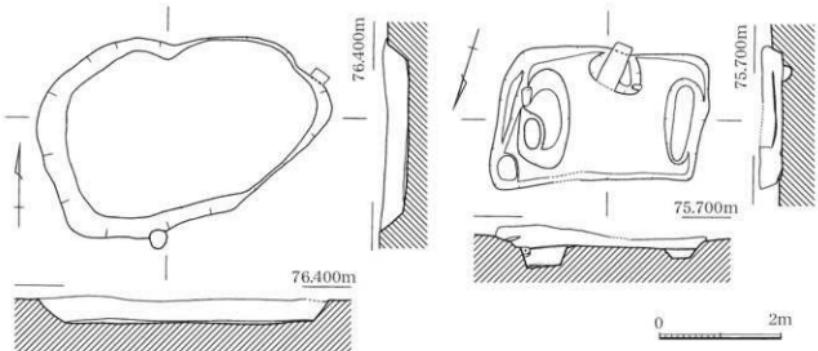
21号掘立柱建物の南側で確認され、主軸をN -75° -Wにとる1間×3間の建物である。柱穴の深さは30~75cmで、柱穴間の距離は梁行が約3.3m、桁行が約3mである。規模は心心距離で梁行約3.3m、桁行約8.6mである。遺物は、出土しなかった。また、15・16号掘立柱建物と軸方向がほぼ同じである。

掘立柱建物出土遺物 (第49図 図版23)

第49図1は11号掘立柱建物出土の瓦器鉢である。外表面は回転ナデ、内表面はナデが施される。また、内面には接合痕がみられる。2は17号掘立柱建物出



第50図 1号溝実測図 (1/100) 及び
出土遺物実測図 (1/3)



第51図 1・2号竪穴遺構実測図 (1/80)

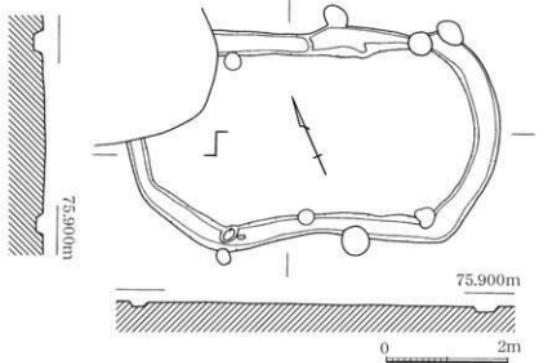
土の白磁の小皿である。口縁端部は露胎している。

(4) 溝

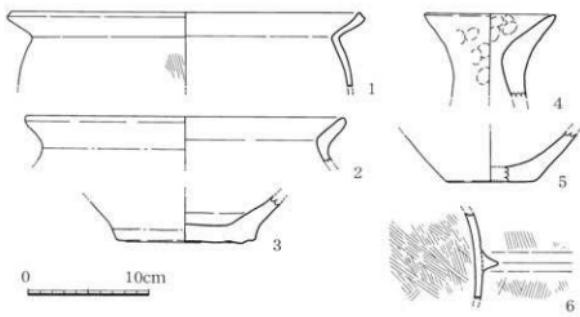
1号溝 (第50図 図版7)

II区の北端で確認された。緩やかな弧を描いて山側から川側へ、ほぼ東西に走っている。調査区内での長さは約46m、幅は1.2～2.5mである。溝底面のレベルは東側が約75.4m、西側が約74.5mで、緩やかに傾斜している。埋土の状況をみると、上層に礫層、中層から下層には粘質土が堆積し、砂質土や鉄分の沈殿が見られなかったことから、水の流れはそれほどなかったと思われる。ただ、粘性の高い土が堆積していることから、澱みのような状態であった可能性が高い。

埋土中からは龍泉窯系の青磁碗のほか、弥生土器片や石庖丁 (第65図11) が出



第52図 1号円形周溝状遺構実測図 (1/80)



第53図 1・2号竪穴遺構及び1号円形周溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)

土しているが、埋土や竪穴住居跡を切っている状況から中世のものと考えられる。

第50図1は龍泉窯系の鎬連弁文青磁碗である。色調は青緑色を呈する。2は龍泉窯系の青磁碗の底部である。高台底面は露胎している。

(5) 竪穴遺構

1号竪穴遺構（第51・53・68図 図版7）

7号竪穴住居跡の北側で確認され、12号竪穴住居跡を切る。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長軸約4.8m、短軸約3.1m、深さ約40cmを測る。壁は緩い傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器の甕のほか、磨製石斧が出土している。

第53図1～3は、いずれも弥生土器の甕である。1はくの字形に屈曲する口縁に、先端を跳ね上げている。2は頸部から口縁部にかけて、厚ぼったく仕上げている。3は底面が平底に仕上げられている。

第68図1は安山岩製の磨製石斧である。基部の一部が剥離しているものの、ほぼ完形である。刃部には使用に伴う剥離がみられる。

2号竪穴遺構（第51・53図 図版7）

16号竪穴住居跡の南側で確認され、これを切る。平面形は方形を呈し、規模は長軸約3.4m、短軸約2.1m、深さ約20cmを測る。短辺側の床面には楕円形を呈する土坑状の落ち込みがある。遺物は、弥生土器の甕・器台などが出土している。

第53図4は器台である。口縁下の屈曲部は分厚く、口縁端部は三角形状に仕上げる。内外面とも指揮さえ・ナデが施される。5は甕の底部である。底面は平底に仕上げられ、胴部に向かって内湾しながら立ち上がる。

(6) 円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構（第52・53図 図版8）

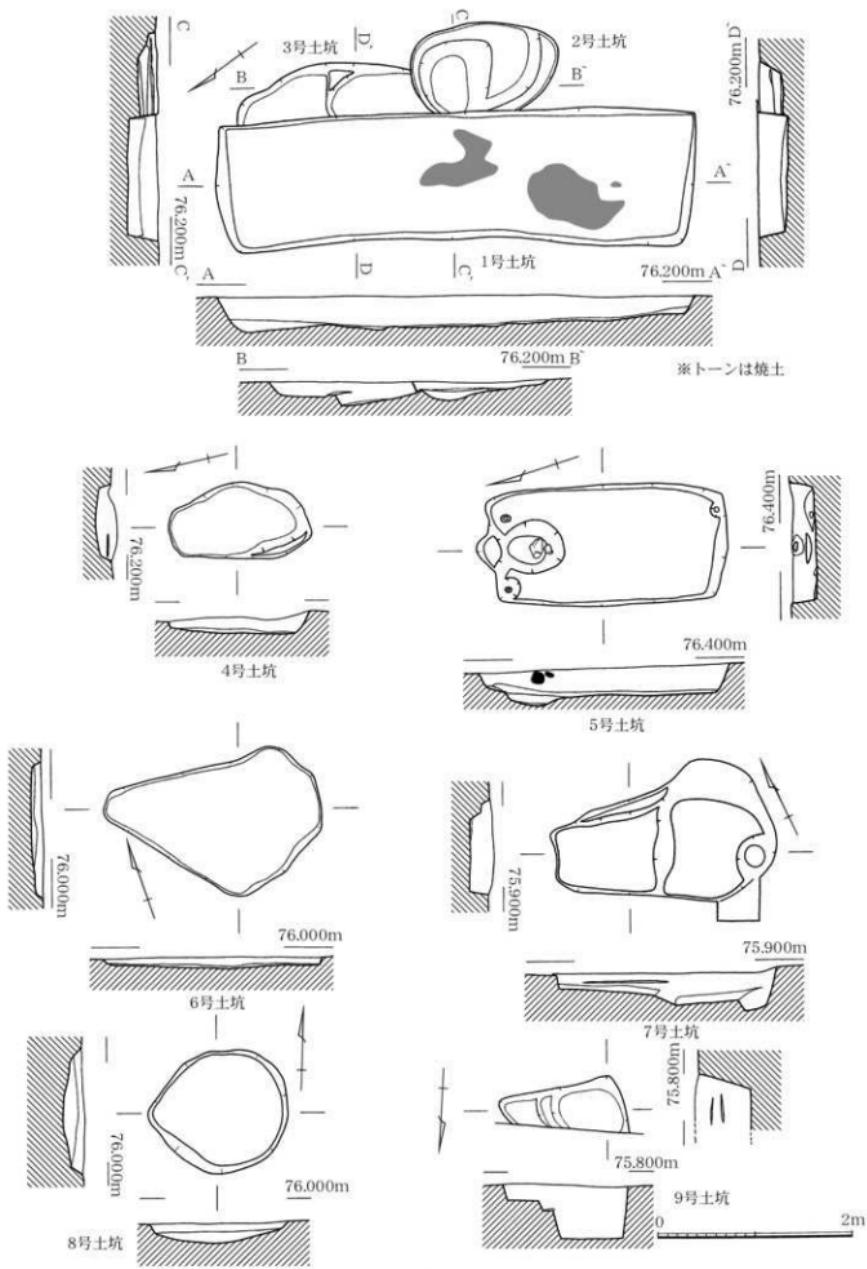
11号竪穴住居跡の南東側で確認され、これに切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸約6m、短軸約3.4mの規模で、幅約30cm、深さ約10cmの溝が1周する。遺物は、弥生土器の甕（第53図8）が出土している。

(7) 土坑

土坑は調査区全体にわたって、76基が確認された。中でも南側に集中して見られ、竪穴住居跡とはあまり切り合うことなく、存在している。

1号土坑（第54図 図版8）

I区北東側で確認され、2、3号土坑を切る。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約4.9m、短軸約1.3m、深さ約30cmを測る。底面は南から北に向かって、若干傾斜している。埋土には多くの焼土・炭を含んでいる。炭が南側に偏り、多く堆積していることから、中世の木炭窯と考えられる。遺物は土師器片が数点出土しているが、図示していない。



第54図 土坑実測図(1) (1/80)

2号土坑（第54図 図版8）

I区北東側で確認され、1号土坑に切られ、3号土坑を切る。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約0.9m+ α 、深さ約25cmを測る。底面は段落ちがある。遺物は出土しなかった。

3号土坑（第54図 図版8）

I区の北東側で確認され、2、3号土坑に切られる。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.9m+ α 、短軸約1.5m+ α 、深さ約20cmを測る。底面は段落ちがあり、比較的平坦である。遺物は出土しなかった。

4号土坑（第54図 図版8）

I区の北東側で確認された。平面形はやや不定の梢円形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さ約20cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

5号土坑（第54図 図版8）

I区の北東隅で確認された。平面形は長方形を呈するが、北側には半円形の突出部がある。また、3つの隅にはピット状の掘り込み見られる。規模は、長軸約2.6m、短軸約1.3m、深さ約35cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

6号土坑（第54図 図版8）

I区の北側中央付近で確認された。平面形は不定形で規模は東西軸約2.2m、南北軸約1.4m、深さ約25cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

7号土坑（第54・62図 図版23）

6号土坑の西側で確認された。平面形は不定形で規模は東西軸約2.3m、南北軸約1.4m、深さ約30cmである。底面は段落ちを有し、やや傾斜している。遺物は弥生土器の壺・壺が出土している。

第62図1は壺である。口縁部は大きく開き、先端を丸く仕上げる。2、3は壺である。ともにくの字形口縁を呈し、先端は跳ね上げる。

8号土坑（第54図）

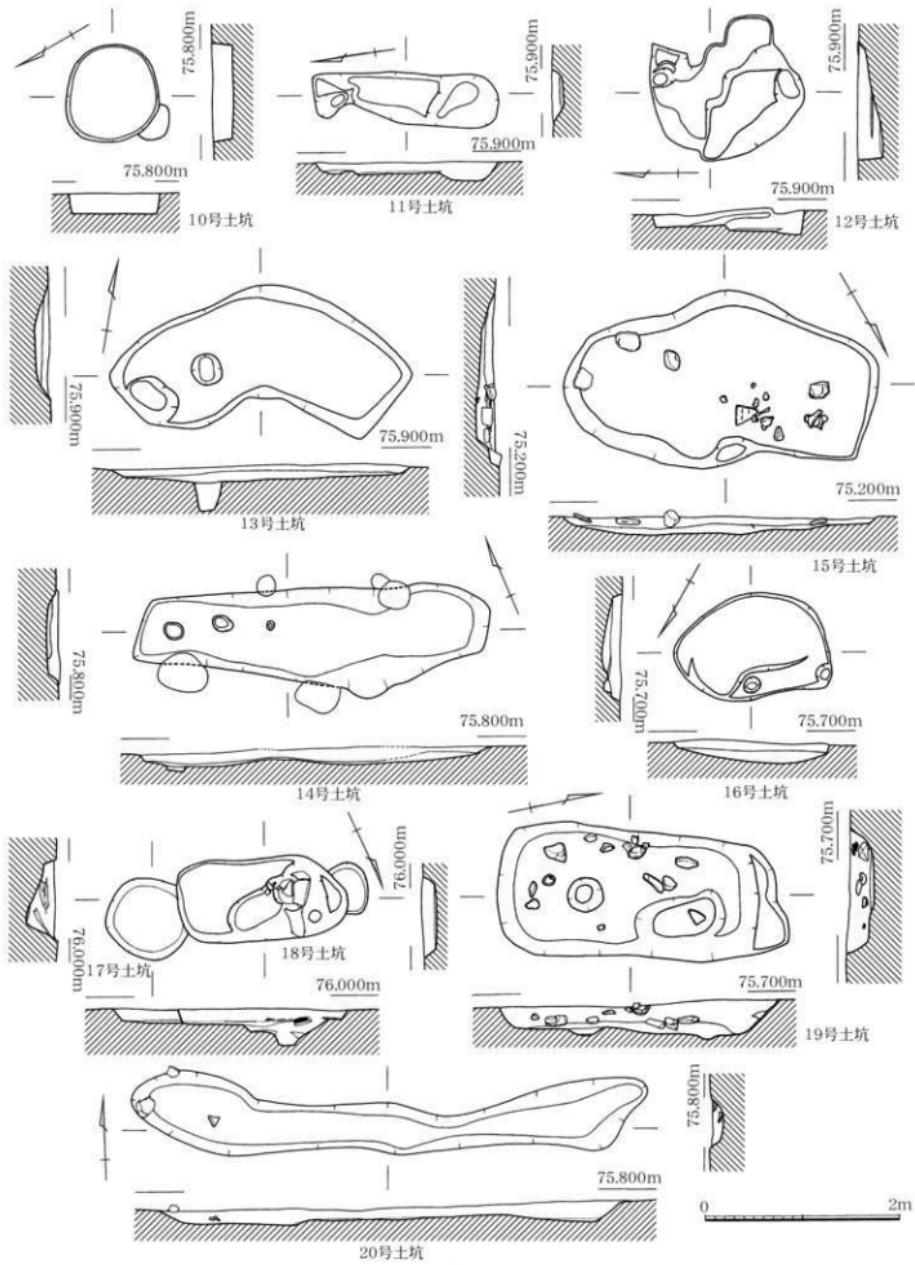
7号土坑の北側で確認された。平面形はほぼ円形で、規模は長軸約1.4m、短軸約1.3m、深さ25cmを測る。底面は中央に向かって傾斜している。遺物は出土しなかった。

9号土坑（第54図）

II区北端で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸1.3m、南北軸約0.6m+ α 、深さ約55cmを測る。底面は2段にわたる段落ちが見られ、平坦である。遺物は出土しなかった。

10号土坑（第55図）

I区の中央付近で確認された。平面形は円形を呈し、規模は径約1m、深さ20cmを測る。底面



第55図 土坑実測図(2) (1/80)

は平坦である。遺物は出土しなかった。

11号土坑（第55図）

I区の中央付近で確認された。平面形は不定形で、規模は南北軸約1.9m、東西軸約0.5m、深さ約20cmを測る。底面は段落ちがある。遺物は出土しなかった。

12号土坑（第55図）

11号土坑の西側で確認された。平面形は不定形で、規模は南北軸約1.6m、東西軸約1.2m、深さ約25cmを測る。底面は段落ちがあり、平坦である。遺物は出土しなかった。

13号土坑（第55・62図 図版23）

8号掘立柱建物の東側で確認され、これに切られる。平面形は不定形でくの字形を呈す。規模は東西軸約3.1m、南北軸約1.2m、深さ約20cmを測る。底面には段落ちがあり、これに向かって傾斜している。遺物は、弥生土器の甕・高杯が出土している。

第62図4は高杯である。内面の突出部がある。5は甕の底部である。底面は平底に仕上げる。

14号土坑（第55・62図 図版23）

13号土坑の東側で検出された。平面形は細長い楕円形を呈し、規模は長軸約3.6m、短軸約0.9m、深さ約15cmを測る。底面は緩やかな波形となっている。遺物は、弥生土器の甕と思われる小破片が出土している。

第62図6は甕の頭部と考えられる。断面三角形の突帯を貼付する。

15号土坑（第55・62図 図版9・23）

10号土坑の南側で確認された。平面形は直な楕円形を呈し、規模は長軸約3.2m、短軸約1.8m、深さ約20cmを測る。底面は中央部がやや窪むが、ほぼ平坦である。遺物は、弥生土器の甕・壺が出土している。

第62図7～9・11は甕である。7～9はいずれもくの字形口縁を呈し、先端を肥厚させる。10は長頸壺で口縁よりやや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。11は底部である。底面は平底に仕上げる。

16号土坑（第55・62図 図版23）

15号土坑の西側で確認された。平面形はやや不定な楕円形を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約1.1m、深さ約20cmを測る。底面は船底状に傾斜し、東側が若干深い。遺物は、弥生土器の甕・器台が出土している。

第62図12は器台の口縁部である。口縁先端は肥厚する。13は甕の底部である。器壁は厚く、やや上底気味である。

17号土坑（第55・62図 図版24）

11号土坑の南側で確認され、18号土坑に切られる。平面形はほぼ正円を呈し、規模は径約0.8m、深さ約15cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は、弥生土器の器台が出土している。

18号土坑（第55図）

11号土坑の南側で確認され、17号土坑を切る。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.7m、短軸約0.9m、深さ約40cmを測る。底面は東側に段落ちを有し、平坦である。遺物は出土していない。

19号土坑（第55・62図 図版9・24）

11号掘立柱建物の東側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸約2.9m、短軸1.3m、深さ約25cmを測る。底面は北側から南側に向かって傾斜している。遺物は龍泉窯系の青磁皿・碗、白磁碗が出土した。また、これらの遺物とともに埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、1号土坑と同様に木炭窯の可能性も考えられる。11号掘立柱建物に伴うものか。

第62図15は白磁碗である。16は青磁碗の破片である。外面には縞連弁文が施される。17は青磁皿です。高台底面は露胎している。

20号土坑（第55・62図 図版9・24）

14号土坑の東側で確認された。平面形は溝状を呈し、規模は長軸約4.7m、短軸約0.3m、深さ約15cmである。底面はほぼ平坦であるが、東側で低い段落ちがみられる。遺物は弥生土器の甕・壺が出土した。

第62図18は壺である。胴部最大径部分よりやや下がった位置に断面台形の2条の突帯を貼り付ける。19は甕の口縁部である。20は壺の底部である。底面を平底に仕上げ、若干内湾させてながら立ち上がり、胴部にかけて大きく開く。

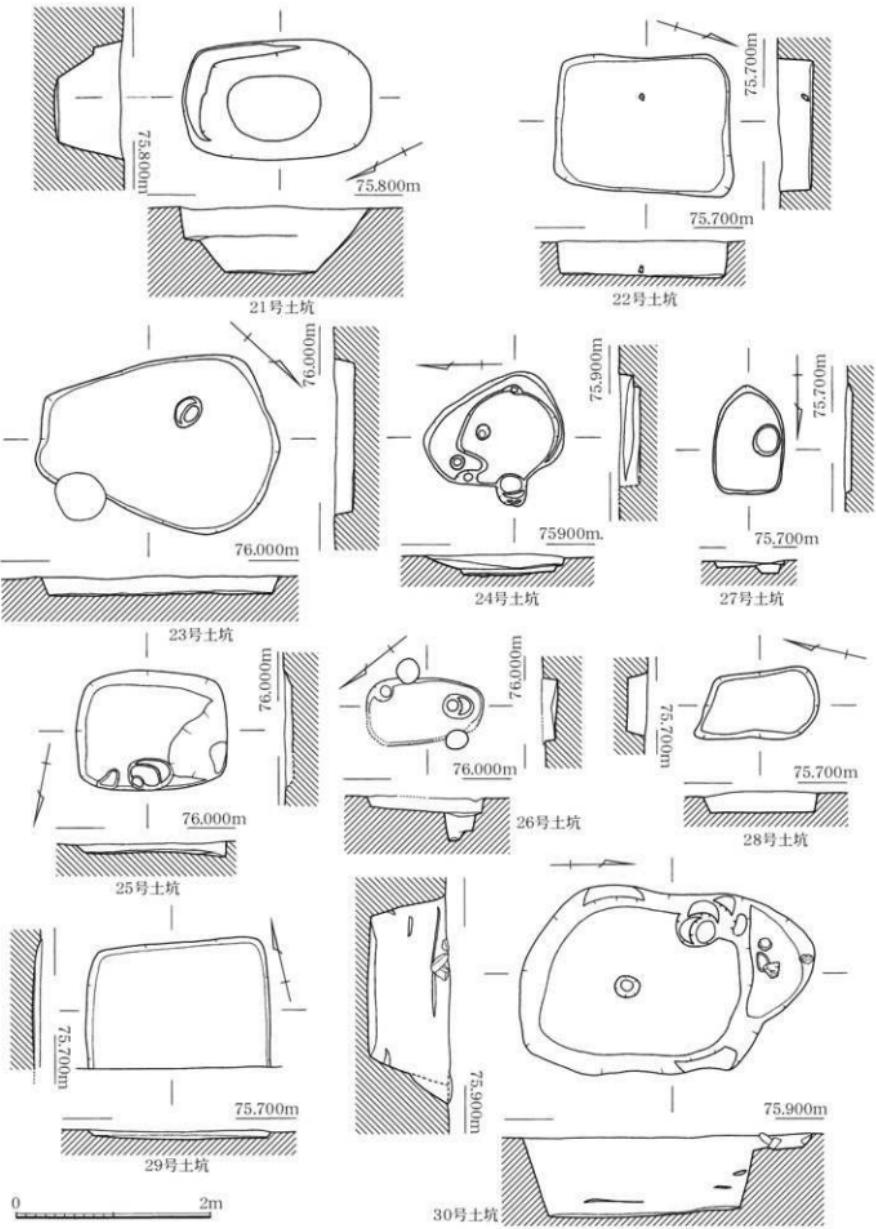
21号土坑（第56図 図版9）

7号竪穴住居跡の北側で確認され、これを切る。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.9m、短軸約1.2m、深さ約65cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。北側に段落ちを有する。遺物の出土はなかった。

22号土坑（第56・62図 図版10・24）

1号円形周溝状遺構の北東側で確認された。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約1.8m、短軸約1.4m、深さ約35cmを測る。底面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。遺物は弥生土器の甕・壺が出土した。

第62図21・22は甕の底部である。ともに底面は若干上底気味であるが、21が内湾して立ち上がるのに対し、22は外反気味に立ち上がる。



第56図 土坑実測図(3) (1/80)

23号土坑（第56図）

I区中央東側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は南北軸約2.4m、東西軸約1.3m、深さ約20cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。遺物は弥生土器片が1点のみ出土したが、図示していない。

24号土坑（第56図）

6号竪穴住居跡の北側で確認された。平面形はやや不定な円形を呈し、規模は長軸約1.4m、短軸約1.2m、深さ約20cmを測る。底面は段落ちを有し、平坦である。遺物は出土しなかった。

25号土坑（第56図 図版10）

23号土坑の北側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約1.2m、深さ約10cmを測る。底面はほぼ平坦で、西側に緩やかな段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

26号土坑（第56・62図 図版10・24）

I区南東側で確認された。平面は楕円形を呈し、規模は長軸約1.2m、短軸約0.7m、深さ約15cmを測る。底面はほぼ平坦で、南西側にピット状の段落ちが見られる。遺物は弥生土器の甕・壺が出土した。

第62図23は壺である。頸部の屈曲は緩やかで、内外面ともに稜は弱い。口縁端部はやや肥厚させている。24は甕の底部である。底面はほぼ平底に仕上げる。

27号土坑（第56図）

4号竪穴住居跡の南側で確認された。平面形は砲弾形を呈し、規模は長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約5cmを測る。底面は平坦である。遺物は弥生土器片が出土したが、図示していない。

28号土坑（第56・62図 図版24）

4号竪穴住居跡の南東側で確認された。平面形は不定な楕円形を呈し、規模は長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約20cmを測る。底面は平坦である。遺物は、弥生土器の鉢が出土した。

第62図26は鉢である。体部はほぼ球形を呈し、口縁部は内湾させる。底部は分厚く、平底に仕上げる。

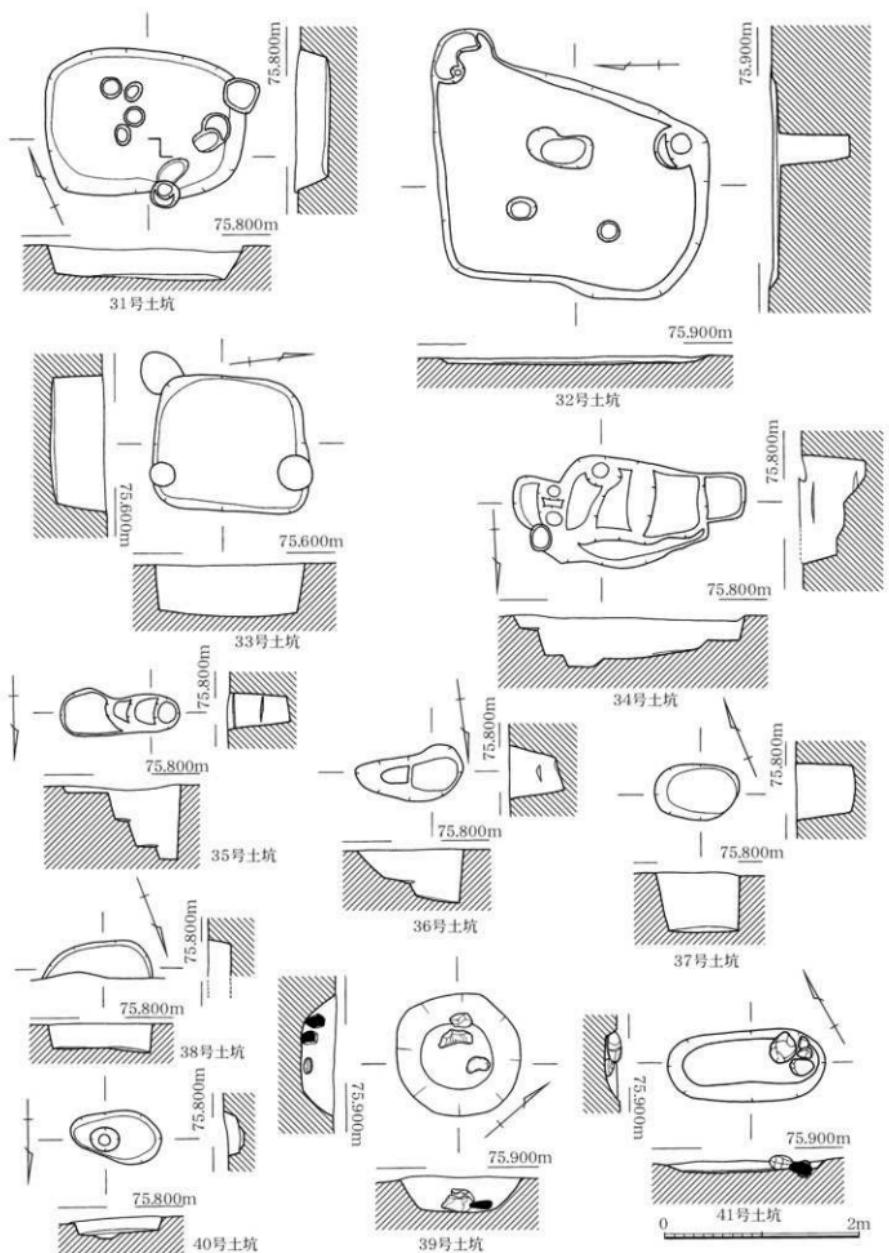
29号土坑（第56・62図 図版24）

9号A・B竪穴住居跡の北側で確認され、これに切られる。平面形は方形を呈し、規模は長軸約1.9m、短軸約1.3m+ α 、深さ約10cmを測る。平面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺物は、弥生土器の甕が出土した。

第62図27は甕の口縁である。跳ね上げ口縁で、端部を沈線状にやや窪ませる。

30号土坑（第56図 図版10）

I区の南東側で確認された。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は長軸約3m、短軸約1.8m、



第57図 土坑実測図(4) (1/80)

深さ約85cmを測る。底面はほぼ平坦で北側に段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

31号土坑（第57・62・67図 図版24・6）

30号土坑の北側で確認された。平面形はやや張り気味の隅丸方形を呈し、規模は長軸約2m、短軸約1.4m、深さ約30cmを測る。底面は平坦である。遺物は、弥生土器の甕のほか、石庖丁が出土している。

第62図28～31はいずれも甕である。28は胴部の角度から鉢と思われる。くの字形を呈し、先端はやや跳ね上げ気味である。頸部より下部はほぼ直立する。29はくの字形の口縁部を呈する跳ね上げ口縁である。頸部は鋭く屈曲し、稜が強い。屈曲部の下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。30・31はともに平底である。

第67図10は凝灰岩製の半月形石庖丁である。

32号土坑（第57・62図 図版24）

31号土坑の北西側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は南北軸約3m、東西軸約2.8m、深さ約10cmを測る。底面は平坦で、ピット状の段落ちが見られる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

第62図32は壺である。口縁は、直線的に外傾する。頸部には断面三角形の突帯が付く。

33号土坑（第57図 図版10）

2号竪穴住居跡の北西側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約1.4m、深さ約55cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、中央部に向かってわずかに傾斜している。遺物は弥生土器片が出土したが、図示はしていない。

34号土坑（第57図）

1号円形周溝状遺構の南西側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸約2.4m、南北軸約1.1m、深さ約65cmを測る。底面は階段状に段落ちが見られる。図示可能な遺物は、出土しなかった。

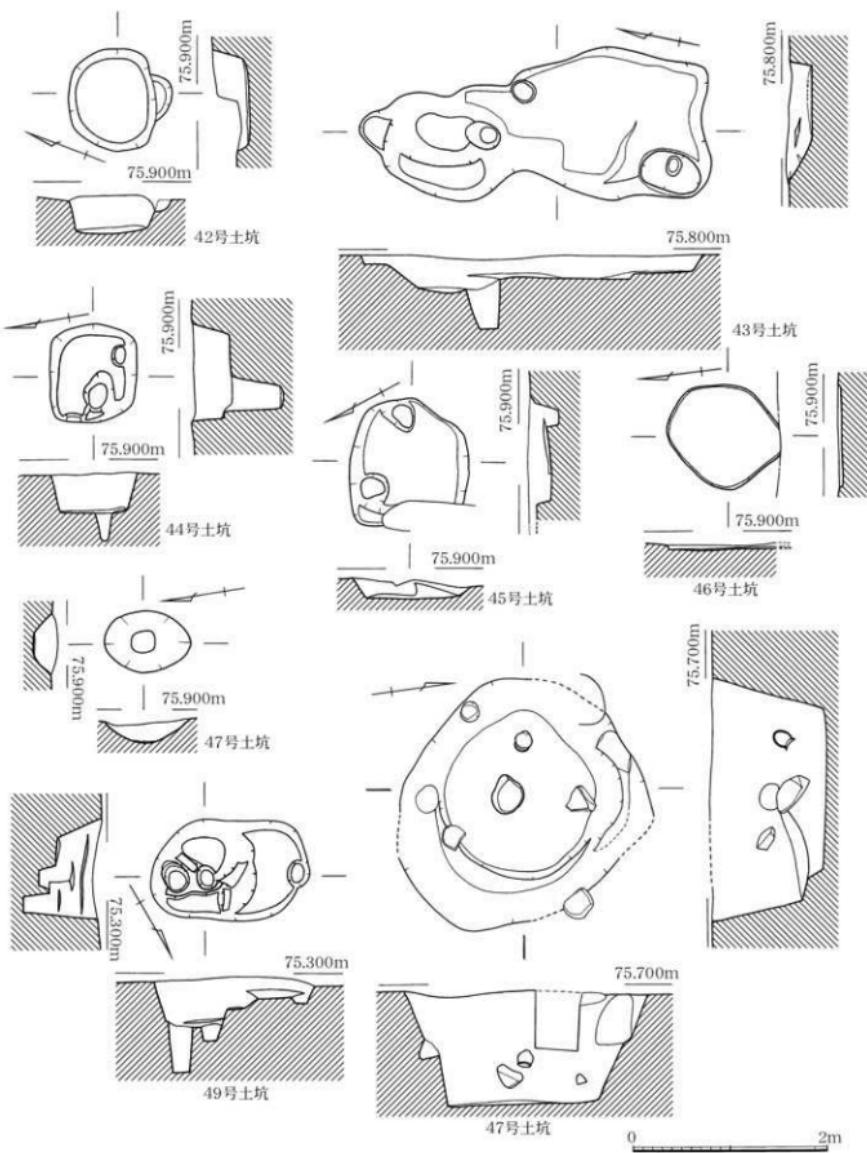
35号土坑（第57・63図 図版24）

5号竪穴住居跡の南側で確認された。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約1.2m、短軸約0.4m、深さ約80cmを測る。底面は階段状の段落ちが数段見られる。遺物は、弥生土器の器台が出土している。

第63図1は器台の脚部である。脚底部に向かって直線的に広がり、端部は丸く仕上げる。

36号土坑（第57図）

35号土坑の西側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸約1.1m、南北軸約0.6m、深さ約55cmを測る。底面には段落ちが見られ、やや西に向かって傾斜している。弥生土器片が出土しているが、図示可能な遺物はなかった。



第58図 土坑実測図(5) (1/80)

37号土坑（第57・63図 図版24）

2号竪穴住居跡の東側で確認された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ約60cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は、弥生土器の甕が出土した。

第63図2は甕である。口縁はくの字形を呈し、端部は四角く仕上げる。頭部の屈曲は緩やかで、稜線は弱い。底部は厚く、凸レンズ状に仕上げる。

38号土坑（第57図）

6号竪穴住居の南側で確認され、これに切られる。平面形は梢円形を呈するとみられ、規模は長軸約1.1m、短軸約0.4m+ α 、深さ約25cmを測る。底面は中央付近から外側に向かって、若干傾斜している。遺物は出土しなかった。

39号土坑（第57図 図版10）

I区南東隅で確認された。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は径約1.3m、深さ約35cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土中には礫が多く含まれていたが、遺物は弥生土器の小破片が出土したのみで、図示していない。

40号土坑（第57・63図 図版24）

39号土坑の北東側で確認された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約0.9m、短軸約0.5m、深さ約20cmを測る。底面はほぼ平坦で段落ちが見られる。遺物は、弥生土器の甕が出土した。

第63図3は甕である。口縁はくの字に急角度で屈曲し、端部は丸く仕上げる。胴部は球形に近い形状を呈すると思われる。

41号土坑（第57図 図版10）

39号土坑の南側で確認された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ約15cmを測る。底面は緩やかに船底状を呈する。埋土中には大型の礫が混入し、遺物は弥生土器片が出土したが、図示していない。

42号土坑（第57図）

6号竪穴住居跡の東側で確認され、これを切る。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約35cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は出土しなかった。

43号土坑（第58図 図版10）

30号土坑の南西側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は南北軸約3.5m、東西軸約1.2m、深さ約25cmを測る。底面は平坦であるが、数段の落込みが見られる。遺物は、弥生土器の小片が出土したが、図示していない。

44号土坑（第58図）

41号土坑の西側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸約1m、短軸約0.9m、深さ約40cmを測る。底面は平坦であるが、ピット状の落込みが見られる。遺物は出土しなかった。

45号土坑（第58図 図版11）

44号土坑の北側で確認された。平面形は歪な方形を呈し、西側は搅乱のため、削平を受けている。規模は長軸約1m+ α 、短軸約1.2m、深さ約25cmを測る。底面は緩やかに傾斜している。遺物は弥生土器の小破片が出土したが、図示していない。

46号土坑（第58図 図版11）

44号土坑の南側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸約1.2m+ α 、短軸約1.1m、深さ約5cmを測る。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

47号土坑（第58図）

41号土坑の南西側で確認された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ約20cmを測る、底面は中央に向かって、船底状に傾斜している。遺物は出土しなかった。

48号土坑（第58・63図 図版11）

30号土坑の北東側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸・短軸ともに約1.3m m、深さ約120cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土中は比較的大きい穂が含まれており、遺物は弥生土器の甕が出土した。また、底面より10~20cm上層には炭を少量含んだ層が堆積しており、こういった状況から貯蔵穴の可能性もある。

第63図4~8は甕である。4は完形である。口縁はくの字形を呈し、端部を跳ね上げる。頸部の屈曲は強く、厚く仕上げる。胴部はやや膨らみを持ち、底部は厚く、平底である。5の口縁もくの字形を呈し、端部は厚く仕上げる。頸部の屈曲は強く、稜は明瞭である。胴部は4に比べ、膨らみはなく、上半で最大径を測る。全体的に器壁は薄く、底部も厚くない。底面は平底である。6はくの字形口縁を呈し、端部は肥厚する。屈曲部は緩やかで、稜は弱い。7は底面を平底に仕上げ、胴部にかけて大きく外反する。8は底面をやや上底気味にし、内湾しながら立ち上がる。

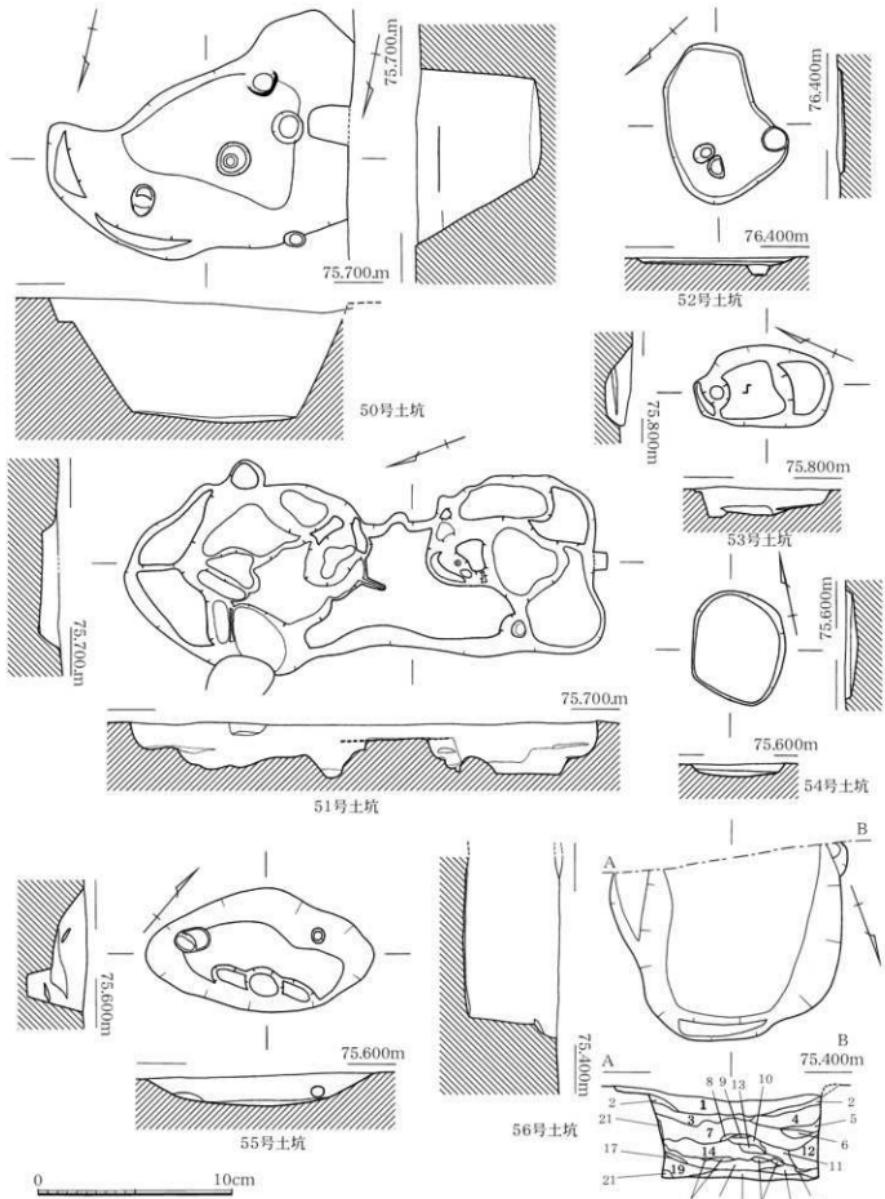
49号土坑（第58・63図 図版25）

31号土坑の北東側で確認された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約1m、深さ約95cmを測る。底面には数段の落ちが見られる。遺物は弥生土器・甕が出土した。

第63図9は甕である。口縁が大きく外反し、先端を跳ね上げる。端部は沈線状に窪ませている。

50号土坑（第59図 図版11）

14号竪穴住居跡の東側で確認され、これに切られる。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸約3.1m+ α 、南北軸約1.4m、深さ約125cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は出土しなかった。



第59図 土坑実測図(6) (1/80)

- | | | | |
|------|---------|-------|---------|
| 1. 層 | 淡黃褐色粘質土 | 15. 層 | 暗黃褐色粘質土 |
| 2. 層 | 暗黃褐色粘質土 | 16. 層 | 黃褐色粘質土 |
| 3. 层 | 暗黃褐色粘質土 | 17. 层 | 暗黃褐色粘質土 |
| 4. 层 | 灰黃褐色粘質土 | 18. 层 | 暗黃褐色粘質土 |
| 5. 层 | 黃褐色粘質土 | 19. 层 | 暗黃褐色粘質土 |
| 6. 层 | 黃褐色粘質土 | 20. 层 | 暗黃褐色粘質土 |
| 7. 层 | 黃褐色粘質土 | 21. 层 | 暗黃褐色粘質土 |

51号土坑（第59図 図版11）

II区の北東側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は南北軸約4.8m、東西軸約1.3m、深さ約15cmを測る。底面は数段の段落ちがみられるが、黄褐色ブロックが多く含む埋土など土層の堆積状況から中央部の平坦面が本来の底面で、他の部分は搅乱を受けていると考えられる。さらに埋土中には焼土や炭を含んでいた。このような状況は1号土坑や19号土坑と似ており、これらと同様に木炭窯であった可能性がある。遺物は流れ込みと見られる弥生土器の甕の小破片などが出土している。

52号土坑（第59図）

51号土坑の南東側で確認された。平面形はやや不定な梢円形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約1.1m、深さ約10cmを測る。底面は平坦でピット状の段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

53号土坑（第59図）

II区北側で確認された。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約1.4m、短軸約0.9m、深さ約30cmを測る。底面には段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

54号土坑（第59図 図版11）

19号掘立柱建物の北東側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約15cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は丹塗りの弥生土器が出土しているが、図化不能である。

55号土坑（第59図 図版11）

54号土坑の南側で確認された。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約2.3m、短軸約1.3m、深さ約30cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。西側にはピット状の落込みが見られる。遺物は弥生土器片が出土しているが、図示していない。

56号土坑（第59図 図版12）

II区の南東隅で確認された。平面形は梢円形を呈すると思われ、規模は長軸約1.9m+ α 、短軸約2.3m、深さ約95cmを測る。底面は平坦である。土層の堆積状況をみると、炭を含む層が数層見られる。特に17層がもっとも多くの炭を含んでおり、断面形状からも袋状貯蔵穴の可能性もある。

57号土坑（第60・63図 図版12・25）

3号竪穴住居跡の北東側で確認された。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸約1.5m、短軸約0.7m、深さ約55cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、東側にはピット状の段落ちが見られる。遺物は弥生土器の甕などが出土している。

第63図10・11は甕の口縁部である。8は跳ね上げ口縁で、端部に沈線を施す。9も跳ね上げ口縁で、端部は丸く仕上げる。12は甕の底部である。厚底で底面はやや上底である。

58号土坑（第60図 図版12）

3号竪穴住居跡の東側で確認された。平面形はやや胴張りの隅丸方形を呈し、規模は長軸約1.7m、短軸約1.5m、深さ約25cmを測る。底面はほぼ平坦で東側にピット状の段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

59号土坑（第60・63図 図版12・25）

56号土坑の北側で確認され、20号掘立柱建物を切る。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約1m、深さ約25cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は完形の弥生土器の鉢が出土している。

第63図13は鉢である。全体的に器壁は厚い。口縁は丸味もって立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部はほとんど張りを持たず、底部は丸底に仕上げる。

60号土坑（第60・63図 図版12・25）

2号竪穴遺構の北西側で確認され、16号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸の三角形を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約1.1m、深さ約15cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は丹塗りの弥生土器が出土している。

第63図14は甕の口縁部である。内面への突出は小さい。

61号土坑（第60図 図版12）

16号竪穴住居跡の北西側で確認された。調査時の確認不足で北西側の上端を削ってしまったが、16号竪穴住居跡を切る。平面形は長方形を呈するとみられ、規模は長軸約1.6m、短軸約1m+ α 、深さ約25cmを測る。底面は北東側に向かって緩やかに傾斜し、ピット状の段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

62号土坑（第60・63図 図版13）

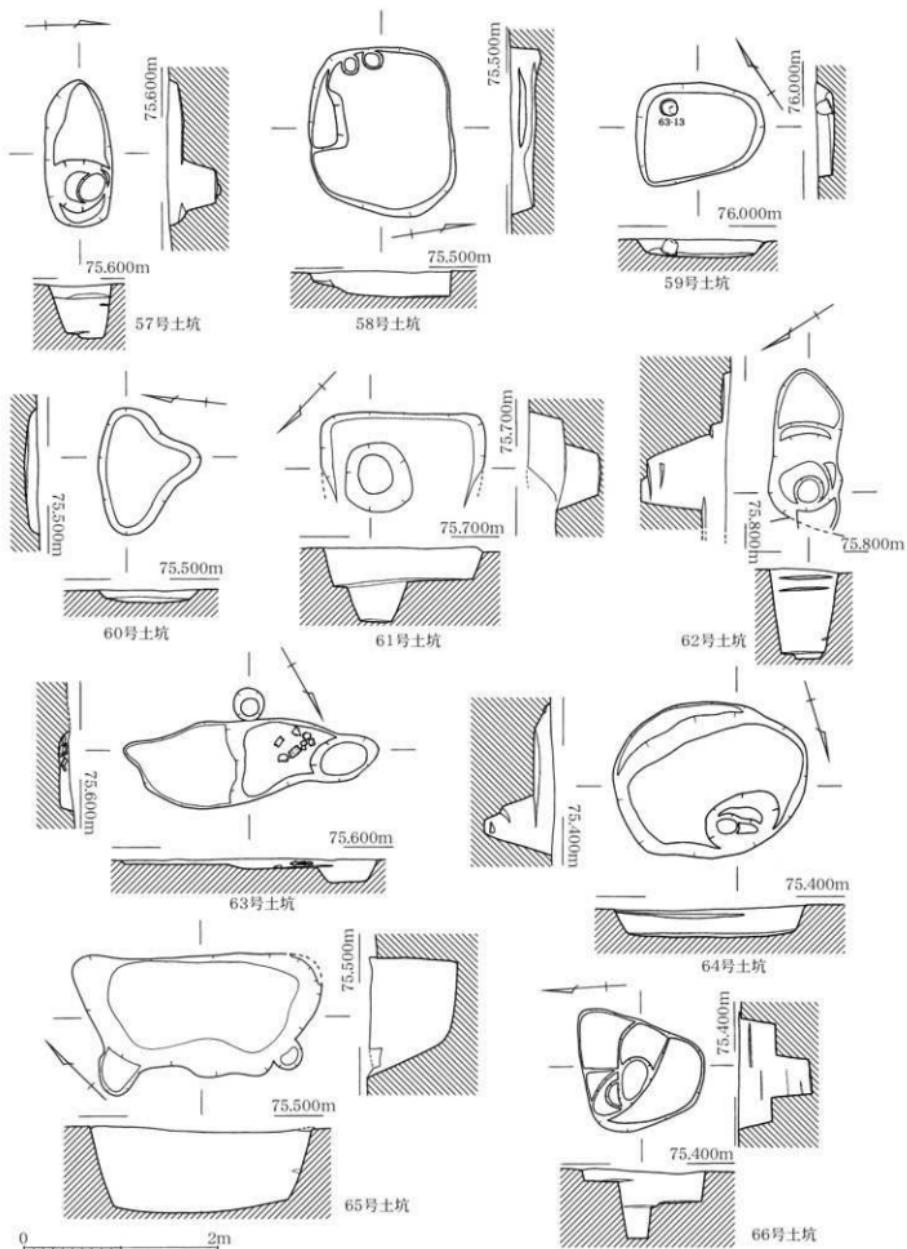
61号土坑の北東側に隣接して確認され、16号竪穴住居跡を切る。平面形は細長い不定な梢円形を呈し、規模は長軸約1.6m+ α 、短軸約0.7m、深さ約90cmを測る。底面には数段の段落ちが、見られる。遺物は弥生土器の甕が出土している。

第63図15は甕の口縁部である。端部は四角く仕上げ、沈線状の瘤みがある。16は甕の底部である。底面は完全な平底で、大きく外反しながら立ち上がる。

63号土坑（第60・63図 図版25）

3号竪穴住居跡の北西側で確認された。平面形は不定な梢円形を呈し、規模は長軸約2.6m、短軸約0.8m、深さは約25cmを測る。底面には数段の段落ちが見られる。遺物は、瓦質土器の甕・鉢、滑石製のバレン状石製品が出土している。隣接する17号掘立柱建物に伴う土坑と考えられる。

第63図17は瓦質土器の甕である。頸部の器壁を厚く作り、外面の稜は明瞭である。外面はタタキ、内面はハケで仕上げる。18は瓦質土器の鉢の底部である。底面はやや上底を呈する。



第60図 土坑実測図(7) (1/80)

64号土坑（第60・63図 図版13）

II区南端中央付近で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸約2m、短軸約1.6m、深さ約30cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜し、北側にはピット状の段落ちが見られる。遺物は弥生土器片が出土している。

第63図19は甕の口縁部である。鋤先状を呈し、内面に丸く仕上げた端部を大きく突出させる。20は甕の底部である。底面はやや上底気味に仕上げ、直立して立ち上がる。

65号土坑（第60・63図 図版25）

3号竪穴住居跡の南東側で確認された。平面形は不定な梢円形を呈し、規模は長軸約2.3m、短軸約1.2m、深さ約85cmを測る。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は弥生土器の甕が出土している。

第63図21は甕の口縁部で、くの字形を呈し、先端を四角く仕上げる。22・23は甕の底部である。22は平底で底部を厚く仕上げるのに対し、23は底部はやや薄く、胴部に向かって、外反気味に立ち上がる。

66号土坑（第60・68図 図版13・27）

59号土坑の東側で確認された。平面形は歪な台形状を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約1.1m、深さ約75cmを測る。底面は数段のピット状の段落ちがいくつか見られる。遺物は磨製石斧が出土している。

第68図2は安山岩製の磨製石斧である。半分以上欠損しており、表面も大部分が剥離している。刃部には使用に伴うとみられる剥離がある。

67号土坑（第61・63図 図版13）

51号土坑の南西側で確認された。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約0.7m、深さ約20cmを測る。底面には段落ちが見られる。遺物は弥生土器の甕が出土している。

第63図25は甕の口縁部である。跳ね上げ口縁で、端部を窪ませる。

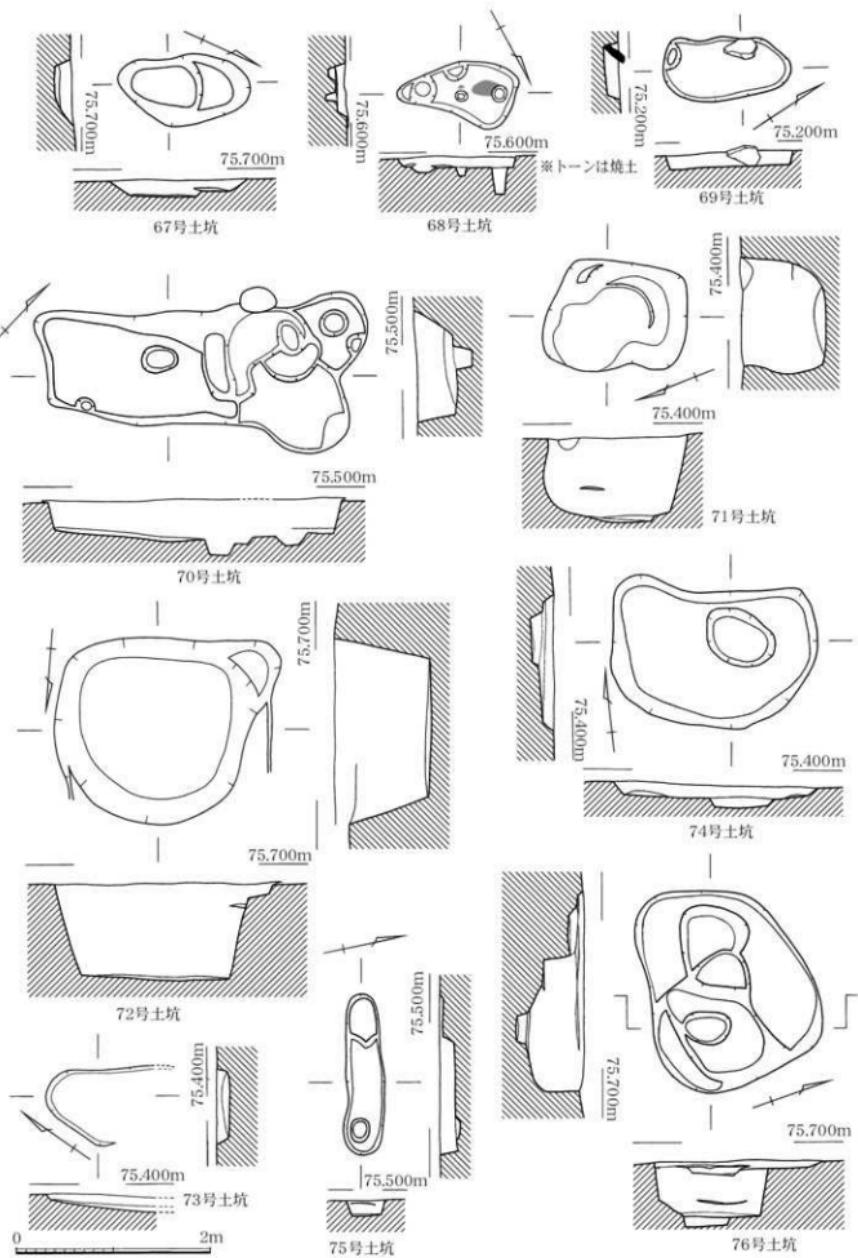
68号土坑（第61図）

67号土坑の東側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸約1.2m、南北軸約0.6m、深さ約10cmを測る。底面にはピット状の段落ちが数段見られる。遺物は弥生土器の小破片が出土しているが、図示していない。

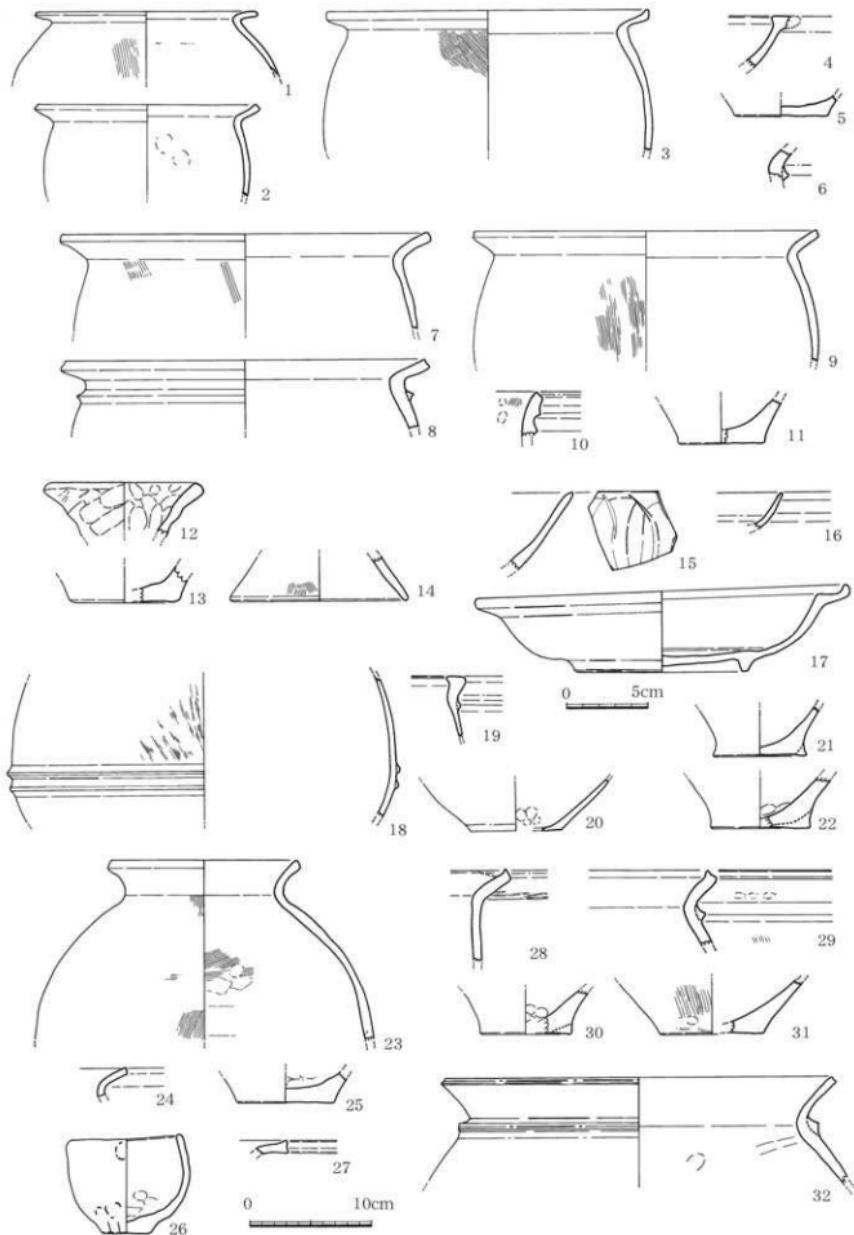
69号土坑（第61・63図 図版13・25）

68号土坑の南側に隣接して確認された。平面形はやや歪な梢円形を呈し、規模は長軸約1.3m、短軸約0.7m、深さ約15cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土中から板石が出土した。遺物は弥生土器の大型甕などが出土している。

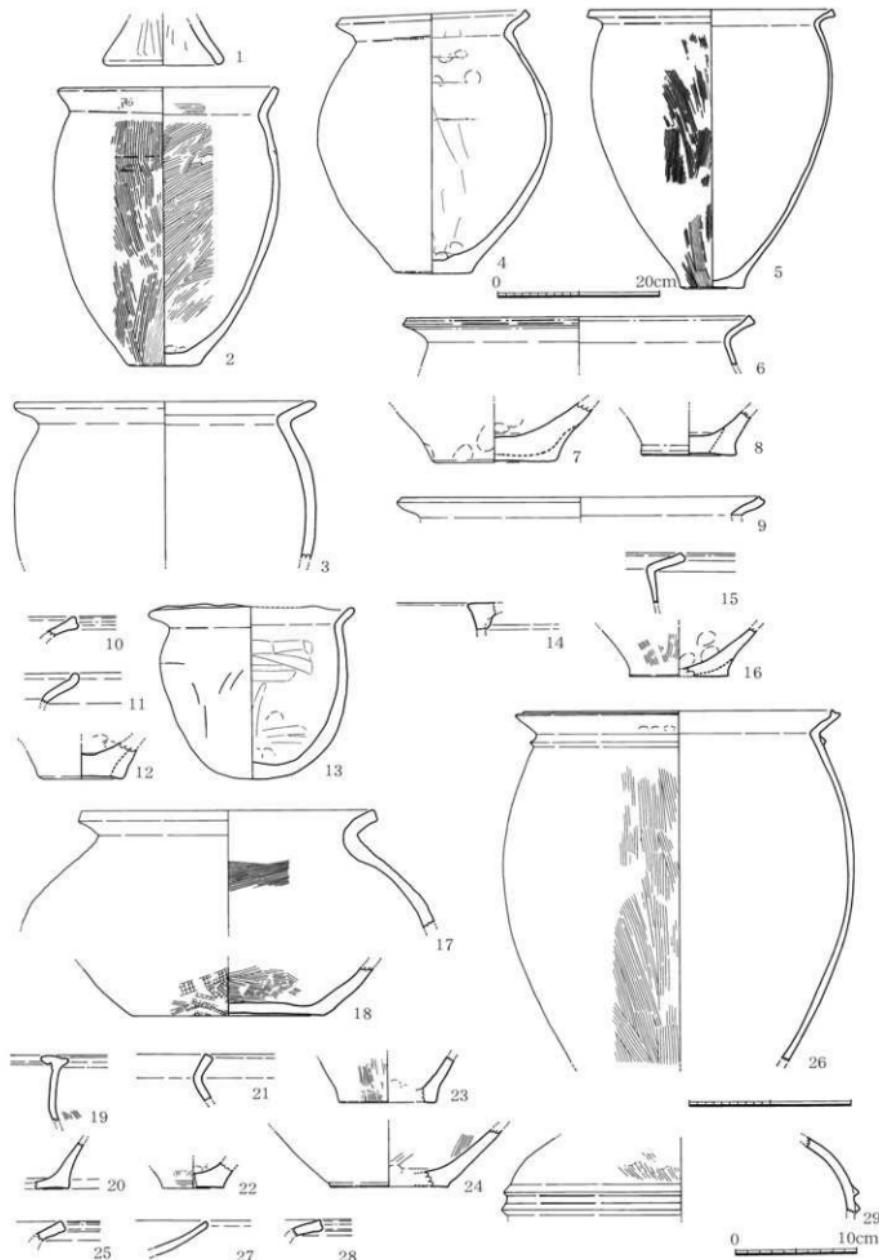
第63図26は甕である。口径38.4cm、胴部最大径43.4cm、残存高43.6cmと大型である。口縁部はくの字形を呈し、端部を鋭く跳ね上げる。頸部の屈曲は鋭く、稜は明瞭である。また、断面三角形



第61図 土坑実測図(8) (1/80)



第62図 土坑出土遺物実測図(1) (1/4、15~17は1/3)



第63図 土坑出土遺物実測図(2) (1/4, 5・26は1/6)

の突帯を貼り付ける。

70号土坑（第61・63図）

66号土坑の北東側で確認された。平面形は長方形気味の不定形を呈し、規模は東西軸約3m、南北軸約1.2m、深さ約45cmを測る。底面の北東側にはピット状の段落ちが見られ、南西側は平坦である。遺物は、弥生土器の甕などが出土している。

第63図28は甕の口縁部である。跳ね上げ口縁で、端部を窪ませる。

71号土坑（第61図 図版13）

56号土坑の東側で確認された。平面形は方形気味の不定形を呈し、規模は南北軸約1.5m、東西軸約1.1m、深さ約85cmを測る。底面は浅い段落ちがあり、中央に向かって緩やかに傾斜する。遺物は出土しなかった。

72号土坑（第61図 図版13）

51号土坑の西側に隣接して確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸約2m、短軸約1.9m、深さ約1mを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

73号土坑（第61図）

3号竪穴住居跡の南西側で確認され、これを切る。平面形は楕円形を呈し、南東側は削平されている。規模は長軸約1.1m+ α 、短軸約0.8m、深さ約15cmを測る。底面は長軸方向が中央に向かって傾斜している。遺物は出土しなかった。

74号土坑（第61図）

70号土坑の東側で確認された。平面形は不定形を呈し、規模は東西軸約2.1m、南北軸約1.4m、深さ約25cmを測る。底面は中央付近にピット状の段落ちが見られる。遺物は出土しなかった。

75号土坑（第61図）

20号竪穴住居跡の東側で確認された。平面形は細長い楕円形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約0.4m、深さ約15cmを測る。底面には段落ちが見られる。遺物は土器の小片が出土した。

76号土坑（第61・63図 図版25）

54号土坑の北側で確認された。平面形はやや不定形を呈し、規模は東西軸約2.1m、南北軸約1.8m、深さ約65cmを測る。底面には数段にわたって段落ちが見られる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

第63図29は壺である。倒卵形を呈すると考えられる。胴部最大径部分に断面三角形の突帯を2条貼り付ける。

(8) 墓

1号壺棺墓 (第64・65図 図版13・25)

I区中央付近で確認された単棺の小児用壺棺墓である。墓坑は梢円形を呈し、西から東にかけて掘り込まれている。墓坑は西側を掘り過ぎているが、確認面での規模は東西方向約0.8m、南北方向約0.7m、深さ約50cmを測る。主軸方向はN-60°W、埋置角度は40°を測る。内部には土砂が多量に流れ込んでおり、人骨等は確認できなかった。

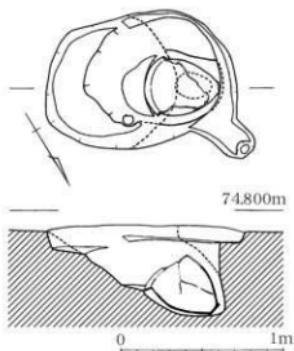
第65図は1号壺棺墓に使用された壺棺である。口縁はくの字形を呈し、端部に向かってやや厚みを帯びる。端部は四角く仕上げ、先端をやや窪ませている。器壁は薄く、胴部最大径は上位に位置する。口径34.8cm、胴部最大径34.4cm、底径8.8cm、器高38.9cmを測る。頸部内面には指壓さえ、ナデが施され、外面は頸部下部から底部にかけて縦方向のハケが施される。

(9) その他の遺物 (第66・67・69図 図版25~27)

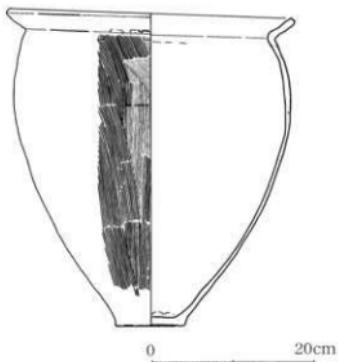
ここでは、柱穴出土や遺構検出時に出土した遺物土器・石器、ならびに掘立柱建物・土坑から出土した石器・石製品・土製品について述べる。

第66図はいずれも弥生土器である。1・2は柱穴出土の鉢である。1は内面・外面全体にわたって、指壓さえ・ナデが施される。2はほぼ完形で、内面・外面とともに縦方向のハケが施され、口縁内面には指壓さえが見られる。3も柱穴出土の短頸壺である。口縁は短く、ほぼ水平に外に開き、端部を丸く仕上げる。外面は摩滅により調整不明である。内面は頸部付近は工具によるケズリ、底部付近は指壓さえを施す。4は複合口縁壺である。口縁下部の屈曲は弱く、若干膨らみを持ちながら、内傾して立ち上がる。外面には縦方向、内面は横方向のハケが施される。5・6は鉢である。いずれも底部は平底である。5はほぼ直線的に立ち上がり、6は口縁部に向かって、やや内湾する。7は手捏土器である。内外面ともに指壓さえの痕が明確に残る。8は鉢である。底部は丸底で、直線的に外傾して立ち上がる。9・10は器台である。9の内面は工具によるナデが施される。

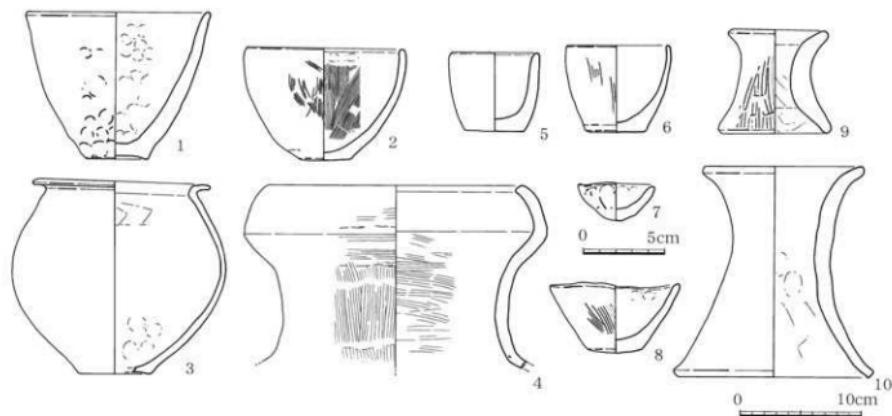
第67図2~4は柱穴出土の打製石鏃でいずれも無茎鏃である。2・4は基部に抉入のある凹基無茎鏃で、3は抉入のない平基無茎鏃である。12は柱穴出土の安山岩製である。直線刃長方形で、刃部には研磨痕が残る。13~16は表土中より出土した石庖丁である。13~15は外湾刃半月形、16は直線刃長方形である。13は凝灰岩製、14~16は安山岩製である。



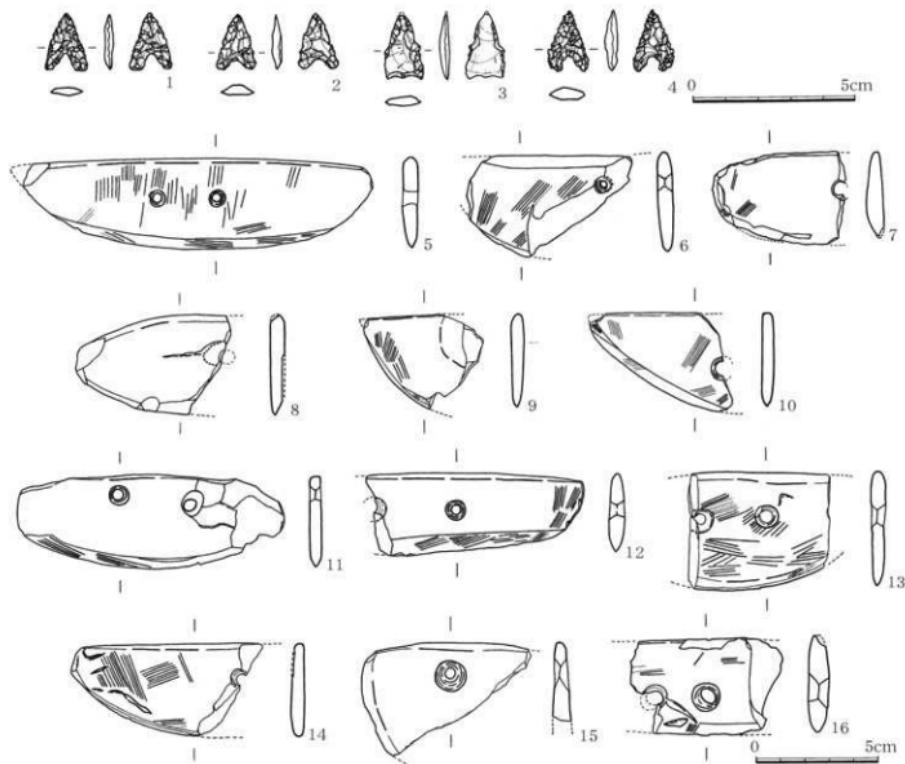
第64図 1号壺棺墓実測図 (1/30)



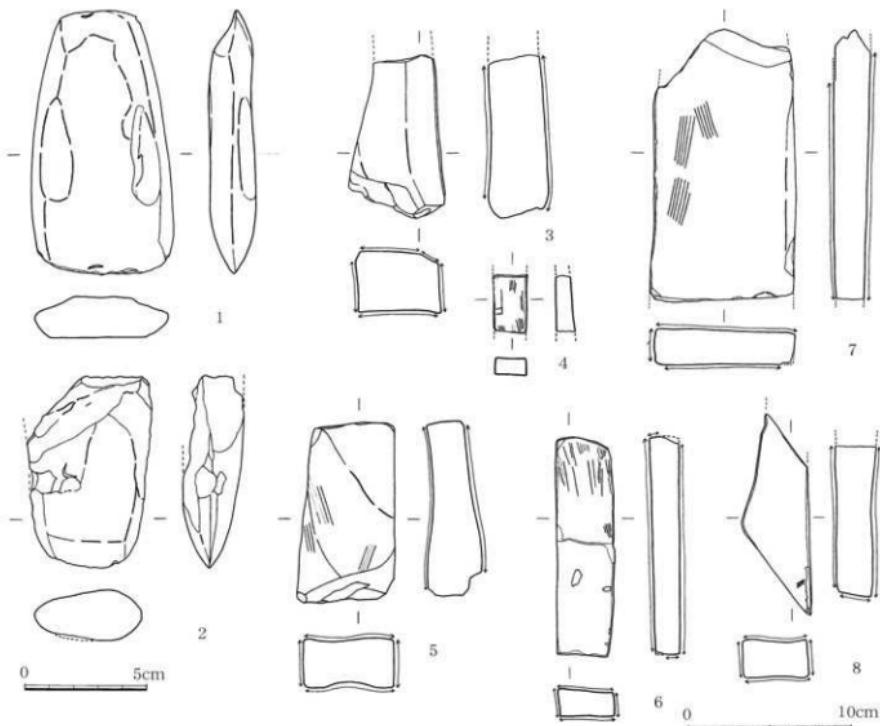
第65図 1号壺棺墓実測図 (1/6)



第66図 柱穴及び他の出土遺物実測図 (1/4、7は1/3)

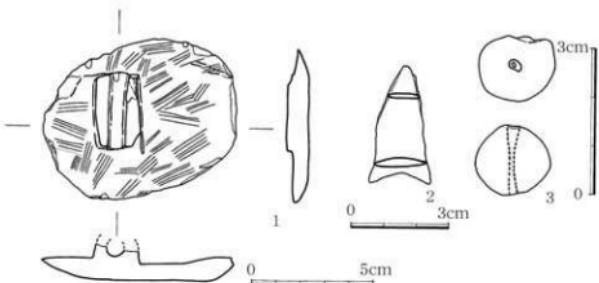


第67図 出土石器実測図(1) (1~4・2/3、5~16・1/2)



第68図 出土石器実測図(2) (1/2, 7・8は1/3)

第69図 1は石鍋の破損時に補修に使用したとみられる、滑石製のバレン状石製品である。管的部分は半分が欠損しており、若干のススが付着する。内外面ともに研磨痕が明瞭に確認できる。2は15住出土の鉄鎌である。浅い挿入のある凹基無茎鎌である。3は14号掘立柱建物出土の土玉である。穿孔は貫通するが、中央あたりの径はやや狭まっている。



第69図 出土石製品・鉄鎌・土製品実測図 (1/2・2/3・1/1)

IV まとめ

これまで報告してきたように高野遺跡では、竪穴住居（以下、住居）・土坑・掘立柱建物（以下、建物）・甕棺墓・溝などが確認された。以下、弥生時代と中世の遺構について述べていく。

弥生時代の遺構は住居 25 軒・土坑 72 基・甕棺墓 1 基・建物 6 棟が確認された。住居については、調査区の西側に集中して見られる。西側を流れる大肥川まで約 30 m の距離にあり、山と川に挟まれ、狭い土地に集落が展開していたことが窺える。

住居の平面プランは方形が 20 軒、円形が 5 軒で、全体のプランが確認できる方形住居 16 軒のうち、正方形が 10 軒、長方形が 6 軒を数える。また、3・19 号住居、10・22 号住居の切り合い関係から、円形から方形への平面形の変遷が予測される。

出土遺物および平面形をもとに、住居の所属時期を概説する。中期末から後期初頭には円形プランの 10 AB・16・19・20 号住居、方形プランの 11・12 A 号住居が所属する。続いて、4～6・23 号住居は口縁部の屈曲部の稜が明瞭な複合口縁壺や口縁部の立ち上がりが傾斜する甕などから、後期初頭～前半に位置付けられる。7・13・17・18 号住居は、口縁部が直線的に外傾し、底部がややレンズ状に張り出す甕などから後期前半に、3・8 号住居は、底部がレンズ状になる甕、口縁部が立ち上がる複合口縁壺などから後期中頃に比定される。この他の住居は出土遺物から明確な時期決定が難しいものの、他の住居と同様に中期末から後期中頃の範疇で捉えていいだろう。

上述した弥生時代の住居の時期から、高野遺跡の集落は中期末から後期初頭に形成され、後期初頭から前半に最も規模が大きくなり、中頃まで存続する短期間に営まれた集落であることがわかる。上記の時期比定により住居の変遷を概観すると、住居の平面プランが 10 m を超える大型化した円形から次第に方形へと変化し、後期前半から中頃にかけて、方形住居の大型化、ベッド状遺構など屋内施設の出現などが特徴として指摘できる。

土坑については住居と同様に各時期を通じて見られ、貯蔵穴や廃棄坑として使用されていたと思われる。

また、甕棺墓は直線的に外傾する口縁部や胴部最大径がやや上位に位置するなどの特徴から中期末に位置付けられ、集落からはやや離れた場所に単独で存在する。

また、この時期の建物については、I 区に 1 棟、II 区に 5 棟存在する。これらの建物の配置状況をみると、18 号建物と 21 号建物の軸方向はまったく同じ、19 号建物と 20 号建物が 2° の範囲内に収まり、位置的にも近接している。このような状況からそれぞれが、同時期のものと考えて差し支えないであろう。その時期に関しては、時期決定に有効な遺物は出土していないが、少なくとも 17・18 号住居と軸がほぼ同じ 18・21 号建物は、これらの住居と同時期の後期前半のものと考えていいのではないだろうか。

大肥川中流域では大肥遺跡^[1]で前期末から継続的に集落や墳墓が、大肥川を挟んで対岸の大肥中村遺跡^[2]では中期以降の墳墓群が営まれている。これに対し、下流域では、大肥祝原遺跡^[3]や大肥上村遺跡^[4]などの中期末以降の集落しか確認されておらず、その密度も極めて低いため、高野遺跡が下流域において、最も大きな拠点集落であるといえる。しかし、中期末以降の短期間に営まれたことから、下流域への生活域の拡大が一時的だったことを物語っている。

中世の遺構については、建物 16 棟、溝 1 条、土坑 4 基が確認された。

この時期の建物は、調査区西側を南北に連なるように展開し、切り合うことなく存在している。

まず、この建物群の配置・構成を考えるために床面積・軸方向によって分類を行った。その結果、床面積からは、I 類（10 m 以上 20 m 未満）、II 類（20 m 以上 30 m 未満）、III 類（30 m 以上）の 3 類が（2・10・12 号建物は確認できる規模から推測）、建物の軸方向（梁・桁方向を問わない）からは、ほぼ同じ軸の建物群が A～D の 4 群存在することが確認できた。

これらを合わせて考えると、下表のようになる。B 群の中で 4・5・7・16 と 17・22 号建物は近接した位置にあり、また、A・C・D 群内でも近い位置にまとまって建物が存在している。このことから、1 つの群が I～III 類の各建物により、同時期に 4 棟前後で構成されていたと考えられる。この考えに依れば、A・D 群についても I・II 類の建物が調査区外に存在している可能性がある。

次に建物の時期についてであるが、11 号建物出土の瓦質土器鉢や 17 号建物出土の白磁小皿、さらに 19 号土坑出土の青磁皿などから、12 世紀後半～13 世紀前半の範囲に収まるとみられ、11・17 号建物を含む B・C の建物群は、この時期のものと考えられる。A・D 群の建物については、B・C 群と明確な切り合い関係が認められなかったため、どの程度の時期差が生じるのかは不明であるが時期的には大きな隔たりはないと考えたい。

1 号溝の年代については、埋土中より出土した龍泉窯系の青磁碗の特徴から 12 世紀末～13 世紀前半のものと考えられ、建物群と同様の時期である。つまり、規模や軸方向とは別に、1 号溝を挟んで、大きく 2 つに建物群が区画されたと考えられる。また、溝北側には四面庇をもつ 11 号建物やそれと推定される 12 号建物が存在していることから、B・D 群が集落の中心的な位置を占めていたとも考えられる。

以上、大まかに中世の建物群について概観してきたが、これらの建物群の存在から、高野遺跡一帯における、大肥荘時代の一時期の様子を垣間見ることができたといえよう。

軸方向	A : 29°~31°		B : 14°~17°			C : 21°~24°			D : 82°~85°
床面積	II 類	III 類	I 類	II 類	III 類	I 類	II 類	III 類	
建物 No.	3	1・2	4・15	7・16・17・22	5	6・13	10	11	12・14

※軸方向は北から東、太字は 1 号溝南側の建物

〔註〕

(1) 渡邊隆行編『大肥遺跡 I-A-1 区の調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第 50 集 日田市教育委員会 2004

(2) 行時志郎編『大肥中村遺跡－発掘調査概報－』日田市教育委員会 2003

行時桂子編『大肥中村遺跡 I』日田市埋蔵文化財調査報告書第 62 集 日田市教育委員会 2006

(3) 若杉竜太編『大肥祝原遺跡 大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 45 集 日田市教育委員会 2003

〔参考文献〕

坂本嘉弘編『陣ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第 9 集 玖珠町教育委員会 1999

吉田東明「1. 仁右衛門畠遺跡の弥生時代中期土器について」平尾和久「2. 浮羽郡内における弥生時代後期の土器について」

吉田東明編『仁右衛門畠遺跡 II』一般国道 210 号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 14 集 福岡県教育委員会 2001

中世土器研究会編『中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

〔追記〕

平成 18 年 1 月 22 日、埋蔵文化財係長を務められた田中伸幸氏が永眠された。見た目も中身も大きな方で、担当者が発掘調査現場や報告書作成で疲れているときには必ず優しい言葉で励ましてくださる、尊敬すべき係長であった。1 年 3 ヶ月もの長い期間、闘病生活を余儀なくされたが病魔には克てず、享年 47 才という若さで旅立たれた。生前のご指導に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

第2表 出土土器觀察表

鉢図番号	遺構名	種別	形種	法 番		調 整		胎土	焼成	色 調		備 考	
				口径	側面径	底径	唇面			外面	内面		
第6回1	2往	舟生	高杯	—	—	—	(2.3)	ナデ	ナデ	A B E F H	良好	黒褐色	黒褐色
第6回2	2往	舟生	甌	—	—	—	(3.1)	ナデ	ハケ	A C E F	良好	橙色	灰褐色
第6回3	2往	舟生	甌	—	—	2.7	(3.2)	ナデ	ナデ	A C E H	良好	暗茶褐色	褐色 外面にスス付着
第6回4	2往	舟生	甌	—	—	(7.6)	(3.4)	ハケ・ナデ	ナデ	A C	良好	淡黄色	褐色 外面スス付着
第6回5	2往	舟生	甌	—	—	(9.0)	(4.9)	ナデ	ナデ	A E H	良好	にぶい橙色	暗灰褐色
第6回6	2往	舟生	甌	—	—	8.9	(4.6)	ナデ	指揮さえ	A B D E F	良好	暗褐色	深褐色
第8回1	3往	舟生	甌	(25.4)	(25.2)	—	(11.7)	ハケ・ナデ	ナデ	A B E C	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回2	3往	舟生	甌	(23.0)	—	—	(8.6)	ハケ・ナデ	AH	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 口縁部内面にスス付着	
第8回3	3往	舟生	甌	(16.9)	—	—	(6.4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A C E	良好	にぶい橙色	にぶい橙色
第8回4	3往	舟生	甌	(10.2)	(18.6)	—	(8.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A B	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回5	3往	舟生	甌	(23.8)	—	—	(6.1)	ナデ?	ナデ?	A C D E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回6	3往	舟生	甌	(32.6)	—	—	(8.4)	ナデ	ナデ	C H	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 下縁
第8回7	3往	舟生	甌	(17.8)	—	—	(3.8)	ハケ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A C E H	良好	浅黄色	浅黄色 ベッド
第8回8	3往	舟生	甌	(17.4)	—	—	(6.2)	ナデ?	ナデ?	A B D E	良好	灰黄色	灰黄色
第8回9	3往	舟生	甌	(13.0)	—	—	(11.1)	ハケ・ナデ	指揮さえ・ハケ・ナデ	B D E G	良好	淡黄色	淡黄色 中～下縁
第8回10	3往	舟生	甌	(14.8)	—	—	(4.8)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A B C D E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 下縁
第8回11	3往	舟生	甌	(16.0)	—	—	(3.0)	ナデ	ナデ	B E	良好	灰黄褐色	灰黄褐色 下縁(ベッド)
第8回12	3往	舟生	甌	15.8	—	—	(9.5)	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A C E F	良好	暗橙色	暗橙色
第8回13	3往	舟生	甌	17.0	—	5.7	13.0	ハケ・ナデ	指揮さえ・ハケ・ナデ	B C D E F	良好	淡黄色・赤褐色	淡黄色
第8回14	3往	舟生	甌	10.5	16.8	6.0	16.1	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A B C E G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 スス付着・工具痕
第8回15	3往	舟生	甌	(15.2)	4.6	(12.1)	ハケ・ナデ	指揮さえ・ハケ・ナデ	A B D G	良好	にぶい黄褐色	浅褐色 外面スス付着	
第8回16	3往	舟生	甌	—	17.3	6.6	(14.4)	ナデ	指揮さえ・ナデ	A B E H	良好	浅黄色	浅褐色 スス付着
第8回17	3往	舟生	甌	—	(13.6)	6.4	(11.2)	ナデ	ナデ?	B G H	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回18	3往	舟生	甌	—	—	5.2	(9.2)	?	指揮さえ・ナデ	B C D F	やや粗	暗褐色	暗褐色
第8回19	3往	舟生	甌	—	—	(10.0)	(3.8)	ハケ・ナデ	ナデ	A H	良好	浅黄色	暗灰褐色 下縁
第8回20	3往	舟生	甌	—	—	5.0	(10.0)	ナデ	ケスリ・ナデ	A B D E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回21	3往	舟生	甌	—	—	(7.2)	(7.1)	ハケ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A B E	良好	明黃褐色	明黃褐色 工具痕
第8回22	3往	舟生	甌	—	—	(7.0)	(10.0)	ハケ・ナデ	ナデ	A B E	良好	にぶい橙色	にぶい橙色 下縁
第8回23	3往	舟生	甌	—	—	(8.2)	(8.0)	ハケ・ナデ	ナデ	B D H	良好	浅黃褐色	淺黃褐色 下縫・内面に工具痕
第8回24	3往	舟生	甌	—	—	(6.4)	(5.5)	ナデ	ナデ	A E	良好	にぶい黄褐色	暗灰褐色 外面スス付着
第8回25	3往	舟生	高杯?	—	—	(14.4)	(6.6)	ナデ	ナデ	A E H	良好	にぶい橙色	にぶい橙色 中縫
第8回26	3往	舟生	脚付甌	—	—	(10.0)	(14.1)	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A B E F G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第8回27	3往	舟生	脚付甌	—	—	12.6	(4.9)	ナデ	指揮さえ・ナデ	A B C E G	良好	淡褐色	淡褐色
第8回28	3往	舟生	脚台	—	—	(12.8)	(14.8)	ナデ	指揮さえ・ナデ	A E H	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 工具痕
第8回29	3往	舟生	千手鉢(留物)(8.0)	—	(8.0)	10.2	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A B D G	良好	浅黄色	浅黄色 下縫	
第8回30	3往	舟生	脚台	(7.2)	—	(8.6)	10.7	指揮さえ・ナデ	ナデ	A D E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第10回1	4往	舟生	甌	—	—	(2.1)	ナデ	ナデ	ナデ	A E	良好	黄灰褐色	暗灰褐色
第10回2	4往	舟生	甌	(9.2)	—	—	(4.2)	ナデ?	ナデ?	A E	良好	浅黄色	浅黄色
第10回3	4往	舟生	甌	(24.6)	—	—	(4.2)	ナデ	ナデ	B E H	良好	浅黃褐色	黃褐色
第10回4	4往	舟生	甌	—	(13.0)	—	(8.0)	ナデ	ナデ	A E H	良好	にぶい黄褐色	暗褐色 内面は工具ナデ
第10回5	4往	舟生	甌	—	11.7	5.9	(12.2)	ナデ	指揮さえ・ナデ	A D E G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 外面は工具ナデ
第10回6	4往	舟生	甌	—	—	(7.7)	(2.7)	ナデ	ナデ	A C D E F	良好	淡褐色・橙色	暗褐色
第10回7	4往	舟生	甌	—	—	(6.6)	(3.6)	ナデ	?	A C D E	良好	灰黄褐色	にぶい黄褐色
第10回8	4往	舟生	甌	—	—	(7.6)	(4.9)	ナデ	指揮さえ・ナデ	A D E	良好	にぶい橙色	暗褐色
第10回9	4往	舟生	甌	—	—	7.2	(11.7)	ナデ	ナデ	A E F	良好	橙色	にぶい黄褐色
第12回1	5往	舟生	甌	—	—	(3.6)	ナデ	ハケ・ナデ	AB E G	良好	暗褐色	深褐色	
第12回2	5往	舟生	甌	(32.6)	—	—	(7.2)	ナデ・ハケ	AB C E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第12回3	5往	舟生	甌	—	—	(8.7)	ナデ・ハケ	指揮さえ・ハケ・ナデ	AB C E G	良好	黄灰褐色	暗灰褐色	
第12回4	5往	舟生	甌	(21.4)	(19.0)	—	(8.6)	ハケ・ナデ	ナデ・ナデ	A B C F H	不良	明赤褐色	明褐色・深褐色 内面にスス付着
第12回5	5往	舟生	甌	(28.2)	—	—	(2.4)	ナデ	ナデ	A B C D E G	良好	淡黄色	淡褐色 内面一部接合痕残

第3表 出土土器観察表

件名番号	遺物名	種別	形種	法量		調整		新土	焼成	色調		備考		
				Ω径	脚部径	底径	底高	外面	内面	外面	内面			
										褐色	褐色	外面上工具ナデ		
第12回6	5住	弥生	甕?	(14.4)	—	(6.4)	(12.9)	ハケ+ナデ	指押さえ+ハケナデ	ADE	良好	褐色	褐色	
第12回7	5住	弥生	鉢	15.6	14.2	5.8	11.2	ハケ+ナデ	指押さえ+ハケナデ	A B E H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第12回8	5住	弥生	甕	—	—	(6.6)	(7.7)	ハケ+ナデ	ナデ	A B C D E	良好	淡褐色	外面上スズ付着	
第12回9	5住	弥生	甕	—	—	5.8	(2.0)	ナデ	ナデ	A B C H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第12回10	5住	弥生	甕	—	—	(7.8)	(3.8)	ナデ	ナデ	A B C D E F	不良	淡褐色	外面上スズ付着	
第14回1	6住	弥生	甕	—	—	—	(4.1)	ナデ	ナデ	A D E F	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第14回2	6住	弥生	甕	—	—	—	(2.0)	ナデ	ナデ	A E	良好	褐色	灰褐色	
第14回3	6住	弥生	縁台	—	—	(11.6)	(7.8)	ハケ+ナデ	ナデ	A B E F	良好	赤褐色	淡褐色	
第16回1	7住	弥生	甕	(17.4)	—	—	(2.5)	ナデ	ナデ	A C E F	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第16回2	7住	弥生	甕	(18.4)	(20.0)	(6.2)	(18.5)	ハケ+ナデ	ナデ	E F G	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第16回3	7住	弥生	甕	—	—	—	7.3	(14.8)	ハケ	?	A B F H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色
第16回4	7住	弥生	甕	(12.4)	(12.2)	—	(11.4)	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	A D E F G	良好	淡褐色	にぶい黄色	
第16回5	7住	弥生	甕	—	—	(8.0)	(5.6)	?	?	A B C D E	中や不良	淡褐色	淡褐色	
第16回6	7住	弥生	甕	—	—	(6.2)	(4.4)	ハケ+ナデ	ナデ	D E F	良好	褐色	にぶい褐色	
第16回7	7住	弥生	甕	—	—	(6.4)	(2.0)	ナデ	指押さえ	B C D H	中や不良	暗褐色	暗褐色	
第16回8	7住	弥生	甕	—	—	—	—	—	—	A H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第16回9	7住	弥生	甕?	—	—	—	(6.6)	ナデ	ナデ	A B D E G	良好	浅黄褐色	灰白色	
第16回10	7住	弥生	高环	—	—	—	(8.9)	ナデ	?	A B C D E F	不良	淡褐色	淡褐色	
第16回11	7住	弥生	支脚	(7.2)	—	(11.8)	7.4	指押さえ+ナデ	ナデ	B C E F G	不良	赤褐色	淡褐色	
第16回12	7住	弥生	鉢	10.4	—	6.2	8.4	指押さえ+ナデ	指押さえ+ハケ+ナデ	A B C D G	良好	にぶい褐色	スズ付着	
第16回13	7住	弥生	ヨリヨキ粘土器	—	(12.7)	(11.5)	ハケ+ナデ	指押さえ+ナデ	A B C	良好	浅黄褐色	灰白色		
第19回1	9住	弥生	縁台	—	—	—	(4.8)	ナデ	ハケ	B C E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回2	9住	弥生	甕	—	—	(9.4)	(3.0)	?	指押さえ	A B C E H	良好	赤褐色	黑褐色	
第19回3	9住	弥生	鉢	9.6	—	3.3	5.6	ナデ	指押さえ+ナデ	A C E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回4	9住	弥生	鉢	15.4	—	3.4	6.7	指押さえ+ナデ	指押さえ+ナデ	A C E H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回5	9住	弥生	甕	(16.0)	—	(16.5)	(9.0)	ハケ+ナデ	指押さえ+ナデ	A B C D E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回6	9住	弥生	鉢	—	(21.6)	7.6	(11.6)	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回7	8住	弥生	支脚	4.5	—	9.4	9.4	ナデ	ハケ+ナデ	A B	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第19回8	8住	弥生	支脚	(3.8)	—	(10.4)	(10.6)	ナデ	指押さえ+ナデ	A B C D F G	中や不良	赤褐色	暗褐色	
第19回9	8住	弥生	縁台	—	—	—	(9.7)	?	ナデ	B E F G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第19回10	9住	弥生	縁台	(9.1)	—	(13.2)	16.1	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	A B E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第21回1	10A住-10B住	弥生	甕	—	—	—	(1.6)	ナデ	ナデ	A C E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第21回2	10A住	弥生	甕	—	—	—	(4.4)	ナデ	ナデ	A C D E H	良好	灰褐色	明赤褐色	
第21回3	10A住-10B住	弥生	甕	—	—	—	(4.2)	ナデ	ナデ	A C E H	良好	暗茶褐色	暗褐色	
第21回4	10A住-10B住	弥生	甕	(30.5)	—	—	(4.3)	ハケ+ナデ	ナデ	A C E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第21回5	10A住	弥生	甕	—	—	(8.6)	(4.0)	ハケ+ナデ	指押さえ+ナデ	A C E H	良好	灰褐色	暗褐色	
第21回6	10A住-10B住	弥生	甕	—	—	(8.2)	(5.3)	ハケ+ナデ	ナデ	A B C E F	良好	明赤褐色	にぶい褐色	
第21回7	10A住-10B住	弥生	甕	—	—	(6.0)	(2.8)	ナデ	ナデ	A C D	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第21回8	10A住-10B住	弥生	鉢	(12.8)	(4.2)	6.7	ナデ?	ナデ?	ナデ?	B G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第21回9	10A住-10B住	弥生	高环	—	—	(3.2)	(19.0)	ナデ	ナデ	A C D E G	良好	灰白色	灰白色	
第21回10	10A住-10B住	弥生	甕	—	—	(8.6)	(6.9)	指押さえ+ナデ	ナデ	A C E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第22回1	11住	弥生	甕	(35.2)	—	—	(2.9)	ナデ	ハケ+ナデ	A B C D G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第22回2	11住	弥生	甕	(24.4)	—	—	(3.6)	?	?	B E	不良	褐色	褐色	
第22回3	11住	弥生	鉢	(15.6)	—	—	(6.3)	ナデ?	ナデ?	A C E	良好	青灰色	淡黄色	
第22回4	11住	弥生	甕	—	—	7.2	(3.2)	ハケ+ナデ	ナデ	B E G	良好	褐色	黑褐色	
第22回5	11住	弥生	甕	—	—	(6.2)	(5.0)	ハケ+ナデ	ナデ?	A C E F	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第22回6	11住	弥生	甕	—	—	(7.8)	(6.0)	ナデ	ナデ	A C E	良好	褐色	外面上工具ナデ	
第22回7	11住	弥生	甕	—	—	(6.1)	(3.1)	ハケ+ナデ	ナデ	A C E F	良好	褐色	浅黄褐色	
第22回8	11住	弥生	甕?	—	—	(4.8)	?	ナデ?	ナデ?	B E	良好	明赤褐色	外面上スズ付着	
第23回1	12A住	弥生	甕	—	—	—	(3.7)	ナデ	ナデ	C D E H	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	

第4表 出土器物観察表

種目番号	遺構名	種別	留種	法 番		調 整		新土	焼成	色 調		備 考		
				口径	側面径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
第2382	12A住	甕生	甕	(16.4)	—	—	(3.6)	ナデ?	ナデ	DH	良好	灰褐色	浅黄色	南面土坑
第2383	12A住	甕生	鉢?	—	—	(14.4)	(5.9)	?	?	ACDEF	不良	灰褐色	灰褐色	
第2384	12A住	甕生	甕	—	—	(5.3)	(5.5)	ナデ	ナデ	H	良好	浅黄色	浅黄色	
第2385	12A住	甕生	手取土量(B)	(4.8)	—	—	(4.0)	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	A BE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第2581	13住	甕生	甕	(26.8)	—	—	(5.6)	ナデ	ナデ	A DE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第2582	13住	甕生	甕	(22.4)	—	—	(12.1)	ハケ・ナデ	ナデ	A EF	良好	にぶい黄褐色	浅黄色	内面は工具ナデ
第2583	13住	甕生	鉢	(24.8)	(26.6)	(25.0)	—	ナデ?	ナデ?	ABGH	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	No.3
第2584	13住	甕生	甕	—	—	(6.0)	(2.7)	?	?	A EH	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	
第2585	13住	甕生	甕	(17.0)	—	—	(6.6)	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	ABD	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第2586	13住	甕生	甕	(16.8)	—	—	(4.0)	ナデ	指揮さえ・ナデ	ABCDE	やや不良	赤褐色	赤褐色	
第2587	13住	甕生	甕	—	—	(27.0)	(16.0)	ハケ・ナデ	指揮さえ・ハケ・ナデ	A BE	良好	にぶい黄褐色	灰褐色	
第2588	13住	甕生	手取土量(B)	(5.3)	13	3.6	—	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	ABDFG	良好	浅黄色	浅黄色	外面スス付着
第2589	13住	甕生	器台	(14.4)	—	—	(9.4)	指揮さえ・ナデ	指揮さえ・ナデ	ABDEF	やや不良	赤褐色	赤褐色	
第25810	13住	甕生	器台	—	—	(14.2)	(7.1)	タキナ	ナデ	A EBD	良好	にぶい黄褐色	灰褐色	工具痕
第2681	14住	甕生	甕	—	—	(8.9)	(2.9)	ナデ	ナデ	ACE	良好	明黄色	灰褐色	
第2881	15住	甕生	甕	—	—	—	(8.8)	ナデ	ナデ	A DEF	良好	橙色	浅黄色	
第2882	15住	甕生	甕	—	—	—	(3.2)	ナデ	ナデ	AC	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第3081	16住	甕生	甕	—	—	—	(5.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A EH	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第3082	16住	甕生	甕	(7.8)	(16.2)	—	(9.3)	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	ACDH	やや不良	暗褐色	淡黄色	
第3083	16住	甕生	甕	(22.4)	—	—	(7.8)	ナデ	ナデ	ADEFH	良好	明黄色	浅黄色	にぶい黄褐色
第3084	16住	甕生	甕	(44.0)	(47.5)	—	(25.5)	指揮さえ・ハケ・ナデ	ナデ	BE	良好	にぶい黄褐色	灰褐色	流れ込み
第3085	16住	甕生	鉢	(21.7)	—	7.2	12.5	ナデ?ケズリ	指揮さえ・ナデ	ACDE	良好	浅黄色	浅黄色	工具痕
第3086	16住	甕生	甕	—	—	(7.4)	(7.0)	ハケ?・ナデ	ナデ	ACDEF	良好	淡黄色	淡黄色	内面に工具痕あり
第3087	16住	甕生	甕	—	—	(8.3)	(7.4)	ナデ	ナデ	A DE	良好	黄褐色	淡黄色	スス付着
第3281	17住	甕生	甕	—	—	—	(4.1)	?	?	ACEH	良好	赤褐色	赤褐色	丹塗り
第3282	17住	甕生	高杯	(25.4)	—	(6.7)	—	ハケ?・ナデ	—	B CDE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第3283	17住	甕生	甕	—	—	—	(7.7)	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	A EF	良好	橙色	暗褐色	
第3284	17住	甕生	甕	(17.7)	—	—	(7.1)	ナデ	ナデ	A EFD	良好	浅黄色	浅黄色	
第3285	17住	甕生	鉢	(18.2)	(17.2)	7.2	14.3	ハケ?・ナデ	指揮さえ・ナデ	B E G	良好	浅黄色	浅黄色	
第3286	17住	甕生	甕	—	15.2	6.8	(1.26)	指揮さえ・ハケ・ナデ	指揮さえ・ハケ・ナデ	ABDEGH	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	スス付着
第3287	17住	甕生	甕	—	(27.0)	—	(10.6)	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	ABC E	良好	暗褐色	暗褐色	突然に接合痕残る
第3288	17住	甕生	甕	—	—	(7.9)	(2.9)	ナデ	?	ABEG	良好	淡黄色	淡黄色	内面にスス付着
第3289	17住	甕生	手取土量(B)	(9.0)	—	(6.5)	—	指揮さえ	指揮さえ	ACDE	やや不良	灰褐色	灰褐色	
第3481	18住	甕生	甕	(42.1)	(53.4)	—	(63.0)	指揮え?・ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	ACDE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	中層・外層スス付着
第3482	18住	甕生	甕	24.2	27.7	7.0	37.1	ハケ?・ナデ	ナデ	AE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	中層・下層・外層スス付着
第3483	18住	甕生	甕	(24.6)	(29.0)	(7.8)	35.0	ナデ	ナデ	ABEG	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	上層
第3484	18住	甕生	鉢	16.0	17.0	8.0	21.1	指揮え?・ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ?・ナデ	ABC	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第3485	18住	甕生	鉢	(13.0)	(14.8)	5.2	14.9	ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ?・ナデ	BEFG	良好	淡黄色	淡黄色	中層・下層・スス付着
第3486	18住	甕生	鉢	(13.2)	(14.8)	(2.1)	13.7	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	A EF	良好	にぶい黄褐色	暗褐色	
第3487	18住	甕生	鉢	13.1	—	6.4	11.7	ナデ	指揮え?・ナデ	A D EG	良好	浅黄色	灰褐色	
第3488	18住	甕生	鉢	—	9.6	5.4	16.9	指揮え?・ナデ	指揮え?・ハケ	BD	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	上層
第3489	18住	甕生	鉢	—	—	9.2	6.4	ナデ?	ナデ?	ABEF	不良	暗褐色	暗褐色	
第3581	18住	甕生	甕	30.2	—	—	(18.2)	指揮え?・ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ?・ナデ	A EF	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第3582	18住	甕生	甕	(22.8)	—	—	(11.4)	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	A BE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	中層
第3583	18住	甕生	甕	—	(22.8)	7.7	(18.0)	ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ	ACEF	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	スス付着
第3584	18住	甕生	鉢	—	—	—	(7.6)	ナデ	指揮え?・ナデ	AD E F	やや不良	暗褐色	暗褐色	
第3585	18住	甕生	甕	—	(24.6)	7.2	27.5	ハケ?・ナデ	ハケ?・ナデ	AD H	良好	浅黄色	黑色	下層・スス付着
第3586	18住	甕生	甕	(7.4)	(22.4)	6.0	16.1	ナデ	指揮え?・ナデ	A C E	良好	浅黄色	黑褐色	中層
第3587	18住	甕生	支脚	6.9	—	11.9	11.5	指揮え?・ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ?・ナデ	DEF	良好	浅黄色	浅黄色	中層
第3588	18住	甕生	支脚	9.0	—	14.2	10.3	指揮え?・ハケ?・ナデ	指揮え?・ハケ?・ナデ	ACDE	良好	淡黄色	淡黄色	中層

第5表 出土土器観察表

件名番号	遺物名	種別	形種	法量		調 整		新土	焼成	色 調		備 考	
				口径	脚部径	底径	底高	外面	内面	外面	内面		
第35回9	18往	弥生	縁台	11.1	—	(12.9)	17.9	脚押さえ・ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	AED	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 工具痕
第35回10	18往	弥生	縁台	8.1	—	(11.0)	16.8	指押さえ・ナデ	ナデ	B DG	良好	にぶい橙色	にぶい橙色 内面は工具ナデ
第35回11	18往	弥生	縁台	10.4	—	13.2	17.7	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACDE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色
第37回1	19往	弥生	高环	(33.4)	—	—	(1.9)	ナデ	ナデ	AC	良好	浅黄褐色	浅黄褐色 口縁部上面に朱残存
第37回2	19往	弥生	甕	(25.4)	—	—	(6.5)	ハケ・ナデ	ナデ	AC	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第37回3	19往	弥生	蓋	脚部	—	—	(7.9)	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 外面は工具ナデ
第37回4	19往	弥生	甕	—	—	(7.8)	(3.7)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACEH	良好	難色	にぶい黄褐色
第37回5	19往	弥生	甕	—	—	(8.1)	(3.8)	ハケ・ナデ	ナデ	AE	良好	にぶい黄褐色	黄褐色
第39回1	20往	弥生	甕	(34.8)	(31.8)	—	(17.6)	ハケ・ナデ	ナデ	AED	良好	浅黄色	浅黄色
第39回2	20往	弥生	甕	(15.2)	—	—	(10.0)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第39回3	20往	弥生	甕	—	—	—	(7.7)	ナデ?	ナデ?	BEG	良好	浅黄褐色	浅黄褐色
第39回4	20往	弥生	甕	—	—	(9.0)	(3.6)	ナデ	指押さえ・ナデ	ACE	良好	にぶい橙色	浅黄褐色 中央土坑
第39回5	20往	弥生	甕	8.2	—	4.9	5.1	ナデ	指押さえ・ナデ	ADE	良好	橙色	橙色 完形
第40回1	21往	弥生	縁台	—	—	(13.0)	(5.2)	ハケ	ハケ・ナデ	ABDEF	不良	暗赤褐色	暗赤褐色
第40回2	21往	弥生	縁台	6.9	—	10.2	16.6	ナデ	指押さえ・ナデ	ADEFH	良好	浅黄褐色	浅黄褐色 外面はナデ・工具ナデ
第40回3	21往	弥生	鉢	14.2	—	5.4	8.1	ナデ・タキナ	指押さえ・ナデ	BCDEG	良好	浅黄褐色	浅黄褐色
第40回4	21往	弥生	鉢	—	—	(7.0)	(8.1)	?	指押さえ・ナデ	ABCDE	不良	淡黄褐色	黑褐色
第41回1	22往	弥生	甕	(19.9)	—	—	(4.2)	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACE	良好	浅黄色	浅黄色
第41回2	22往	弥生	甕	(8.2)	(12.0)	(14.1)	—	ナデ	指押さえ・ナデ	ABCEG	良好	にぶい橙色	にぶい橙色 外面スヌ付着
第41回3	22往	弥生	鉢	(17.0)	—	—	(11.5)	ナデ	ハケ	ACEF	良好	難色	スヌ付着
第43回1	23往	弥生	甕	17.4	(19.9)	(6.1)	19.3	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ADE	良好	にぶい橙色	灰黒褐色 又ス付着
第43回2	23往	弥生	甕	(55.0)	(16.2)	—	(12.6)	ハケ	ナデ	AEH	良好	明赤褐色	明赤褐色
第43回3	23往	弥生	甕	(24.6)	—	—	(9.5)	指押さえ・ナデ	ハケ・ナデ	DEF	良好	にぶい橙色	浅黄褐色
第43回4	23往	弥生	甕	(32.8)	(31.2)	—	(15.7)	ナデ	ナデ	AED	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第43回5	23往	弥生	甕	(30.4)	(31.4)	—	(14.9)	ハケ・ナデ	ナデ	AEF	良好	浅黄褐色	難色
第43回6	23往	弥生	甕	(32.3)	(28.4)	—	(14.5)	ハケ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	AE	良好	浅黄褐色・難色	浅黄褐色 スヌ付着
第43回7	23往	弥生	甕	30.4	(31.2)	—	(17.5)	ハケ・ナデ	ナデ	ACE	良好	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色
第43回8	23往	弥生	甕	—	—	8.0	(16.7)	ハケ・ナデ	指押さえ・ナデ	ABEC	良好	にぶい難色	にぶい難色
第43回9	23往	弥生	高环	(18.4)	—	—	(9.9)	ハケ・ナデ	ナデ	ACE	良好	難色	にぶい難色 にぶい黒褐色
第43回10	23往	弥生	高环	—	—	—	(10.8)	ハケ	ナデ	ACE	良好	難色	難色
第43回11	23往	弥生	縁台	(5.8)	16.7	21.4	脚押さえ・ハケ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	AED	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第43回12	23往	弥生	縁台	14.4	—	17.3	20.6	脚押さえ・ハケ・ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	ABED	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第43回13	23往	弥生	縁台	(11.0)	—	(16.2)	18.0	脚押さえ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ADE	良好	難色	難色
第43回14	23往	弥生	縁台	—	—	(15.1)	(8.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 工具痕
第49回1	11建	瓦質	鉢	(31.0)	—	—	(8.4)	ナデ	ナデ	ABE	良好	灰白色	灰白色
第49回2	17建	白磁	小皿	(7.8)	—	5.0	1.6	—	—	織密	良好	白色	白色 口縁部露胎
第50回1	1満	青磁	碗	—	—	—	(4.7)	—	—	織密	良好	青綠色	青綠色
第50回2	1満	青磁	碗	—	—	—	(5.6)	(2.1)	—	織密	良好	青綠色	青綠色
第53回1	1堅	弥生	甕	(28.6)	—	—	(6.1)	ハケ・ナデ	ナデ	ACE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第53回2	1堅	弥生	甕	(24.4)	—	—	(3.7)	?	?	—	—	—	—
第53回3	1堅	弥生	甕	—	—	(11.4)	(3.2)	ハケ?・ナデ?	ハケ?・ナデ?	ACEF	ゆる不直	淡赤褐色	淡褐色
第53回4	2堅	弥生	縁台	(10.8)	—	—	(7.0)	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACFH	良好	淡黄褐色	淡褐色
第53回5	2堅	弥生	甕	—	—	(7.4)	(4.2)	ナデ?	ナデ?	ACDF	良好	淡赤褐色	淡褐色
第53回6	1円周	弥生	甕	—	—	—	(7.3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ADEF	良好	浅褐色	浅褐色
第62回1	7土	弥生	甕	(18.0)	—	—	(5.5)	ハケ・ナデ	ナデ	BEFG	良好	灰白色	灰白色
第62回2	7土	弥生	甕	(17.8)	(16.8)	—	(7.5)	ナデ	指押さえ・ナデ	ACDE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色
第62回3	7土	弥生	甕	(26.2)	(27.0)	—	(11.6)	ハケ・ナデ	ナデ	ACDE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色
第62回4	13土	弥生	高环	—	—	—	(4.3)	ミガキ?	ミガキ?	ABCHE	良好	暗赤褐色	暗赤褐色
第62回5	13土	弥生	甕	(7.0)	—	—	(1.7)	ナデ	ナデ	ACE	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第62回6	14土	弥生	甕	—	—	—	(2.6)	ナデ?	ナデ?	ACE	良好	灰黒褐色	にぶい黄褐色

第6表 出土土器観察表

鉢目番号	遺構名	種別	留種	法 番		調 整		新土	焼成	色 調		備 考		
				口径	側面径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
第6287	15土	券生	裏	(30.2)	—	—	(8.0)	ハケ・ナデ	ナデ	ABCDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第6288	15土	券生	裏	(29.5)	—	—	(5.8)	ナデ?	ナデ?	ACE	良好	にぶい黄褐色	灰褐色	
第6289	15土	券生	裏	(28.0) (28.3)	—	(10.8)	ハケ・ナデ?	ナデ?	ACE	良好	灰褐色	にぶい褐色		
第62810	15土	券生	裏	—	—	—	(3.7)	ナデ	指押さえ・ハケ・ナデ	ABCDE	良好	黄褐色	黃褐色	
第62811	15土	券生	裏	—	—	(7.0)	(3.7)	ナデ	ナデ	ACE	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第62812	16土	券生	留台	(12.2)	—	—	4.5	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACDE	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第62813	16土	券生	裏	—	—	(9.0)	(3.1)	ナデ	ナデ	ACDE	良好	浅黄褐色	同白色	
第62814	17土	券生	高杯	—	—	(14.6)	(3.7)	ハケ	ナデ?	AEE	良好	明赤褐色	暗褐色・鉄錆	
第62815	19土	青磁	碗	—	—	—	(2.0)	—	—	織密	良好	白色	白色	
第62816	19土	青磁	碗	—	—	—	(4.8)	—	—	織密	良好	青綠色	青綠色	
第62817	19土	青磁	皿	22.6	—	10.6	5.3	—	—	織密	良好	灰オリーブ色	灰オリーブ色	
第62818	20土	券生	皿	—	(48.7)	—	(17.8)	ハケ・ナデ?	ナデ?	ABC	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第62819	20土	券生	裏	—	—	(5.1)	ナデ?	ナデ?	BCEH	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第62820	20土	券生	皿	—	—	(7.6)	(4.1)	?	指押さえ・ナデ?	ACDE	不良	淡茶褐色	同白色	
第62821	22土	券生	裏	—	—	(7.6)	(4.1)	ナデ	ナデ	AC	良好	浅黄色	浅黄色	
第62822	22土	券生	裏	—	—	(8.2)	(4.3)	ナデ?	指押さえ・ナデ	ABDEF	良好	淡赤褐色	淡茶褐色	
第62823	26土	券生	皿	(15.2)	—	—	(14.9)	ハケ・ナデ?	指押さえ・ハケ・ナデ?	ABDEG	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第62824	26土	券生	裏	—	—	(2.4)	?	?	ABCE	良好	灰黄色	灰黄色		
第62825	26土	券生	裏	—	—	(7.8)	(2.7)	ナデ	指押さえ・ナデ	ACE	良好	橙色	にぶい褐色	
第62826	28土	券生	鉢	8.9	—	4.0	7.8	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	ACDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第62827	29土	券生	裏	—	—	(1.1)	ナデ	ナデ	ACE	良好	黄褐色	黄褐色		
第62828	31土	券生	裏	—	—	(2.5)	ナデ	ナデ	ABDE	不良	淡赤褐色	淡茶褐色	口縁部陶面には工具痕	
第62829	31土	券生	裏	—	—	(6.0)	ハケ・ナデ?	ナデ?	ADEH	良好	橙色	にぶい黄褐色		
第62830	31土	券生	裏	—	—	(7.4)	(3.7)	ナデ	指押さえ・ナデ	ABC E	良好	暗赤褐色	暗茶褐色	
第62831	31土	券生	裏	—	—	(8.0)	(4.0)	ハケ・ナデ?	?	ADEF	良好	明赤褐色	浅黄褐色	
第62832	32土	券生	皿	(31.8)	—	—	(14.1)	?	指押さえ・ナデ	ABCD E	良好	黄褐色	黄褐色	
第6381	35土	券生	留台	—	(10.0)	(3.8)	ナデ?	ナデ?	ABC	良好	橙色	橙色	工具ナデか?	
第6382	37土	券生	裏	17.2	19.0	5.9	22.9	ハケ・ナデ?	指押さえ・ハケ・ナデ?	AED	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第6383	40土	券生	裏	(24.8)	(24.8)	—	(13.1)	ナデ?	ナデ?	AB CDE	良好	暗茶褐色	暗褐色	
第6384	48土	券生	裏	15.0	18.8	6.6	21.3	タタキ・ナデ?	指押さえ・ナデ?	ADEH	良好	橙色	橙色	スス付着・ほぼ完形
第6385	48土	券生	裏	(30.0)	(29.7)	(8.0)	34.6	ハケ・ナデ?	ハケ・ナデ?	ACDE	良好	灰褐色	にぶい黄褐色	
第6386	48土	券生	裏	(28.8)	—	—	(4.1)	ナデ?	ナデ?	ACDEF	良好	暗茶褐色	茶褐色	一部スス付着
第6387	48土	券生	裏	—	—	(10.4)	(4.9)	?	指押さえ	ACEF	やや不良	淡赤褐色	黄褐色	
第6388	48土	券生	裏	—	—	(7.6)	(3.8)	?	?	ABCE	良好	淡赤褐色	暗茶褐色	
第6389	49土	券生	裏	(29.4)	—	(1.7)	ナデ?	ナデ?	ACDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		
第63810	57土	券生	裏	—	—	(1.7)	ナデ・ミガキ?	ナデ?	ACDE	良好	淡赤褐色	淡黑褐色	丹塗り	
第63811	57土	券生	裏	—	—	(2.5)	ナデ?	ナデ?	ACEF	良好	暗茶褐色	暗茶褐色		
第63812	57土	券生	裏	—	—	(7.0)	(3.0)	?	指押さえ	ACE	不良	淡赤褐色	淡黑褐色	
第63813	59土	券生	鉢	16.6	15.2	2.2	14.0	ナデ?	指押さえ・ナデ	AEH	良好	赤褐色	黑色	
第63814	60土	券生	裏	—	—	—	(2.3)	ナデ?	ナデ?	ABE	良好	にぶい黄褐色	灰白色	中擦?
第63815	62土	券生	裏	—	—	(4.2)	?	?	ACEF	良好	暗茶褐色	暗茶褐色		
第63816	62土	券生	裏	—	—	(8.0)	(4.1)	ハケ・ナデ?	指押さえ・ナデ	ABCDE	やや不良	赤褐色	黑色	
第63817	63土	瓦質	裏	(23.8)	—	—	(9.8)	塔子目タタキ・ナデ?	ハケ・ナデ?	AE	良好	にぶい褐色	灰褐色	
第63818	63土	瓦質	鉢	—	—	(7.8)	(4.1)	タタキ・ハケ・ナデ?	ハケ・ナデ?	ABCE	良好	赤灰褐色	灰褐色	
第63819	64土	券生	裏	—	—	(5.5)	ハケ・ナデ?	ナデ?	ABCE	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色		
第63820	64土	券生	裏	—	—	(3.9)	?	?	ADE	不良	淡赤褐色	淡茶褐色		
第63821	65土	券生	裏	—	—	(2.9)	?	?	ACDE	良好	浅黄色	浅褐色		
第63822	65土	券生	裏	—	—	(5.0)	(2.2)	ハケ・ナデ?	指押さえ	ACD	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第63823	65土	券生	裏	—	—	(8.0)	(3.8)	ハケ・ナデ?	指押さえ・ナデ	ABC E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第63824	65土	券生	裏	—	—	(9.4)	(4.7)	?	ハケ・指押さえ	ABC E	不良	淡赤褐色	灰褐色	

第7表 出土土器観察表

神岡番号	遺物名	種別	形種	法量		調整		釉土	焼成	色調		備考	
				口徑	脚部径	底径	周高	外面	内面	外面	内面		
第63回25	67土	弥生	甕	—	—	—	(1.8)	ナデ	ナデ	A C D E F	良好	黒褐色	赤褐色 外面にスス付着
第63回26	69土	弥生	甕	C38.4	(43.4)	—	(43.6)	指押丸・ハコナデ	ハケ・ナデ	A C E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第63回27	70土	弥生	?	—	—	—	(2.9)	ナデ?	ナデ?	A C E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色
第63回28	70土	弥生	甕	—	—	—	(1.4)	ナデ	ナデ	A C D E	良好	暗茶褐色	黄褐色
第63回29	76土	弥生	甕	—	—	—	(6.4)	ハケ・ナデ	ナデ	A C E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色 断面三角形突角2条
第65回1	1彌栄	弥生	甕	34.8	34.4	8.8	39.8	指押丸・ハコナデ	指押丸・ナデ	A C D E	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 内面・外面にスス付着
第65回2	P1	弥生	鉢	(15.0)	—	4.9	12.1	指押丸・ナデ	指押丸・ナデ	A D E	良好	にぶい褐色	にぶい褐色
第65回2	P1	弥生	鉢	12.2	—	4.2	9.3	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A E F G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色 スス付着・工具痕・ほぼ完形
第65回3	P2	弥生	壺	14.5	4.3	5.7	16.0	?	指押丸・ナデ	A B D E	良好	丹絞り	
第65回4	一柄	弥生	壺	C20.8	—	—	(15.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	B E	良好	にぶい褐色	下層
第65回5	一柄	弥生	手作土量(印)	(6.8)	4.9	6.5	ナデ	ナデ	ナデ	A B D	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 外面スス付着
第65回6	一柄	弥生	鉢	(8.4)	7.1	4.2	ハケ・ナデ	ナデ	ナデ	B E	良好	黄褐色	黄褐色 スス付着
第65回7	一柄	弥生	手作土量(印)	4.8	—	2.3	曲押さえ	指押丸	指押丸	A C E	良好	灰褐色	浅黄褐色
第65回8	一柄	弥生	鉢	10.5	—	4.4	5.7	ハケ・ナデ	指押丸・ハコナデ	A E F H	良好	浅黄褐色	浅黄褐色 内面は工具ナデ
第65回9	一柄	弥生	壺	7.5	—	8.5	8.5	ハケ・ナデ	ナデ	A E G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色 内面は指ナデ・工具ナデ
第65回10	一柄	弥生	壺	(12.9)	—	16.4	17.3	指押丸・ナデ	指押丸・工具ナデ	A D H	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色

法量の単位はcm。 ()書きは、残存と復原を表す。釉土: A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黑色粒子 G:雲母 H:砂粒

第8表 石器観察表

神岡番号	遺物名	形種	石材	長さ()	幅()	厚さ()	重さ()	備考	
第67回1	11住	石顎	郡島産凝灰岩	1.8	1.3	0.3	0.4	完形	
第67回2	P3	石顎	サヌカイト	1.7	1.3	0.3	0.4	完形	
第67回3	P4	石顎	サヌカイト?	2.0	1.2	0.3	0.6	完形	
第67回4	P5	石顎	黒曜岩	1.9	1.3	0.4	0.7	完形、鰐齿痕	
第67回5	3住	石庖丁	史山岩	(14.3)	3.7	0.7	51.4	ほぼ完形	
第67回6	3住	石庖丁	史山岩	(6.6)	4.2	0.7	20.6		
第67回7	10A住	石庖丁	真岩	(5.3)	3.8	0.7	17.8		
第67回8	10A住	石庖丁	結晶片岩	(5.9)	4.1	0.6	22.4		
第67回9	10A住	石庖丁	結晶片岩	(4.7)	3.8	0.5	9.5		
第67回10	31土	石庖丁	凝灰岩	(5.1)	3.8	0.4	17.1	立岩產	
第67回11	21住	石庖丁	史山岩	11.0	3.8	0.5	32.4	ほぼ完形	
第67回12	9建	石庖丁	史山岩	(8.9)	3.2	0.5	28.8		
第67回13	一柄	石庖丁	凝灰岩	(5.6)	4.7	0.6	30.1	立岩產	
第67回14	一柄	石庖丁	史山岩	(7.4)	3.8	0.5	19.0		
第67回15	一柄	石庖丁	史山岩	(6.7)	(4.3)	0.8	25.7		
第67回16	一柄	石庖丁	史山岩	(5.2)	4.0	0.8	22.3		
第68回1	1瓶	磨製石斧	史山岩	10.8	5.8	1.7	184.2	完形	
第68回2	66土	磨製石斧	史山岩	(7.9)	4.8	2.1	140.3		
第68回3	2住	砾石	砂岩	(6.7)	4.0	2.4	101.5		
第68回4	10A住	砾石	砂岩	(2.4)	2.3	1.3	44.4		
第68回5	20住	砾石	砂岩	7.5	3.2	2.2	98.8	ほぼ完形	
第68回6	23住	砾石	砂岩	9.0	2.3	1.2	42.6	完形	
第68回7	21住	砾石	鍛錆砂岩	(16.5)	8.6	2.2	619.0		
第68回8	10A住	砾石	鍛錆砂岩	(9.2)	4.1	2.6	169.0		

第9表 石製品観察表

神岡番号	遺物名	形種	石材	長さ()	幅()	厚さ()	重さ()	備考	
第60回1	63土	パレン板石製品	滑石	7.9	6.3	1.0	84.5	一部、スス付着	

第10表 鉄器観察表

神岡番号	遺物名	形種	石材	長さ()	幅()	厚さ()	重さ()	備考	
第60回2	15住	鐵鉗	—	3.6	1.5	0.3	3.6	一部、スス付着	

第11表 土製品観察表

神岡番号	遺物名	形種	石材	長さ()	幅()	厚さ()	重さ()	備考	
第69回3	14建	土玉	—	1.5	1.4	1.5	2.5	P 2	



遺跡全景（北より）



遺跡全景（真上より）

写真図版 2



1号竪穴住居



2号竪穴住居



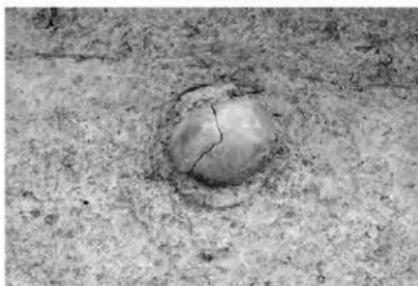
3号竪穴住居



3号竪穴住居遺物出土状況



4号竪穴住居



4号竪穴住居遺物出土状況



5号竪穴住居



6号竪穴住居



7号竪穴住居



7号竪穴住居遺物出土状況



7号竪穴住居遺物出土状況



8・9号竪穴住居



10号AB竪穴住居



10号AB竪穴住居遺物出土状況



11号竪穴住居



12号AB竪穴住居

写真図版 4



13号竪穴住居



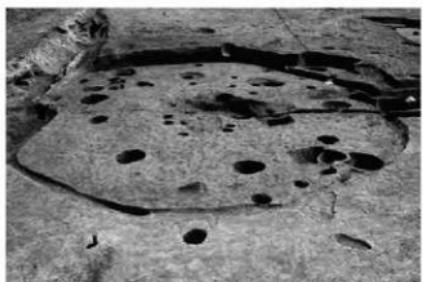
13号竪穴住居遺物出土状況



14号竪穴住居



15号竪穴住居



16号竪穴住居



17号竪穴住居



18号竪穴住居



18号竪穴住居遺物出土状況



18号竪穴住居遺物出土状況



18号竪穴住居遺物出土状況



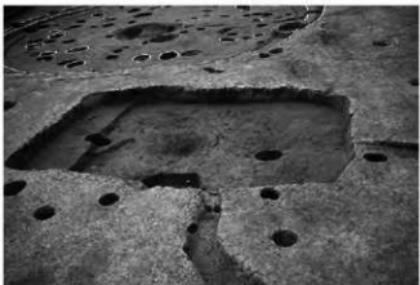
19号竪穴住居



20号竪穴住居



20号竪穴住居遺物出土状況



21号竪穴住居



22号竪穴住居



23号竪穴住居

写真図版 6



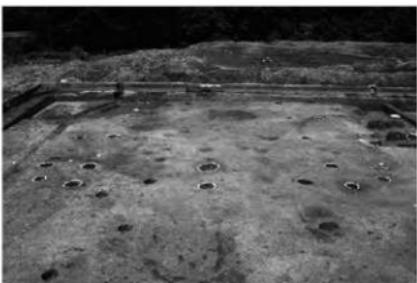
23号竪穴住居遺物出土状況



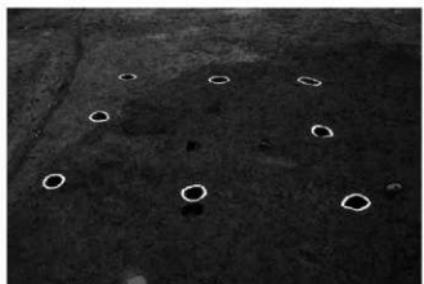
1号掘立柱建物



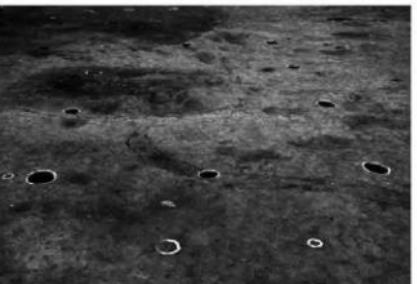
11号掘立柱建物



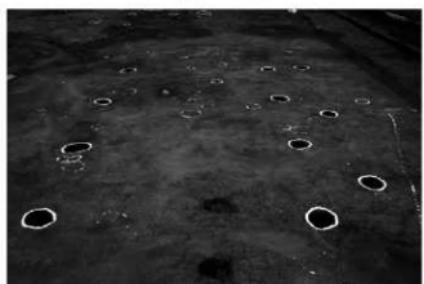
12号掘立柱建物



13号掘立柱建物



14号掘立柱建物



15号掘立柱建物



16号掘立柱建物



17号掘立柱建物



19号掘立柱建物



20号掘立柱建物



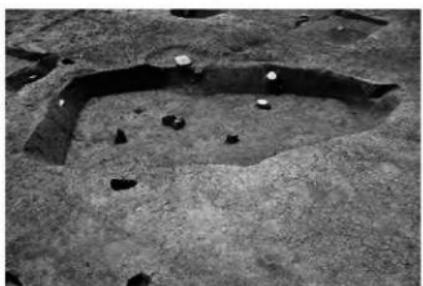
22号掘立柱建物



1号溝



1号溝土層



1号竪穴遺構



2号竪穴遺構

写真図版 8



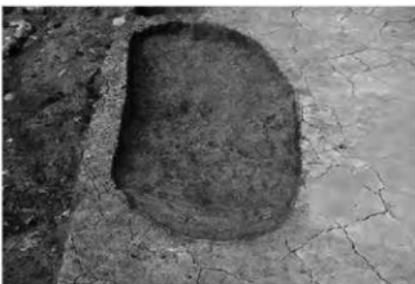
1号円形周溝状遺構



1号円形周溝状遺構遺物状況



1号土坑



2号土坑



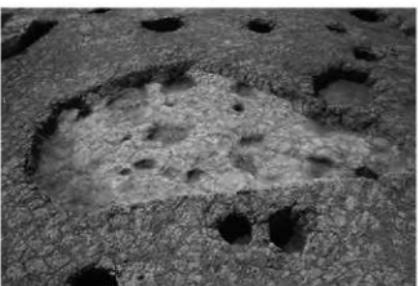
3号土坑



4号土坑



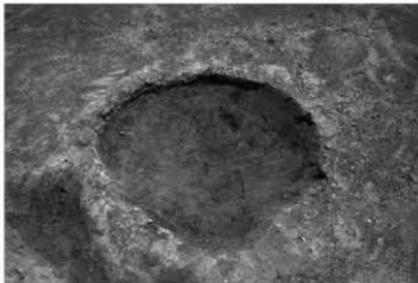
5号土坑



6号土坑



7号土坑



8号土坑



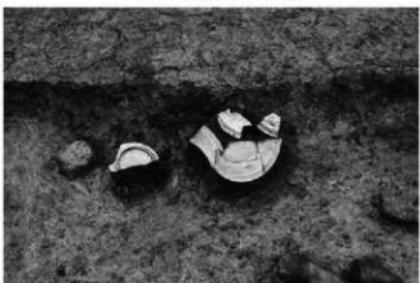
15号土坑



15号土坑遺物出土状況



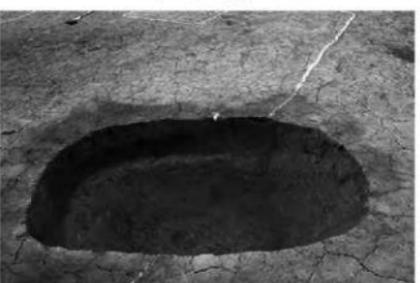
19号土坑



19号土坑遺物出土状況



20号土坑遺物出土状況

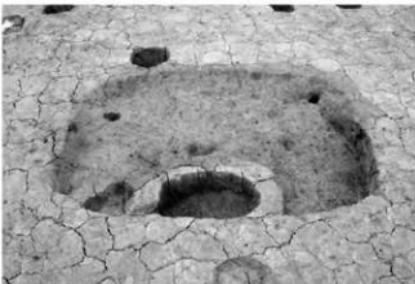


21号土坑

写真図版 10



22号土坑



25号土坑



30号土坑



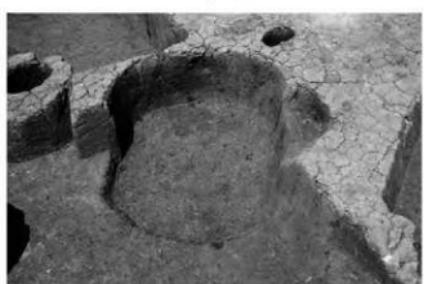
33号土坑



39号土坑



40号土坑



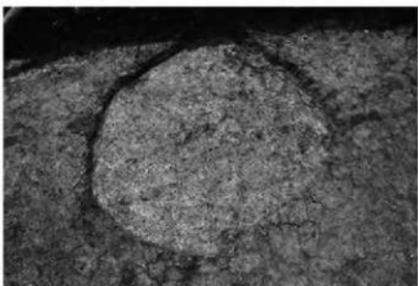
42号土坑



43号土坑



45号土坑



46号土坑



48号土坑



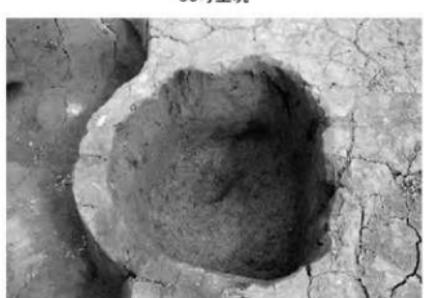
48号土坑遺物出土状況



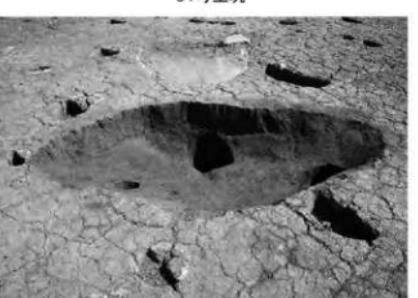
50号土坑



51号土坑



54号土坑



55号土坑

写真図版 12



56号土坑



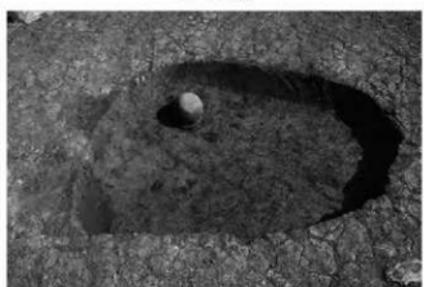
56号土坑土層



57号土坑



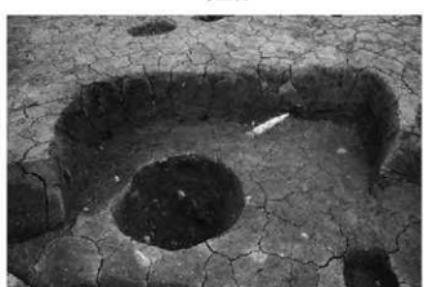
58号土坑



59号土坑



60号土坑



61号土坑



62号土坑



64号土坑



66号土坑



67号土坑



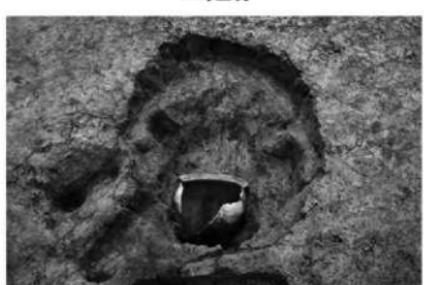
69号土坑



71号土坑



72号土坑



1号壺棺墓



1号壺棺墓

写真図版 14



6-2



6-4



6-5



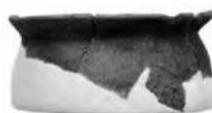
6-6



8-1



8-2



8-3



8-4



8-5



8-6



8-8



8-9



8-10



8-11



8-12



8-13



8-14



8-15



8-16



8-17



8-18



8-19



8-20



8-21



8-22



8-23



8-24



8-25



8-26



8-27



8-28



8-29



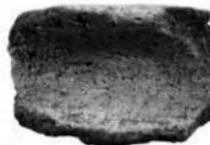
8-30



10-1



10-2



10-3

写真図版 16



10-4



10-5



10-6



10-7



10-8



10-9



12-2



12-3



12-5



12-6



12-7



12-9



14-1



14-2



14-3



16-1



16-2



16-3



16-4



16-5



16-6



16-8



16-9



16-10



16-11



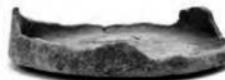
16-12



16-13



16-13



16-13



19-1



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



19-8

写真図版 18



19-9



19-10



21-4



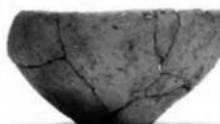
21-5



21-6



21-7



21-8



21-10



22-2



22-3



22-4



22-5



22-6



22-7



22-8



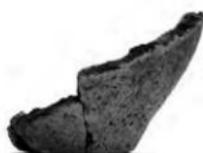
23-1



23-2



23-3



23-4



23-5



25-1



25-2



25-3



25-4



25-5



25-6



25-7



25-8



25-10



26-1



28-1



28-2



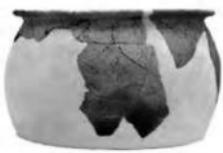
30-1



30-2



30-3



30-4

写真図版 20



30-5



30-7



32-1



32-2



32-4



32-5



32-6



32-7



32-8



32-9



34-1



34-2



34-3



34-4



34-5



34-6



34-7



34-8



34-9



35-1



35-2



35-3



35-4



35-5



35-6



35-7



35-8



35-9



35-10



35-11



37-1



37-2



37-3



37-5



39-1



39-2

写真図版 22



39-3



39-4



39-5



40-2



40-3



41-1



41-2



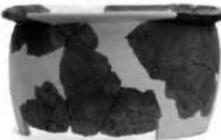
41-3



43-1



43-3



43-4



43-5



43-6



43-7



43-8



43-9



43-10



43-11



43-12



43-13



43-14



49-1



49-2



50-1



50-2



53-1



53-4



53-6



62-1



62-2



62-4



62-5



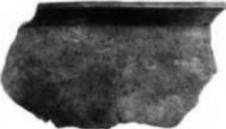
62-6



62-7



62-8



62-9

写真図版 24



62-11



62-12



62-14



62-15



62-16



62-17



62-17



62-18



62-21



62-23



62-24



62-25



62-26



62-27



62-29



62-31



62-32



63-1



63-2



63-3



63-4



63-5



63-6



63-7



63-9



63-13



63-14



63-17



63-21



63-22



63-23



63-27



63-29



65



66-1



66-2

写真図版 26



66-3



66-4



66-5



66-6



66-7



66-8



66-9



66-10



67-1



67-2



67-3



67-4



67-5



67-6



67-7



67-8



67-9



67-10



67-11



67-12



67-13



67-14



67-15



67-16



68-1



68-2



68-3



68-4



68-5



68-6



68-7



68-8



69-1 (表)



69-1 (裏)



69-2



69-3

報告書抄録

ふりがな	たかのいせき
書名	高野遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかのいせき 高野遺跡	おおいたけんの た し 大分県日田市 大字夜明 あさかみ 字高野	44204-6	651004	33°19'59"	130°52'34"	20030116～ 20031020	9,200	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高野遺跡	集落	弥生 中世	竪穴住居跡・掘立柱建物・ 竪穴造構・土坑・甕棺墓 掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器・石器・鐵器 青磁・白磁・瓦器 石製品・土製品	

高野遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第65集

2006年3月15日

編集 日田市教育委員会文化財保護課
 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
 発行 日田市教育委員会
 〒877-0023 大分県日田市田島2-6-1
 印刷 尾花印刷有限会社
 〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8